
魔法少女リリカルなのはStrikerS The Phantom Darkness

星光の殲滅者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers The Phantom
om Darknes

【Nコード】

N17220

【作者名】

星光の殲滅者

【あらすじ】

魔法少女リリカルなのはStrikers本編に一部オリジナルとオリキャラを追加した物語です。

追記：タイトル変更と共に続編とまとめて2部構成になっております。

第0話 旧友との再会（前書き）

初めての作品なのでおかしな点も多々あると思いますが温かい目でご覧ください^^

第0話 旧友との再会

「一体何だろうな……久しぶりに連絡が来たと思ったら急にこんなところに呼び出すだなんて……」

平均より少しばかり背の高い黒髪の青年、ダークは自らが所属する組織「時空管理局」が管理するとある施設の喫茶スペースに到着すると周りを見渡す。

普段はこのような場所を利用するのが少ないダークが喫茶スペースに來た理由、それはとある人物がダークをここへ呼び出した為だった。

「あつダーク！ こつちや、こつち」

久しぶりに聞く明るい声で探し人を見つけたダークは、その人物が座る席の向かい側の席へと座る。

ダークが自分の対面に座ると、その人物は満足そうに笑みを浮かべた。

「久しぶりだな、はやて……直接会うのは一年前の時以来か？」

「そうやねえ……ダークも相変わらず頑張ってるみたいやん」

対面に座る茶髪の少女、時空管理局の中では能力の高さ故に「歩くロストロギア」等と呼ばれている八神はやては、軽く笑みを浮かべる。

「はやても頑張ってるそうじゃないか。確か新しい部隊を作るんだっけ？ この前あの三人から聞いたぞ」

あの3人とはダークが近距離戦の練習に付き合ってもらってるはや
ヴォルケンリッター
ての守護騎士のヴィータ、シグナム、ザフィーラの事である。

「そうなんよ……実はな、今日はその事について話があつてわざわざ呼び出したんよ」

事前に注文していたらしいコーヒーを飲んだはやての表情が真面目な表情へと変わる。

「前もって話を聞いているなら察しはついてると思っけど、実はダークに私の部隊に入って欲しいんよ……頼めるか？」

「はやての部隊に、か……」

「やっぱあかんかな？」

少し語尾を濁すように話すダークの態度に、はやては少し不安そうに聞き返す。

その直後に話し出すダークの顔は少しにやけていた。

「そんな事があるかよ。元々連絡が来たときから察しはついてたし……俺が断るとでも思ったか？」

「なっ……もうっ冷や冷やさせんといてよ！」

ダークの態度に、はやては顔を真っ赤にして声を張り上げる。

「まあまあ……あの2人も同じ事を言ったと思うが、俺達は親友だ

る？ そんな水臭い事言わずに、気軽に言ってくれば良かったのにさ」

「そう言ってもらえると助かるわ。ほんまにありがとう」

「それにむしろそういうのは楽しみだ。なんたってはやての創る部隊だからな」

「もう、なのはちゃんと同じような事言ってる」

話している内に落ち着いたのか、はやては再び笑みを浮かべていた。

「まああいつらとも久々の再会だし……本当に楽しみだな」

それにつられてか、同じように笑うダークとはやてはしばしの間、他愛もない話を続ける。

「あつ……もうこんな時間か」

気がつくとなんかの時間が経ってしまった。

「じゃあうちはそろそろ行くから、今度また収集かけるでその時は頼むな」

「ああ。またな」

ダークの答えに満足したはやては、この場を後にする。

一人残ったダークは、注文していたコーヒーを一気に飲み干した。

「それにしても新たな部隊か……なのはとはあの事件以来……か」

ダークはそつと呟くとそつと立ちあがりその場を去っていった。

第0話 旧友との再会（後書き）

とりあえず投降完了しましたw
良ければ感想お願いします^^

オリキャラ紹介（前書き）

本作の主人公の紹介です^^

オリキャラ紹介

ダーク・アルジェント

年齢 19歳

性別 男

出身：第97管理外世界「地球」極東地区日本・海鳴市

階級：一等空尉

役職：戦技教導官

使用デバイス：デスクロニクル・ネクスト

魔法術式：ミッドチルダ式・空戦S+ランク（普段はリミッターが掛けられていて空戦AAランク）

魔導師の青年。別世界の人間だがダーク生誕前に両親が海鳴市に住み始めたので本当の出身は不明。生まれてすぐに両親が死んでから孤児院に預けられるがある人物に引き取られて育てられ、その後海鳴市に再び帰郷した。なのは達とは小学校が同じの同級生でその頃から親友であったが、ダーク自身が魔導師となって共に戦い始めたのは闇の書事件のすぐ後である。

そして、数年経ったある日、親友である八神はやてに収集され機動六課に誘われその誘いを承認し六課に入る。

そしてなのはとフェイトのサポートという事でスターズとライトニングの2つの部隊の兼務部隊長を受け持っているがフェイトが執務官として空ける事が多いため基本はライトニングの2人の指導を受け持っている。

デバイスのデスクロニクル・ネクストはダークが魔導師になった時からの相棒で普段は黒い剣型のアクセサリとして首からかけてい

る。

性格は普段は大人しく、若干楽観的だが仲間が傷つけられたり大切な者を守る為なら命さえ捨てても守ろうとする一種の自己犠牲の精神が強く、技の一部にもそれが出ている。また仲間を傷つけた者には容赦しない残酷さも秘めている。

幼馴染なのも幸いして六課の3人の隊長陣と仲が良い事を六課の男達からは密かに妬まれている。

オリキャラ紹介（後書き）

ダーク「ずいぶんわかりづらい紹介文だな」

星光「仕方無いじゃないか……あんまり書くとネタバレになるし、お前の過去は色々あったからな」

ダーク「まあな……それも今は黙っておくか……」

星光「まあ時がくればもう少し情報を載せます^^魔法とかデバイスの形態やいろいろと」

ダーク「頼んだぜ！」

星光「これから頑張っていくのでよろしく願いします^^」

第1話 機動六課始動（前書き）

書けている部分があるのでそれが尽きるまでは極力連日投降します

^^

第1話 機動六課始動

新暦75年4月某日……ダークは空港にいた。

「不味い……少し遅れちまったな」

ダークは明日発足する機動六課の新人フォワード陣のライトニング部隊の迎えに来ていた。

「あ、あの！」

ダークはエスカレーターを上がった所で少年に話しかけられた。

「私服で失礼します！ エリオ・モンディアル三等陸士です」

ダークは軽く笑みを浮かべた。

「そう硬くならなくていいぜ、エリオ」

「あ、はい……お久しぶりですね。ダークさん」

「ああ久しぶりだな。随分大きくなったじゃないか」

ダークの言葉にエリオも照れながら笑みを浮かべた。

「まさかお前と共に働ける日が来るとはな」

「何だか不思議な気持ちですね」

「そついやもう1人は？」

互いに面識のある2人は笑顔で話し合っているとダークが途中でもう1人がまだ来ていない事に気がついた。

「まだみたいですな、ちよつと探してきます」

「俺はこの周辺にいるから見つけたらここに来てくれ」

「はい！」

そう言うときエリオは人ごみの中に消えていった。

「さて、俺もこの周辺を探すかな」

ダークはしばらく周辺を搜索していると少し進んだ先に座り込んでいるエリオと女の子の姿があった。

「あつダークさん！」

「どうした？ 何かあったのか？」

「ルシエさんがあそこから落ちかけていたので助けたとこなんです」

「そつだったのか」

エリオと話しているとピンクの髪の少女がこちらに向きかえると

「あの、ダーク・アルジェント一等空尉ですね、私はキャロ・ル・ルシエ三等陸士であります。それから……」

そう言う足の上に乗っている竜の子を差し出すと

「この仔はフリードリヒ、私の竜です」

「キュクー」

「よろしくな、長旅ご苦労だったな。エリオ、キャロ、フリード」

そう言う2人と1匹を連れ六課の隊舎へと向かった。

次の日……隊長室の前にいるダークがいた。

（遂に始動か……ワクワクしてきたぜ）

新鮮な気持ちを噛み締めながら、扉をノックすると中から返事が返って来た。

「どうぞ」

中からの返事を確認すると隊長室に入室した。

「失礼します……ってなのはにフェイト！」

「えっ？　もしかしてダーク君？」

「久しぶりだねダーク」

「お久しぶりですーダークさん」

そこには高町なのはとフェイト・T・ハラオウン、はやてのユニゾンデバイスのリインフォース？、そして俺を呼んだ張本人である八神はやての姿があった。

「すまないな、少し遅れてしまつて」

「いやいや、こちらが先に集まつてただけやで構わへんよ」

ダークははやての前にやってくると隣にいたのはが早速話しかけてきた。

「もしかしてダーク君も機動六課に？」

「ああ、2人が隊長を務めるスターズとライティング部隊の2つの隊長の補佐を勤めさせてもらう」

「ちなみに私は執務官の仕事が多いからその時とかにダークに変わりに隊長の代わりをやってもらうんだけどね」

「そうなんだあ……ってフェイトちゃん知ってたの？」

「うん。はやてがなのはには黙っておこうって」

「なのはちゃんをびっくりさせようと思って」

2人はドッキリが成功したので満足そうに笑っていた。

「もう2人とも！」

対するドッキリにかけられたなのはは顔を赤くして怒っていた。

（やっぱり皆変わってないな）

ダークが微笑ましい感じで皆を見てみると、はやてが話しかけてきた。

「どないしたん？　ダーク」

「いや、別に……そろそろ皆がホールに集まったみたいだからそろそろ行こうか」

「そっやね。なのはちゃん、フェイトちゃん、ダーク……改めてよ

ろしくな」

「うん」「ああ！」

「さて行こか」

4人の隊長達はホールへと向かった。

はやての挨拶が終わりダークはなのはと共に早速新人フォワードの訓練に向かった。新人達が来るまでの間なのはにダークは話しかけた。

「遂に始まるな」

「そうだね。私達の教官としての一歩が……」

「不安か？」

「不安じゃないって言えば嘘になるけど……」

なのははダークの方を見つめなおすと

「皆が支えてくれるしダークも居てくれるからね」

そっついながら微笑んだ。

「俺も結構不安なんだぞ」

ダークは少し困った様な表情を見せた。

「でもね、ダークと久しぶりに同じ部隊になれたし楽しんでいく
と思う」

「それは俺も同感だ」

なのはが笑いかけるとダークもつられて笑顔になる。

「なのはさーん、ダークさーん」

2人が話し合っていると眼鏡を掛けた女性が走ってきた。

「シャーリー」

それと同時に新人フォアード達も到着した。

そしてデバイスのデータ記録チップの説明とシャーリーの紹介が終わったところで早速訓練に入る事にした。

「じゃあ早速訓練に入ろうか？」

「は、はい」

「でもここですか？」

新人フオワードのスバルとティアナが不思議そうにしてるのも無理もない……目の前には海が広がっておりとても訓練を行うような場所では無かったからだ。

「シャーリー」

「はい」

なのはの合図と共にシャーリーが空間シュミレーターを起動させると皆驚きの声を上げた。

「うわぁ！」

「凄い……」

新人達は各地配置されたところでなのはとダークから通信が入った。

「皆聞こえる？」

「はい！」

「早速敵を配置していくぜ。まずは軽く8体からかな」

「はい。動作レベルC、攻撃性能Dってとこですかね」

「ああ」

「私達の仕事は搜索指定ロストログアの保守管理、その目的の為に私達が戦う事になるのは……これ！」

そう言うのと新人達の前にロボットのようなものが現れた。

「自立行動型の魔導機械、これは近づくとか攻撃してくるタイプだ、攻撃はそれなりに鋭いから注意しな」

「では第1回模擬戦訓練……ミッション目的は逃走するターゲット8体の破壊、または捕獲を15分以内」

「はい！」

一通りの説明が終わると新人達の返事が返ってきた。

「それじゃあミッション」

「スタート！！」

ダークとなのはの掛け声と同時にガジェット達が逃走を始めそれを新人達が早速追跡し始めた。

そのうちの1人、スバルがガジェットに追いつき魔力弾を放つが簡

単に回避されてしまった。

「何これ？ 動き速っ！」

その先には待ち構えていた。ガジェットはエリオに向かって攻撃してくるがそれを回避しながら接近し斬りかかるが全て回避されてしまった。

「駄目だ……フワフワ避けられて当たらない……」

上のビルで指示していたティアナもキャロに支援を要求し攻撃の態勢に入った。

「チビッ子、威力強化お願い」

「はい！ ケリュケイオン」

【Boost Up・Barret Power】

「シュート！」

しかし放たれた弾丸はバリアのような障壁で防がれてしまった。

「バリア?!」

「違います……フィールド系！」

「魔力が消された?!」

驚くフォワード陣、その時ダークとなのはから通信が入った。

「そうそう、言い忘れていたけどガジェットドローンにはちょっと厄介な性質があるの」

「それは攻撃魔力をかき消すアンチ・マギリング・フィールド、通称AMF。普通の射撃は通用しないし……」

「あつ……このっ！」

「スバル！ 馬鹿危ない！」

ビルへと逃げるガジェットをティアナの警告を無視しスバルがウィングロードを展開し追いかける。

「それにAMFを全開にされると……」

「えっ？ ……うわああああ！」

なのはの指示の元AMFが全開にされた瞬間ウィングロードが途中で寸断され、スバルはそのままビルへと突っ込んだ。

「飛翔や足場作り、移動魔法の使用も困難になる。スバル大丈夫か？」

「な、何とか……」

「対抗する方法はいくつかあるよ。どうすればいいか、素早く考えて素早く動いて」

各自新人達は何か作戦を立てたようで各自動き始めた。

「皆よく走りますね」

「危なつかしくてドキドキだけどね」

「まあ心配なところはたくさんあるが皆よく動けてるな」

その様子を見ていた教導隊の2人とシャーリーは新人フォワードについての意見交換をしていた。

「デバイスのデータ取れそう？」

「いいのが取れてます、4機ともいい子に仕上がますよ」

「レイジングハートさんとデスクロニクルさんも協力してくださいね」

【All right】

【I see】

なのはとダークの首元に掛けられている赤い宝石と黒い剣型のアクセサリーから返事が発せられた。

最後の1体を撃破すると2人から通信が入った。

「じゃあ結果を言うね。所要時間10分で8体のうち5機撃破、3機捕獲」

「時間にも余裕があるな、最初にしては上出来だな」

「じゃあ次の訓練の内容を発表するね」

「『ええ！』『』『』」

新人達から驚きの声が発せられる。

「これで終わりと思ったら間違い、そんなに甘くはないぜ」

「じゃあ次の訓練は……」

「今日はここまで。また明日ここに集合ね」

「戻ったら早く休むんだぞ」

「はい……」

夜の訓練が終わり、返事をすますと新人達がフラフラと自分達の部屋へと帰っていった。

「さて、俺達もそろそろ戻るか」

「うん」

2人は隊舎に戻る途中にフェイトに会った。

「あっなのは、ダーク」

「フェイトちゃん」

「フェイト、お仕事お疲れ様」

「うん、なのは達も訓練お疲れ様」

3人で歩きながら今日の成果について話していた。

「新人達手応えはどう？」

「うん、皆元気で言い感じ」

「まあお疲れの様子だったけどな」

2人の報告を聞いたフェイトは軽く微笑むと

「そう、立派に育ってくれるといいんだけどね」

「勿論育てるよ」

「俺達の手で。おっと俺はそろそろ自分の部屋に戻るよ」

「また明日ね」

「おう、おやすみなのは、フエイト」

「おやすみ、ダーク」

「おやすみ、ダーク君」

そう言つとダークは引き返していった。

第1話 機動六課始動（後書き）

第0話を投稿してすぐに感想頂きありがとうございました^^

いちよう少しの間は連日投降する予定ですがしばらくしたら更新ペ
ースがかなり遅くなりますw今課題やら色々追われているもので…
…これから矛盾が出てきそうで冷や冷やしています

皆さんの意見を参考にしていきたいのでどんどん募集しております
^^よろしく願います

第2話 ファースト・アラート

「集合！」

「はい！」

なのはの号令に新人達は返事と共に集まってきた。

「じゃあ今から早朝訓練のラストだ！ ラストは5分以内に俺に攻撃を当ててみる」

「えっ？」

ダークの説明に難題を突きつけられたかの如く戸惑う新人達。

「ただし、俺はこの場から動かないからさ、一撃でも当てればOKだ。ただ俺も反撃しないわけじゃないから簡単に落とせると思うなよ。ちなみに今回はバインド等での拘束はクリア条件には入らないからな」

「じゃあダーク君頑張ってね」

なのはは新人達の動きを見るためにビルの上に移動した。

「はい！」

「じゃあ開始するぞ！準備はいいか？」

ダークは大きめの魔力弾を1つ生成した。

「はい！」

「行くぜ！ スタート！」

始まったと同時に魔力弾が放たれ、ティアナの指示の元4人が分散し動いた。

「まずはスバルか」

ダークは目の前からやってくるスバルと建物の中から狙っているティアナに向かい小さな魔力弾をいくつか生成し放った。

「ブレイズ……シューター！」

しかし被弾したはずの2人の姿は消滅した。

「幻影か……ティアナの仕業だな。次か！」

「うりいやああ！」

ティアナの幻影に関心していると上空からウィングロードを伝いスバルがリボルバーナックルでこちらに攻撃を仕掛けてきた。

「いい判断だ……だが甘い！」

「えっ……きゃあ！」

ダークは剣の形をしているデバイス・デスクロニクルでスバルを薙ぎ払うとスバル目掛けて魔力弾を数発放った。

スバルは急いでバランスを立て直すとウイングロードに乗り離脱した。

「お次はこっちか！」

スバルを援護する為に次々と浴びせられたティアナの弾丸を剣で弾いた直後に、後方からフリードリヒによるブラストフレアと下からのキャロによるバインドが伸びてきた。

「くっ！ しまった……」

剣を回転させその風圧で何とかブラストフレアを薙ぎ払った直後、ダークはキャロのバインドにより拘束されてしまった。

「エリオ今！」

「行っけえ！」

ティアナの指示の下、エリオが突撃する。

「……何てな！」

ダークは軽く笑うとすぐさまバインドを解除すると突撃してきたエリオを返り討ちにした。

「うわぁ！」

エリオは吹っ飛ばされながらも何とか着地した。

「やっべえ……ちょっとやりすぎたかも……」

《ちよつとダーク君！やり過ぎだよ！》

ダークが飛ばした直後になのはから通信が入り予想通りにお叱りを受けた。

《すまないな……》

「チャンス！」

「貰った！」

「これで終わりです！ブラストフレア！」

「キューー！」

通信に集中していたダークが気が付いた時にはティアナ、スバル、フリードによる3方向からの攻撃が迫っていた。

「マジかよ！」

ダークは迫り来る弾丸とスバルの薙ぎ払うと迫り来るブラストフレアに向かい再び剣を回転させブラストフレアを薙ぎ払おうとした。

「駄目か！」

エリオが次の攻撃の体勢に入った時だった。

【Mission complete】

「あゝ入れられちゃったか」

クロニクルが訓練の終わりを告げるとダークが少し残念そうに言った。

「本当ですか？」

キャラが尋ねるとダークは自分の袖に指をさすといった。

「この通り防ぎきれなかった」

その部分は少し焦げていた。皆笑顔になるがフリードは申し訳なさそうにしていた。

「フリード、あんまり気にするなよ。これが実践なら敵も容赦なしに来るんだからこれくらいの気持ちでぶつからないとな」

「キユクー」

褒めてもらえたので喜ぶフリード

「皆、集合！　ふう……だが流石に動かないのはきつかったか」

皆に集合をかけたダークはバリアジャケットを解除した。

「でもダークさん本気でなぎ払ってくるんですもん……」

「本当……バランス崩さないだけで精一杯ですよ……」

スバルとエリオをうつすらと涙目で訴えかけてきた。

「いちよう加減はしたんだが悪いな……手加減は苦手だね」

すまないと言った顔をしつつも少し笑みを浮かべるダークに2人は

苦笑いを浮かべた。

「でもダークさんの条件を考えるとこんなに時間がかかるとは思わなかったわ」

ティアナも予想外にダークが粘った事に驚いていた。

「まあな……今回はさっきのように動かずともあれだけ抵抗された敵用の訓練だと思ってくれ」

「でもダーク君は少し反省してね」

上空からなのはが降りてきた。

「悪かったよ」

ダークもバツが悪そうに皆を見た。なのはもバリアジャケットを解除すると新人の方に向くと先ほどの評価をしていた。

「皆良いコンビネーションだったよ。ティアナの指揮も筋が通ってきたし、指揮官訓練受けてみる？」

「いえ、戦闘訓練だけでいっぱいいいばいです」

謙遜しているティアナを隣にいたスバルが軽く笑った。

「キユク？ キュクルー」

その時、フリードが何かの異変に気づいたようで周りをキョロキョロ見渡し始めた。

「どうしたのフリード？」

「何か焦げ臭くないですか？」

近くにいたエリオも何かの異常に気が付いた。

「あ！ スバルあんたのローラー」

「えっ？」

スバルが自身の足元を見るとそこには煙を出している自身のローラーの姿がそこにあった。

「うわっやば！ あっちゃー……しまったー無茶させ過ぎたかな」

「オーバーヒートかな？ 後でメンテナンスに見てもらおうか？」

「

「はい……」

「そういやティアナのアンカーガンも厳しいか？ さっきも弾詰まりを起こしてたみたいだし」

「はい、騙し騙しです……」

すると教導官の2人は何やら相談を始めた。

「皆訓練も慣れてきたし、そろそろ実戦用の新デバイスに切り替えかな」

「だな」

「新？」

「デバイス？」

「じゃあ一旦寮でシャワー使って着替えてロビーに集まるうか？」

「はい！」

不思議そうにしている4人にロビーに集合するように言い一旦寮に向かって歩き始めた。

「あの車って？」

皆で寮に戻る途中車に乗っているフェイトとはやてに出会った。

「フェイトさん！」

「八神部隊長！」

「凄い！ これフェイト隊長の車だったんですか？」

珍しそうな目で車を見つめるスバル。

「そつだよ、地上での移動手段なんだ」

「皆練習の方はどないや？」

「あゝあの……」

「はい。頑張ってます」

はやての質問にスバルは言葉を濁しがちに苦笑した。代わりに答えたティアナの言葉にはやては笑みを浮かべた。

「エリオ、キャラ、ごめんね。私は2人の隊長なのにあまり見てあげられなくて」

「あ、いえそんな」

「大丈夫です」

申し訳なさそうに話すフェイトにエリオとキャラが答える。

「ダークもごめんね。2人を任せきりにして」

「気にするな。お前はお前の仕事があるだろうから。俺も新人達と訓練するのは楽しいしな」

ダークの発言にフェイトも笑みをこぼす。

「4人共良い感じで慣れてきてるよ。何時出勤があっても大丈夫」

「そうかあゝそれは頼もしいな」

はやてからの言葉に新人達は笑みを浮かべた。

「2人はこれから何処に行くんだ？」

ダークの問い掛けにフェイトが答えた。

「ちよつと6番ポートまで」

「教会本部でカリムと会談や、夕方には戻るよ」

「私は昼前には戻るからお昼は皆で一緒に食べようか？」

「はい！」

「ほんならな」

発進した車を新人達は敬礼して見送った。

その後新人達は一旦解散した後、ロビーに集合し新たなデバイスを貰いに向かった。

「これが……」

「私達の新デバイス……」

「そうですね！ 設計主任は私、協力なのはさん、フェイトさん、ダークさん。更にレイジングハートさん、デスクロニクルさんにリイン曹長」

新たなデバイスを見て驚く2人に説明をするシャーリー。

「ストラーダとケリユケイオンは変化無しかな？」

「うん、そうなのかな？」

見た目に変化が無いので2人が不思議そうに見てると上からリインフォース？がやってきた

「違いまーす。変化無しなのは外見だけです」

「あつリインさん」

「はいです」

残る2人はリインから説明を受けていた。

新人達への説明が一通り終わった直後、六課内にアラートが鳴り響いた。

「このアラートって？」

「一級警戒態勢?!」

「グリフィス君!」

「はい! 教会本部から出動要請です!」

指揮官補佐のグリフィスが映っている隣のモニターが点灯しはやてが映し出された。

「なのは隊長、フェイト隊長、ダーク隊長、グリフィス君。こちらはやて」

「状況は?」

「教会調査団で追っていた、レリックらしき物が見つかった。場所はエイリム山岳丘陵地区。対象は山岳リニアレールで移動中」

「何?!」

「移動中って!!」

「まさか!」

「そのまさかや。内部に侵入したガジェットのせいで車両の制御が奪われている。リニアレール車内のガジェットは最低でも30体…大型や飛行型の未確認タイプも出ているかもしれへん」

まさかの事態には隊長達も同様を隠せない。

「いきなりハードな初出勤や。なのはちゃん、フェイトちゃん、ダーク……いけるか?」

「私は何時でも!」

「私も!」

「勿論さ!」

隊長達は当然の如く返事を返す。

「スバル、ティアナ、エリオ、キャロ。みんなもOKか?」

「……はい!」

「よし、良いお返事や。シフトはA-3、グリフィス君は隊舎での指揮。ラインは現場管制」

「「はい！」」

「なのはちゃんとフェイトちゃんとダークは現場指揮！」

「「うん！」」

「OK！」

「ほんなら、機動六課フォワード部隊……… 出動！！」

「「「はい！！」」」

「了解。みんなは先行して、私もすぐに追いかける！」

「うん！」

「それじゃあみんな、へりに急ぐよ！」

通信が切れたのを確認したなのはとダークはすぐさま走りだした、その後を新人フォワード陣が追いかけていった。

「新デバイスでぶつつけ本番になっちゃったけど、練習通りにやれ

「大丈夫だからね」

「気楽とまでは言わないが緊張せずに頑張れよ」

現場へと向かうへりの中、なのはとダークは新人達に話しかけた。

「はい！」

「頑張ります！」

「エリオとキャロそれにフリードもしっかりですよ！」

「はい！」

「キョクー！」

3人の励ましにそれぞれ答えるフォワードメンバー。

「危ない時は俺やなのは隊長、フェイト隊長、リインがちゃんとフォローするから、思いっきりやってみる！」

「はい！！」

「良い返事だ」

しっかりとした返事に満足そうに頷くダーク。

そして様々な心境でいる新人達をのせてへりは事件の待つ山岳地帯へと辿り着いた。

その頃、六課へ帰還途中だったフェイトはパーキングに到着し車を停めた。

「こちらフェイト。グリフィス、こっちは今パーキングに到着。車停めて現場に向かうから、飛行許可をお願い」

「了解。市街地個人飛行、承認します！」

「バルディッシュ・アサルト！ セットアップ！」

許可が降りたと同時にフェイトはバリジャケットを身に纏っていた。

「ライティング1、フェイト・T・ハラオウン、行きます！」

そしてすぐさま現場へと向かい飛び立った。

「さて……そろそろ行くかな」

「ヴァイス君、私も出るよ。フェイト隊長とダーク君で空を押さえる！」

「うっす。お2人さん、お願いします！」

【Main hatch Open】

なのはの言葉に、パイロットのヴァイスがヘリのメインハッチを開いた。

「じゃ、ちよつと出てくるけど……みんなも頑張つて、ズバツとやっつけちゃおう！」

「「はい！」」

「はい！」

1人返事が送れたキャラにダークが駆け寄りそつと頭を撫でた。

「キャラ、大丈夫だ。もつとリラックスして。ピンチの時は助け合えるし、キャラの魔法は皆を守る……優しくて強い力だから」

「ダークさん……」

ダークは親指を立ててみせた。そしてなのはと共にハッチに向かった。

「レイジングハート！ セットアップ！」

「デスクロニクル！ セットアップ！」

「スターズ1、高町なのは、行きます！」

「スターズ0、ダーク・アルジエント、行きます！」

ハッチから飛び降りて数秒後桃色の光と黒い光が空を駆け抜けていった。

リンから新人達に説明が行われているなか早速ダークとなのははガジェットを迎撃していた。

《こっちの空域は、私達で抑える。新人達の方、フォローお願い》

《了解！》

フェイトが通信を行っているとそこになのはが合流した。

《同じ空は久しぶりだね、フェイトちゃん》

《うん、なのは……》

念話で会話している2人に航空型のガジェットが複数接近してきた。2人は迎撃に移ろうとした。

「ふっ……遅い！」

しかしその直後、黒き影が横切ったかと思うと一瞬にて切断され炎上した。

「ダーク！」

「ダーク君！」

その撃墜した張本人、ダークは迫り来るガジェットを再びソニックムーブを利用した剣技を駆使し撃墜していった。

「新人達の為にも一気に撃墜するぜ！」

「うん！」

「OK！」

3人はガジェットに向かっていった。

ガジェットを撃墜している中、ダークは地上から微量の反応を察知した。

（何かの微量の反応がある？）

《なのは、フェイト！　ここを任せる。何か気になる反応を見つけたから様子を見てくる》

《うん、お願い。私となのはでここは大丈夫だから》

《気を付けてね、何かあったらすぐに連絡してね》

《ああ！》

ダークはなのはとフェイトに上空を任せ反応のあった森に向かった。

「確かこの辺だったな……ん？」

ダークは反応のあった地点の森に降り立った。そこに紫の髪の少女が何かの装置を持って立っていた。

「お嬢さん、こんなとこにいたら危ないぜ」

「しまった……邪魔が入った……」

少女は少し焦った様子だったが、無表情でこちらを見つめると手のデバイスらしき装置から召喚獣を召喚した。

「何だ！」

「ガリユー……お願い……」

ガリユーと呼ばれた召喚獣はこちらに攻撃を仕掛けてきた。

「召喚獣?!」

すぐさま応戦するダーク。そのガリユーと呼ばれた召還獣は最初こそダークと互角の戦いを見せたものの少しするとダークが圧倒し始めた、その間にも怪しげな装置を起動する少女。

「起動完了…… A M Fフィールド展開……」

「何だ？ ……くっ！」

装置が起動した瞬間ダークのソニックムーブが突然使えなくなった

「A M F?! ……だがこの出力はやバ過ぎる……魔法が全く使えないなんて……くそっ通信も妨害されてやがる」

ダークと違いガリユーは高速で攻撃をしてくる為、ソニックムーブによってそれ以上の速度を保っていた、ダークはソニックムーブが使用不可になった途端に防戦一方になってしまった。

（くっ！ このままじゃあ不味い……何とかしてあの装置を破壊しないと……）

ダークは隙をみては装置に斬りかかろうとするがガリユーに妨害されてしまう。

（こうなったら！—か八かやってみるしかない）

ダークは剣を大きく構えるとガリユーの飛び掛ってくるのを待った……そしてタイミングを見計らい剣を振るった。

「鬼炎斬！」

ダークはタイミングを合わせ回転しながら剣を振るい、見事ガリユ
ーを捕らえ薙ぎ払った。

「っ！」

「何だ！」

その直後ダークは音に気付きその方向を見ると例の怪しげな装置が
突然爆発し紫の髪少女に破片が降り注ぐとしていた。

「ちっ！」

「っ！！！」

少女は瞬時に目を瞑り覚悟を決めた。だが何時まで経っても破片は

おろか爆風すら当たってこない。

「どう……して？」

少女が目を開けると目の前にはダークが身体を盾にして自らを守ってくれていたのであった。

「どうしてだろうな、敵だとしても女の子が怪我するのは見たくないからかな」

ダークはそつと笑って見せた。

「おかしな人……ガリユー戻っていいよ」

少女はガリユーの攻撃を止めさせ、デバイスの中に戻すところらへを向いた。

「怪我はないか？」

「うん……私を捕まえないの？」

「本来ならそうする所だが……今回は見逃すよ、何か事情があるみたいだし」

紫の髪の少女はかすかに笑うと

「本当に……おかしな人……」

そう言つとそつと立ち去っていった。

「ふう……あの子はやっぱり……」

立ち去った少女を見てダークはそつと呟いた。

「ダーク君！」

その声に振り返るとなのはが上空から降りて来た。

「なのは、そっちの状況はどうなった？」

「こっちは解決したけどダーク君大丈夫？」

「ああ、ちよつと襲撃されちゃってさ」

その言葉になのはは驚いた様子でダークに問いかけた。

「襲撃って、大丈夫だったの?!」

「ん……まあこの通り、とくに怪我也なかったから大丈夫だぜ」

本当は先程の少女を庇った事により傷を負っていたが心配させたく無かったダークはそれをあえて隠した。

「そっか……けど良かった。私、心配したんだよ」

ダークの言葉に一度は驚きの表情を見せたなのはだったが、大丈夫であることを強調されるとそれは安堵の表情へと変わる。

「心配かけてごめんな……それでそっちももう解決したんだよな」

「うん。新人フォワードのみんなが頑張ってくれたから、ちゃんとレリックも確保できたよ」

「そうか……キャラは大丈夫だったか？ 約束破っちまったけど」

「キャラはすつごく頑張ったよ。竜召喚も成功させたし」

「そっか……成功したのか……やったなキャラ」

なのはの言葉に、ダークはまるで自分の事のように喜ぶ。

「これでキャラも自信をつけただろうな……それで、今はみんなどうしているんだ？」

「スバルとティアナはレリックを引き渡しに行っていて、エリオとキャラはフェイトちゃんと一緒に他の部隊へ現場の引き渡しをしているよ。そして、私はこうしてダークさんの援護に来ただけ……必要なかったみたいだね」

「結果的にはな……」

ダークはそつと装置があつた場所を見つめた。

「そこに何かあつたの？」

「話はまた報告時にする。まずは皆と合流しよう」

「うん」

2人は残りのメンバーと合流し機動六課へと戻った。

「……これが今回の事件の報告です」

フェイトが今回の事件のまとめをはやてに報告していた。

「皆、改めてご苦労やったな」

はやての言葉に3人は笑みをこぼすがダークは再び真剣な顔になった。

「あとはやて、俺からも報告があるんだが……」

ダークはあの少女には何か思い入れがあるのか報告はせずただ敵が使用していたAMF強化装置について話した。

「AMFの強化版ね……」

「しかもその状況下でも相手は使えるっていうのも気になるね」

「あつちだけが使用できるってのは、前もってデバイスか何かにそういう処置を施しているのかな？」

「気になる事は他にもある」

「その装置が爆発したって事だね」

「恐らく試作型、もしくは私達に解読されないように爆破するように出来てたのかもね」

「試作型だとしたらまた次に新たなのが出る可能性が高いから気をつけておかないとな」

「そうやね」

4人はAMF装置についての議論をさらに交わした。

「とりあえず俺からの報告も以上だ」

「そうか、皆改めてお疲れさんやね。今日はもう皆休んでいいよ」

「」「はい！」「」

3人は敬礼すると隊長室を出て行った。

第2話 ファースト・アラート（後書き）

何とか投稿完了しました^^

以前の誤字の指摘ありがとうございました^^

これからも皆様よろしくお願いします^^

第3話 明かされた敵

ダークはある人物の元へ向かっていた。
早速その人物を見つけた声をかけた

「アルジェントじゃないか、訓練はどうした？」

その人物とはヴォルケンリッターの1人でライティング部隊の副隊長であるシグナムである。

普段は訓練をしているはずのダークがいる事に不思議そうにしているシグナム。

「今日は朝はフェイトが受け持つ事になってさ、たまには自分の部隊を見ておきたいだろうし」

「そうか、テストロッサもあの2人を気にしていたからな」

「まあ俺は今時間空いたからちょっとシグナムに頼みがあってきたんだけど」

「頼み？」

「久しぶりに……手合わせでも頼めるか？」

ダークの言葉に少し驚くシグナムだが待っていたとばかりに騎士甲冑を身に纏った。

「お前と戦うのは久しいからな……どこまで自身で極めたかを見てやる」

「ありがとう、なら遠慮無しに行くぜ！」

「来い！ アルジェント！」

「喰らえ！」

「はああ！」

2人の剣がぶつかりあう度に凄まじい音が響き渡る。

【S o n i c M o v e .】

「はああ！！」

「甘い！」

ダークはソニックムーブを使い後ろを取りシグナムを薙ぎ払ったがその一撃はギリギリの所で防がれていた。

「やつぱ……強いねシグナムさん！」

「驚いたな……お前もよく自身の手でここまで極めたな！」

その頃……新人フワード達の訓練をしていたのは達は先程から聞こえてくる音に気付いた。

「何の音だ？」

「あつちから聞こえてくるみたいだね」

「そういえばフェイトちゃん、ダーク君は？」

「今日は朝の訓練は私が受け持つ事にしたんだ、もしかしたら自主トレでもしてるのかな？」

「ちょっと見に行ってみる？」

なのはの提案にヴィータが待ったをかけた。

「まだ訓練中だぞ」

「ダークの訓練って誰も見た事が無いからちょっと気になってね」

「私も見たいです」

「僕も気になりますね、ダークさんから色々盗ませてもらえそうだし」

新人一同もヴィータに一斉に頼み込んだ。

「全くお前達は……」

「にゃはは……」

軽く笑うなのはヴィータは仕方無いといった顔をしながらも自身も気になるのか皆と共に走ってその音のする方向に向かった。

到着した皆は新人だけでなく隊長陣すら息を飲んだ。

「凄い……」

「これが隊長レベルの戦い……」

「シグナムにあそこまで引けをとらず戦えるとはな……独自に極めていったのは聞いていたけどこれほどとはな……」

「紫電一閃！」

「鬼炎斬！」

2つの剣がぶつかり合い辺りには凄まじい衝撃波が巻き起こった。

「やるな、だが次の一撃で決める！」

「望む所だ！」

2人は距離を取り再び構えシグナムはデバイスを変形させ、ダークも先程とは違う構えで技を放った。

「飛竜一閃！」

「セイバースラッシュ！」

互いに放たれた斬撃が再び強い衝撃波を起こす。

「ふっ……また相打ちか……アルジェント、今日はここまでにしようか」

「だな、今日は手合わせありがとな」

すると突然2人は剣を収めた。

「あれ？ やめちゃうの？」

「ちよつと残念……」

「シグナム副隊長の剣の腕もそうですがダークさんも凄いですね」

「ここまで自分の剣を極めたか、お前はやっぱり才能があるな」

2人は辺りを見ると本来訓練してるはずのフォワード陣だけでなく隊長陣も観戦していた。

「アルジェント、後は頼んだぞ……またいずれは決着をつけさせてもらうぞ」

「ああ！」

シグナムはすぐさま立ち去ってしまった。

「今度に勝負はお預けかゝまあ楽しみがまた増えたな」

ダークが軽く笑っていると辺りの状況に改めて気が付いた。

「……てかお前ら訓練はどうしたんだよ」

ダークが苦笑いしながら突っ込むと皆バツが悪そうに笑いながら口々に答えた。

「だってねゝあれだけ凄いもの見せられちゃったらねゝ」

「あれだけ凄い人達の師弟対決を見ない手は無いよ」

「いい勉強にもなると思ったしね」

「凄すぎてついていけなかったわ」

「途中から新人達は呆然としてたけど………というからお前から途中から滅茶苦茶熱くなってたしな」

様々な感動を述べるフォワード陣。

「まあな、武人ってのはそんなものだよ。さてお前達には良い勉強&休憩になっただろう、昼からまた訓練してやるよ」

「えっ？」

新人達はダークのタフさに驚きを隠せなかった。

夜の訓練の終了を知らせる笛が鳴り響いた。

「はい、じゃあ夜の訓練はおしまい」

「……ありがとうございます……お疲れ様でした……」「……」

疲労困憊の4人はフラフラになりながら隊舎へと向かって行った。

「お疲れ」

「ちゃんと寝ろよ」

「はい……」

ダークとヴィータの言葉に何とか返事を返す4人。

「しかしお前、ほんと朝から晩まで連中に付きつきりだよな、疲れんだろ？」

訓練場の電源を落としているのはとダークにヴィータが話しかけた。

「私は機動六課の戦技教官だもん、当然だよ」

「ダークは今日はシグナムと剣を交わしてるのに午後からは訓練に戻ってるし」

「まあな、俺達は丈夫が取柄だし」

そう言いながら軽く笑うダーク。

「あとなんつーか、もつと厳しくしねーでいいのか？ あたし等が昔受けた新任教育なんて歩き方から挨拶まで、もう何でもかんでも厳しく言われてたじゃんか」

「戦技教導隊のコーチングってどこも大体こんな感じだよ」

「まあそういう細かい所をいちいち叱ったり怒鳴ったりしてるくらいなら、模擬戦でキツチリ叩きのめしてあげる方が教えられる側が学ぶ物が多いんだ」

「教導隊ではよく言われてるしね」

「おつかねえな……おい……」

「まあ俺はあんまり好きじゃないけどさ。叩きのめすってのはさ……確かに必要な事かもしれないが俺はキツチリ話すのも大事だと思うんだけどな」

ちょうど電源を切り終わりこちらに2人が振り向く。

「私達がするのはまっさらな新人を教えて育てる教育じゃなくて、

強くなりたいて意志と熱意を持った魔導師達に、今よりハイレベルな戦闘技術を教えて導いていく戦技教導だから」

「まあ何にしても大変だよな」教官つてのも」

「でもヴィータもよく出来てるぜ」立派立派」

そう言うとき、ダークはヴィータの頭を撫でた。

「撫でるな」

撫でられて照れながら抵抗するヴィータを見てダークとなのはがクスクスと笑っていた。

「あとなのはも毎日ご苦労様」これはちよつとしたご褒美だよ」

「えっ？」

ダークはクスクス笑っていたのはも撫で始めた。

「ちよ、ちよつとダーク君、恥ずかしいよ」

恥ずかしそうにしながらも抵抗はせずに撫でられるのは。

「2人ともそろそろ戻るぞ！　ダークは何時まで私達を撫でてるつもりだ！」

ヴィータの言葉にようやく手を離れたダーク。

「私も子供扱いしないでよ、うう」少し恥ずかしかったよ」

「ちょっと照れてたなのは可愛かったぞ」

「えっ?!」

ダークの言葉に顔を赤くするのは。そんな2人を置いてヴィータは先に行ってしまった。

「もう！ ヴィータちゃん呆れて先に行っちゃったよ」

「すぐに追いかけるか」

2人はすぐさま追いつきそして3人は隊舎に向かって歩き始めた。

「今日の戦闘データを分類して俺となのはのパソコンに送っておい
てくれ」

【OK】

クロニクルの返事にダークは労いの言葉をかけた。

「クロニクル、今日もお疲れ様、あとレイジングハートも俺のパソコンにデータ送っておいてくれ」

【All right.】

「うん、ありがとねレイジングハート」

そんな2人を見てヴィータが呟いていた。

（私はスターズの副隊長だからな、お前達の事は私が守ってやる！）

「なあに？」

「どうした？」

2人をずっと見ていた為振り向き反応してしまった。

「何でもねーよ。行くぞダーク、なのは」

「ああ」

「うん、ヴィータちゃん」

部屋に戻っているその途中でフェイトから通信が入り緊急会議を行うという事なので2人はすぐさま隊長室に向かった。

「失礼します」

「遅くなつてすまないな」

「ごめんね2人とも、訓練の後でお疲れのところを呼び出して」

申し訳なさそうな顔をするフェイトに2人は笑って見せた。

「気にいなくて良いよ」それで緊急会議って何かあったの？」

2人が席に着くとフェイトが話し始めた。

「ガジェットドローンの残骸を調べてただけどそこにある人物の名前が書いてあったの」

「ある人物？」

フェイトはモニターにある人物を映し出した。

「こいつは確か……」

「そう、広域指名手配されている次元犯罪者……ジェイル・スカリエッティ。ドクターの名前がガジェットに記してあったの」

「って事は奴がレリックを探し求める為にガジェットを作り出して

るって訳か」

「うん、他に詳しい事などは私が色々調べるからまた新しい情報が
入り次第また連絡するね」

「そうやね、今日はこんなところでええやろ」

「了解。私たちも何か分かったらすぐに連絡するね」

「うん、お願いね。今日はお疲れのどこを本当にごめんね」

「気にするなってゝてかお疲れなのはお互い様だろ」

そう言うとダークはフェイトの肩をポンッと叩いた。

「クスクス、じゃあはやてちゃんお疲れ様」

「お疲れ様ゝ」

3人は隊長室を出て部屋に戻った。

第3話 明かされた敵（後書き）

もう少ししたらストックが尽きます……課題もまだ終わってないです
www

そろそろガチでやらないと不味いな

毎度感想ありがとうございます^^

読んでいただけてありがたいです

これからもよろしく願います^^

第4話 ホテル・アグスタ（前書き）

あと2つくらいで更新がしばらく途絶えます><

第4話 ホテル・アグスタ

数日後……

「ほんなら改めて、ここまでの流れと、今日の任務についてのおさらいや」

任務地に向かう途中のヘリの中ではやてから今回の任務兼、事件の黒幕についての説明があった。

ホテル・アグスタ……ここで行われるオークションの警備が今回の仕事だ。

そして次にガジェットドローンの製作者、及びレリックの収集者である広域指名手配されている次元犯罪者ジェイル・スカリエッティについての話があり、メインでフェイトが担当するが皆も覚えておくようにと指示され新人達は返事をした。

一通り説明が終わった時に目の前のスーツケースが気になっていたのかキャロがシャルマルに尋ねた。

「あの〜シャルマル先生、さっきから気になってたんですけどあの箱って何ですか？」

「ああこれ？ 隊長達のお仕事着よ」

シャルマルは軽く笑いながら答えた。

「とりあえず着替えたけどこんな格好は好まないな〜てか似合っていないな」

現場へと到着したダークは仕事着であるスーツを着用していた。

「そんな事あらへんよ、似合ってるよ」

ふと声のしたを向くとドレスで身を着飾った3人が立っていた。

（凄い……めっちゃ可愛い）

「ダーク君？」

反応が無いのではのが心配そうにこちらを見てきた。

「ああ、あんまりにも皆が綺麗だったから見惚れちゃったよ〜そうゆう服を着ると見違いちゃうね」

「ありがとな〜ってそれ普段の私らが可愛くないって事?!」

「いや……そうゆう訳じゃないけど……」

「ダーク……そんな事言うなんて……」

「酷いよダーク君……」

3人は軽く涙目になったのでのダークはとても焦り謝り続けた、し

かしその直後3人は笑い始めた。

「クスクス、ダーク焦りすぎ」

「ちよつとからかったただだよ」

「ダーク君面白いね」

「お前らな……まあいいや」4手に別れよう、もう俺は先に行く」

ダークは早々に立ち去ってしまった。

「また何かあつたら連絡してな」

「分かった」「うん」「OK」

3人は返事をしてそれぞれの配置についた。

【Master!】

（遂に来たか！）

デスクロニクルのレーダーが敵の出現を察知した為、ダークはすぐさまシャマルに通信を繋いだ

《こちらダーク、俺も外の様子を知っておきたいから前線のモニターをよこしてくれないか？》

《分かったわ、デスクロニクルに送っておくわ》

常に外の状況に気をかけながら警備を行っていた

（このまま行けば俺は必要なさそうだな……やはりあの時の少女は……）

ダークは以前出会った少女の事を考えていた……その時だった

（この反応は召喚……まさか！）

妙な胸騒ぎがしたダークは走り始めた。

「ダーク君？ どこ行くの？」

走り出したダークにその途中警備していたのはが尋ねてきた。

「すまない……野暮用が出来た……警備任せる！」

「ちょっとダーク君！」

そう言い残すとなのはの制止を無視しダークは走り始めた。

「ここらでいいか……スターズ0、ダーク・アルジエント、行きま
す！」

そしてホールに着くとバリアジェットを身に纏い飛び立った。

その頃なのはどこかへ行ってしまったダークの事を2人に報告していた。

《フェイトちゃん、はやてちゃん、こちらなのは》

《なのは、どうしたの？》

《ダークが警備中にどこかにいつちゃったんだけど……》

《さっきシャーリーから通信入ったんやけど……ダークは今前線に出てる》

《どうして？》

《何かあったのかな？》

《うちにも分からん、2人も言いたい事はあると思うけどうちから色々言っておくから私らは内部の警備をしよう》

《《了解》》

「あれは！」

反応のあった地点に向かう途中、ダークはティアナが誤射した弾がスバルに向かっていくが見えた。

「仕方ない……クロニクル！ モードチェンジ！」

【OK・Buster Mode！】

ダークは近距離戦特化のソードモードから遠距離戦特化のバスターモードへと変更し魔法を発動しようとした。

「スターダスト……」

ダークの身体が粒子に包まれ始めた瞬間。

《それを使っんじゃないっ！》

《っ！》

それと同時にダークの周りの粒子は消え、ダークに念話をしてきた
ヴィータが誤射された弾を打ち返していた

「ティアナ！ この馬鹿！ 無茶した拳句に味方撃ってどうするんだ！」

「……」

ティアナは自身のミスとヴィータから怒鳴られてショックで呆然と
していた。

「……クロニクル、モードチェンジ」

【OK・Sword Mode】

その間にダークは元のソードモードに戻った。

「それとダーク！」

ヴィータはダークに向きかえるとそのまま接近し、そのままビンタ
した。

「何でお前がここにいるんだよ！ お前は中の警備のはずだろ！」

「……援護さ、何か胸騒ぎがしたから出てきただけさ」

頬を押さえながらダークは答えた。

「まあそれはまだいい……それよりもお前……あの技使おうとした
だろ」

ヴィータはダークを問い詰めた。

「ああ、じゃなけりゃ俺の場所からスバルを助ける事は出来なかったからな」

ダークは見透かされていると分かると渋々答えた。

「この馬鹿！ お前はいつもそうだ！ 自分の心配は一切しないし・・・あの時だって！」

「ヴィータ！」

突然ダークが声を荒げた。

「その話はいい……それよりまずはこいつらを片付けてからだ」
そう言うとダークは飛び去った。

「あっおい！ くそっ……」

「あ……あの……ヴィータ副隊長……」

頃合を見計らいスバルがヴィータに話しかけた。

「うるせえ！ 後は私がやる、お前ら2人まとめて下がってろ！」
しかし怒り心頭のヴィータは2人にそう言い捨てると残存するガジエットへと向かっていった。

ダークは召喚反応があつた場所に到着するとこの前の少女と大柄な男の姿があつた。

「何者だ！」

大柄な男はこちらに剣を構えていたがスツとルーテシアがその男を止めた、男は理解したのか剣をしまったのでダークも剣を収めた。

「やっぱり……お前はルーテシアなのか？」

その言葉に相変わらぬ無表情の少女と打って変わり、大柄な男は少し驚いた表情をしていた。

「何故お前はルーテシアを知っている？貴様は何者だ？」

大柄な男はこちらに話しかけてきた。

「俺の名はダーク・アルジエント……」

「ダーク?! まさか……お前は……」

「あんた……俺の事知ってるのか？」

「お前はもしや……」

「ちょっと待て……」

大柄な男が何か話そうとしていた瞬間ダークがそれを止めた。

「どうした？」

ダークはリーダーに2つの反応がこちらに向かっているのを察知した。

「不味い……仲間が近くに来ている……早く行ってくれ」

「可笑しな奴だ、敵を逃がすというのか？」

「今度個人的に色々と聞かせて欲しい事がある……それまでは捕まえるつもりは無い」

「ふん……最後にこれだけは言っておこう……俺の名はゼスト・グ

ランガイツ……そしてこの少女は恐らくお前の思っている答えで合っている……」

そう言う大柄な男はルーテシアを連れて去っていった。

（あのゼストとかいう騎士……俺の事を知ってた……そしてルー……どうして……）

ダークは色々と考えていると後ろから声がした。

「誰がいるのか！」

現れたシグナムとザフィーラはそこにいる人物を見て驚いた。

「ダーク?! 何故お前がここにいる」

「お前は中の警備のはずだが」

「ちょっと色々あつて勝手に出てきたのさ、例の召喚師には逃げられてしまったけどな」

「そうか……」

「ガジェットはもう殲滅出来たのか？」

「ああ」

「なら俺はもうお役御免みたいだから内部の警備に戻るわ」

「お前は……少しは勝手な行動を慎んだらどうだ？」

ザフィーラの指摘に軽く申し訳なさそうな表情を返すとアグスタに向かつて飛んでいった。

「それじゃ、説教を甘んじて受けると思いますか」

ホテル・アグスタから隊舎へと戻った後、はやてから呼び出されたダークは部隊長室の前までやって来ていた。

そして、軽く深呼吸をするとノックをした後部屋へと入る。
リンは何処かに行っているのか、はやては一人、真剣な表情でデ

スクに座っていた。

はやてはダークが入ってくるのを確認すると、ゆっくりと話し始める。

「……ダーク、なんで呼び出したか分かってるか？」

「分かってる……ホテルでの命令違反、あと連絡義務の放棄とかだろ？」

「せやな……まあ、今回は嚴重注意だけで止めとくわ。今後は、もう勝手な行動は慎んでな」

「……了解だ」

ダークの言葉に、一度こそ満足そうな表情を見せたはやてだったが、すぐに再び険しい表情へと戻る。

「でも、今回呼び出した一番の理由はそれやない……聞いたで。ヴィータが止めへんかったら……使つとたやろ、ミラージュ」

「……ああ。俺の位置からだ、あれを使わないと間に合わなかったからな」

はやての言葉にダークは少し言葉を濁らせながら答える。

それを見たはやては、一度顔を下に向けた後に再び話し始める。

「ダークはあの時から変わっとらんなあ……他人の為になら、すぐに無茶をしても助けようとする……まだあの時の事を気にしてるん？」

「はやて……」

顔を上げたはやての表情からは悲しみのようなものが読みとれるようになっていた。

「ダークはまだ、なのはちゃんの事が自分のせいだと思ってる……あの時の事は、ダーク一人のせいやない」

「いや……あの時、俺があ魔法を成功させていたら……いや、それよりもつと俺が傍についていればあんな結果になることはなかったんだ……」

「……その後悔、その時の後遺症もあつて戦い方を砲撃主体から接近戦主体に変えて、また魔導師としての活動を始めた……それもなのはちゃんの為なんやろう？」

「そうだ。俺はあの時誓った……大切な人……なのはを守るためには、命を捧げてでもいいってな」

「違う！」

はやてが声を荒げた、その目には涙が溢れていた。

「そんななん間違ってるよ……もしそれで死んでしまったら……なのはちゃんがどんな思いすると思うん！」

「……」

その言葉にダークは無言で俯いていた。

「なのはちゃんだけや無い……うちやフェイトちゃん、他の機動六課の皆もそうやで……ダークはもし自分がおらんくなって悲しむ人の事考えた事ある？ ……それを今のダークは全然分かってない……」

「だとしても……あの日以来、俺はこの命を捧げてもあいつを守る」と決めたんだ！ 家族も守れなかった俺は……もう何も失いたくないんだ！」

「ダーク……」

感情が高ぶりダークは大声を張り上げてたせいではやては少し怯えてしまった。

「怒鳴ったりしてごめんな……せっかく心配してくれてるのにな……本当にごめん！」

「ちよつとダーク！」

そう言い残すとダークははやての制止を無視し背を向け部屋を出て行った。

「何でだろ……」

隊長室を飛び出したダークは部屋のベッドの上にいた……その瞳には涙が溢れていた

「せつかくはやては心配してくれてるのに……あんな態度取ってしまっただ……くそっ！」

ダークはベッドに拳を何度もぶつけた……そして枕に顔を埋め声を殺して泣いた。

第4話 ホテル・アグスタ（後書き）

色々と無茶な構成になりつつある……不安要素もかなり増えてきましたw

観覧してくださっている皆さん、毎度毎度ありがとうございます^^

次の話ではついにあの事件が……そしてダーク君の過去が……

第5話 大切な事（前書き）

あと1つで更新が不定期になります><

第5話 大切な事

「じゃあ今日の訓練はこれで終わり」

「ありがとうございました……」

アグスタの警備から数日が経った、フォアード陣はいつも通りに訓練を終えた。

「皆お疲れ様」

「明日に備えて早く寝ろよ」

「お疲れ様でした……」

4人を見送った後にダーク、なのは、ヴィータの3人は片付けを終え隊舎に向かって歩いていった。

「今日も大変だったね」

「ああ……」

2人はダークが普段と違う事に気が付いた、いつの間にか2人と距離が開いており、その返事はとても弱弱しかった。

（くそっ……意識が朦朧としてきやがった……ここで倒れる訳には……）

「ダーク君どうしたの？」

2人が振り返った瞬間ダークはその場に倒れ込んだ。

「ダーク君！」

「おい！　しっかりしろ！」

2人が駆け寄るとダークは意識を失っておりその背中からはおびただしい量の血が出ていた。

「急いでシャルに連絡を！　私が誰か呼んで来るからダークを見てくれ！」

「うん、ダーク君！　しっかりして！」

ヴィータが去った後なのはは涙を流しながらダークの名前を必死に呼び続けた。

しかしダークはなのはの呼びかけに答える事は無く、その後ヴィータが呼んだ救護班にダークが運ばれていった。

医務室の前で待っていたなのはとヴィータは医務室からシャルに問いかけた。

「シャマル先生！ ……あのダーク君の容態は？」

「大丈夫よ命に別状は無いわ、今はぐっすり寝てるわよ」

「そうですか……」

なのはは一安心してホッと胸を撫で下ろした。

「それでシャマル、あいつの倒れた原因は何なんだ？」

「それがね、少し前だけどダークちゃん怪我をしてたみたいなの」

「確かに背中出血が酷かったしな」

「その怪我の傷が開いたみたいなの、ダークちゃんって昔から無茶するタイプだから、毎日激しい訓練を繰り返していたから……ちゃんと処置してないからこうなっちゃったのよ」

「でもいつ怪我したんだ？」

「もしかしてあの時……」

「なのは、心当たりがあるのか？」

「確実とは言えないんだけど……」

なのはは新人達の初出勤の時の事を話した。

「恐らくその時の怪我を私達に黙ってたな」

「もうダークちゃんには起きたら説教ね」

シャルが軽く笑いながら言った。

「もう遅いしなのはちゃん達も休んでね」

「ああ、明日は模擬戦だしな」

「そうだね、シャル先生お願いします」

「はい。なのはちゃん、ヴィータちゃんお疲れ様」

シャルと別れ2人は隊舎へと戻った。

「……ここは？」

ダークは目を覚ますと医務室のベッドの上にいた。

「あつダーク！」

傍らには丁度見舞いに来ていたフェイトがいた。

「良かった。皆心配してたんだよ」

「ああ、迷惑かけてすまないな。ここは医務室か？」

「そうだよ、訓練の終わりで帰る途中にダークは倒れたんだよ」

「そうか……」

ダークは周りを見渡した。

「そっいシャル先生や 医務室の主は？ あとどうしてお前がここにいるんだ？」

「シャルなら今ちよつと用事で出掛けてる。私は模擬戦に行く前に見舞いに寄ったんだ」

「そっなのかゝじゃあ俺もそろそろ行くかな」

ダークはベットから起き上がろうとした。

「ダーク？ どこに行くの？」

「模擬戦だからな。俺が行かないと……もうシャル先生に治療してもらって殆ど完治してるし」

「ダーク！ 駄目だよ。まだ治してもらってまだ時間が経って無いんだからね！」

勿論フェイトに止められた。

「じゃあ私はそろそろ行くね。また午前の訓練が終わったらまた皆と一緒に来ると思うから」

「分かった。頑張ってたな」

フェイトが部屋を出る直前にこちらを振り向くと

「あとね怪我したらちゃんと言いなさいね！ ってのがシャルからの伝言だよ」

「はいはい、じゃあな」

ダークは軽いため息をつきながら答えた。

「お大事に」

フェイトが出て行ってから少しした後、ダークはモニターを起動した。そこには模擬戦を開始しようとしているフォワード陣の姿があった。

《さうで、午前中のまとめ、20n1で模擬戦やるよ。まずはスターズからやろうか、バリアジャケット用意して》

《《はい！》》

なのはの言葉に元氣良く返事をするスバルとティアナ。

《エリオとキャラは私と見学だ》

《《はい！》》

（まずはスターズからか、どんな戦法を取るのかな？）

ダークはベットに横になりながらその様子を伺っていた。

《あっもう模擬戦始まっちゃってる？》

先程まで見舞いに来てくれていたフェイトが丁度訓練場に現れた。

《今はスターズの番》

到着したフェイトに説明するヴィータ。

《本当はスターズの模擬戦も私が引き受けようと思ったんだけどね》

《ああ、なのはもここんとこ訓練密度濃いからな。ダークみたいに倒れないように休ませねーと》

《なのは、部屋に戻っからもずっとモニターに向かいっぱなしなんだよ、もちろんダークもね。よく通信で2人で訓練メニュー相談して作ったりしてるし、ビデオで皆の陣形見てチャックしたり》

《なのはさんとダークさん、訓練中もいつも僕達の事見ててくれるんですよね》

《本当にずっと……後からお見舞いに行こうよエリオ君》

《そうだね》

《そっぴやあいつ目覚めたのか？》

《うん。もう体調は良いみたい》

《そうか、後から皆で押しかけるか》

（皆で後から来るのか、この模擬戦の感想でも伝えるかな）

《おっクロスシフトだな》

そして模擬戦が開始された。

《クロスファイアシュート！》

（始まったか〜ん？ 妙だな、いつもに比べてキレが無いな）

ダークはモニターを眺めながら観察していた。

《うりいああ！》

（スバル？ 正面から突撃とか無謀だろ！）

スバルは光弾が飛び交う中なのはに突撃した。それをなのははバリ
アで防ぐと弾き飛ばした。ダークは普段とは違う2人の戦法に段々
2人の思惑を読み取っていた。

（あいつら……まさか！）

そうこうしてるうちに再びスバルが突撃し、遠くから狙っていたテ
ィアナが消えた。そして2人の近くのウィングロードに本物が現れ
るとクロスミラージユに魔力刃を展開するとなのはに特攻した。

（やはり！ あいつら俺達が教えてない戦法を……）

そして3人は煙に包まれ辺りに衝撃波が伝わっていた。だがダークはぶつかる直前になのはがデバイスをスタンバイモードに戻すのが見えた。

（なのは……）

《おかしいな…… 2人とも…… どうしちゃったのかな？ 》

《えっ？ 》

ティアナは完全に不意打ちが成功したと思っていたので目の前の状況にびっくりしていた。なんせ魔力刃を素手で受け止め手から血を流しながらも淡々と話すなのはの姿がそこにはあった。

《頑張ってるのは分かるけど…… 模擬戦は喧嘩じゃないんだよ…… 練習の時だけ言う事聞いてるフリで…… 本番でこんな危険な無茶するなら…… 練習の意味無いじゃない…… 》

《あ、あの…… 》

《ねえ、私の言っている事…… 私の訓練…… そんなに間違ってる？ 》

（確かに2人は間違ってるけどなのは…… そこらでやめておけよ）

ダークはモニター越しに呟いたがティアナが魔力刃をしまうと近くウィングロードに飛び移り魔力の収束を始めた。

《私は！ もう、誰も傷つけないから！ 失くしたくないから！ だから……強くなりたいんです！》

その叫びがダークの心に刺さった。

（強くなりたい……か）

《少し……頭冷やそうか……》

そしてなのはの周りに魔法陣が現れた。

「不味い！ クロニクル！ バスターモードでセットアップ！」

【OK！】

ダークは立ち上がるとセットアップすると同時に魔法を唱えた。

《シュート……》

「スターダストミラージュ！」

【StarDust Mirage！】

そしてダークの姿が医務室から消えた。

「ティア……」

スバルは目の前の出来事に固まっていた。しかしなのはまた別の理由で驚き固まっていた。

「はぁ……ギリギリセーフだな」

「どう……して……」

煙が無くなるとそこには星屑の如く舞う金色の光を纏ったダークがそこにはいた。

「お前の言いたい事は分かる……だが少しやり過ぎだ」

「今は模擬戦中……ダーク君には関係無い……ちゃんと教えてあげないとまた皆無茶をする……かつての過ちを繰り返さない為に」

ダークは衝撃で気絶したティアナをそつとウィングロードの上に置くと再び振り返った。

「その気持ちは俺も同じさ。だけどやりかたつてもものがある……お前も頭冷やそうぜ」

「五月蠅い！」

怒りに我を忘れたなのははこちらに再びクロスファイアシュートを放ってきた。

「仕方ない……クロニクル！」

【S o n i c M o v e .】

そしてソニックムーブでギリギリの所で避けると一瞬でなのは後ろに現れた。

「しまった！」

「ごめんなのは……」

「くっ……」

そして手刀を振り下ろしなのはを気絶させた。

「は、速い……」

「なのはさんを一瞬で……」

「す、凄い……」

近くで見ていたスバルを含め新人フォワード達は呆気に取られてい

た。

「ふう……」

そしてダークはスバルの方に向くと

「お前達の言いたい事も分かる、だがなのは言いたい事も理解しないとな……」

「はい……すみません……」

「そろそろちゃんと話し合わなくちゃな……今日の模擬戦はこれで終わりだ……スバル、ティアナを自室まで運んでやってくれ」

「はい……分かりました」

そう言うときダークはなのはを担ぐと訓練場を後にした。

「昼までちょっと休憩な……」

「皆……また後でね」

そしてヴィータは一旦訓練の中止を告げフェイトはダークを追いかけていった。

「この鍵開けてもらっていいか？」

「うん」

部屋の前に着くとフェイトが鍵を開けなのはをそっとベットの上に置いた。

「まあしばらくしたら目を覚ますだろう……ごめんな」

気絶しているのは向かいそつと頭を下げたダークは出口に向かった。

「あの……ダーク……その」

フェイトがそつと呼び止めた。

「話なら別の場所でしょう……流石にここは居づらいからな……ついでに戻らなくちゃいけない場所もあるし」

「そうだな、私達以外にも言いたい事ある人もいるしな」

そつと苦笑するダーク達は部屋の外に出た。

「ダークちゃん、おかえりなさい」

「待ってたで」

医務室に戻ったダークは引きつった笑顔で待つシャマルとはやてが待っていた。そしてダークはフェイト、ヴィータを含めた4人にこつ酷く怒られたのであった。内容はミラージュの無断使用は勿論、怪我人による勝手な行動やその他諸々について叱られたのであった。そして……ティアナの件については本人を含めたフォワード陣を交えて話す事に決めたのであった。

「ふわあああ……ってもう夜か」

あれから叱られた後にもう怪我自体は殆ど治っていたので何とか部屋に戻る事を許されたダークは自室に戻った直後にミラージュの反動なのか、かなり疲れが来て昼からずっと寝ていたのであった。

「流石にミラージュは身体に負担が掛かる……病み上がりにも使ってもらえないな」まあそれを覚悟で今までも発動してきてるんだけどな」

ベットから起き上がり外に出た時だった。

「アラーム?!」

隊舎に響き渡るアラームを聞きダークはすぐさま隊長室に駆け出した。

「状況はどうなってる？」

「っ！……ダーク君」

「……なのは」

ダークが入って来たのを確認したなのはは気まずいのかそつと目線を逸らした。

ダークの方も何と声をかけて良いのか分からず気まずくなり視線を落とした。

「見ての通りや」

「恐らくこちらの戦力を探るのが目的だと思うけど」

「撃ち落としにいくのは簡単だけどこちらとしてはあんまり新しい手は見せたくない訳だな」

「うん、あんまりこちらの戦力を敵に知られるのは良い事じゃないしね」

「まあ実際、この程度の事で隊長達のリミッター解除って訳にもいかへんしな。高町教導官はどうやる？」

「こっちの戦力調査が目的なら、なるべく新しい情報を出さずに今までと同じやり方で片付けちゃうかな」

「それで行こう」

「ダーク、ちょい待ち」

出撃の準備の為に出て行こうとするダークをはやてが呼び止めた。

「何だ？」

「ダーク、出撃は認めるけどバスターモードは使用禁止な」

「勿論分かってるさ……って出撃は認めてくれるんだな」

意外な言葉に少し驚くダーク。

「特別な、シャマルも怪我自体はもう殆ど治ってるみたいやしな」

「感謝するぜ、はやて」

そしてフォワード陣はヘリポートに集合した。

「今回は空戦だから出撃は私とフェイト隊長とダーク隊長とヴィー

夕副隊長の4人」

「皆はロビーで出動待機ね」

「まあ俺達だけで何とかなると思うが何かあった時は頼むぜ」

「そっちの指揮はシグナムだ。留守を頼むぞ」

「」「はい！」「」

「……はい」

やはり模擬戦の事があるのか1人だけ返事が遅れるティアナ、無意識なのかなのはと目を合わせようとしてもしない。

「ああ、それからティアナ」

そつとなのはの方を向くティアナ。

「ティアナは出動待機から外れところか」

「っ？！」

「」「えっ？！」「」

その言葉に新人フォワード達に衝撃が走った。

「その方がいいな、そうしとけ」

「今夜は体調も魔力もベストじゃないだろうし……」

なのはの言葉にティアナが俯きながらそつと言葉を発した。

「……言う事を聞かない奴は……使えないって事ですか？」

「自分で言っていて分からない？ 当たり前的事だよ」

「現場での指示や命令は、ちゃんと聞いています！ 教導だって、ちゃんとサボらずやっています！」

《この！》

《やめるヴィータ》

ティアナの反論に叱ろうとしたヴィータがダークに止められた。

《何で止めるんだよ！》

《今はなのはに任せておけ、いざとなったら俺が止める》

《……分かった》

ヴィータは渋々引き下がった。

「それ以外の努力までちゃんと教えられた通りじゃないと駄目なんですか？」

「ティアナ、なのはの言いたい事はそういう事じゃない」

ダークがたしなめようとするが逆にダークの方に向くとさらに反論してきた。

「ダーク隊長は強いからそんな事が言えるんですよ……今日だって怪我してたはずなのに私を助けに来れるくらいの余力がありますし、

しかも今から出撃をするなんて……私見たいな凡人は、死ぬ気でやらないと強くなつてなれないじゃないですか！」

「別に駄目とは言わないさ……それで本当に強くなれるなら誰だつてすぐになつてさ！ お前はなのはの本当の教導の意味を分かつてない……それを今から改めて教えてもらえ！」

普段の穏やかな感じと違い怒りを込めたダークの言葉に言葉を失うティアナ、そしてダークはなのはの方を振り向くと

「なのは、お前も出撃から外れる」

「どうしてダーク君！ 私なら体調も万全だし問題なんて……」

ダークの言葉に驚きを隠せないなのは。

「それよりも大切な事がある……それをまずは解決しないと」

そしてダークはなのはの傍に行くと肩にそつと手を置いた。

「ダーク君……」

「お前の本当に伝えたい事を伝えるんだ……そろそろ話してもいいんじゃないのか……お前の過去のあの事件を……」

「……」

無言になるのは……だが覚悟を決めたのかダークの方を向いた。

「分かった、私の教導の意味を分かってもらつ為に話すよダーク君」

「そうか……じゃあ敵は俺達に任せろ！出撃メンバーは変更して俺とフェイト、ヴィータの3人で行く、異論は無いな？」

「いいよ！」

「そんじゃあ行くぞ！」

そしてダーク、フェイト、ヴィータの3人で出撃した。

第5話 大切な事（後書き）

少し長くなりそうなので本来1つだった話を区切ってここまでにしましたw

毎回観覧していただける方々ありがとうございます^^

第6話 2人の過去（前書き）

この章で更新が不定期になります＞＜

第6話 2人の過去

残ったフォワード陣となのははロビーについた。ロビーにはなのはが途中で連絡して資料を用意してくれていたシャマルとシャリーリーの姿があった。

「なのはちゃん、用意は出来たわよ」

「うん、ありがと。皆そこに座って」

その言葉にソファアに腰を下ろすフォワード陣。

「聞いて欲しいのはある女の子の話なの……」

なのははモニターに写った過去の自分について話し始めた。

「その女の子はね……本当に普通の女の子で魔法なんて知らなかったし、戦いなんてするような子じゃなかった」

なのはの説明に静かにモニターを見つめる新人達。

「友達と一緒に学校に行って、家族と一緒に幸せに暮らして、そういう一生を送るはずの子だった……」

「だけど事件が起こったのよ」

シャリーが新たな映像を流していく。そこには数々の敵と激戦を繰り広げる幼き頃のなのはの姿がそこにはあった

「魔法学校に通っていた訳でもなければ、特別なスキルがあった訳でも無い……偶然の出会いで魔法を得て、たまたま魔力が大きかったっただけのたった9歳の女の子……魔法と出会ってから僅か数ヶ月で命がけの実戦を繰り返した」

その映像の1つにフェイトとの戦闘を見たフォワード達が反応した。

「これって？」

「フェイトさん？」

「フェイトちゃんはその頃家族環境が特別でね……あるロストロギアを巡って敵同士だったの……」

「この事件の中心人物はテストロッサの母……その名を取ってプレシア・テストロッサ事件、あるいはジュエルシード事件と呼ばれている」

そしてなのはがフェイトを撃墜した映像を見て新人達は驚愕した。

「収束砲……こんな大きな！」

「9歳の女の子が……」

「ただでさえ大威力砲撃は身体に負担が掛かるのに……」

「その後もさほど時をおかず戦いは続いたの……」

「私達が深く関わった……闇の書事件」

そして映像ではヴィータによってなのはが撃墜未遂にまで追い込まれたシーンが映し出されていた。

「そしてその時敗北した私が選んだ選択肢は…… 当時は安全性が保障されていなかったカートリッジシステム……」

「そして、体への負担を無視して自分の限界以上の出力を引き出すフルドライブ、エクセリオンモードの使用……」

「誰かを救うため、自分の思いを通す為の無茶を私は続けたの……」

「けどそんな事を繰り返して身体に負担が生じないはずは無かった……」

「事故が起きたのは私が入局して二年目の冬、ヴィータちゃんやダーク君と出かけた異世界での調査任務の帰りに不意に現れた未確認体……いつもの私なら何の問題も無く落とせたはずの相手……」

「だけど溜まっていた疲労、続けてきた無茶がなのはちゃんの動きをほんの少しだけ鈍らせちゃったの…… その結果がこれ……」

シャルがモニターを操作するとそこには身体の大半に包帯を巻かれ、ベットに横たわるなのはの姿がそこにあった。

その姿に新人達は言葉を失った。

「なのはちゃん…… お見舞いに来た皆の前では笑っていたけど…… もう飛べなくなるかもとか、もう歩けなくなるかもって言われて…… どんな思いだったか……」

その説明の最中、必死にリハビリを重ねているなのはの映像が流れ、当時の事を思いだしていたのはと新人達も俯いた。

「無茶をしても、命を賭けても譲れぬ戦いは確かにある…… だがお

前がミスショットをしたあの場面は、自分の仲間の安全や命を賭けてでも、どうしても撃たねばならない状況だったのか？」

シグナムに問われ何も答えられないティアナ。

「なのはさん……無茶なんかしなくても良い様に本当に丁寧に、一生懸命考えて教えてくれてるんだよ……」

シャーリーのその言葉にティアナはそつとなのはを見た。

「私もダーク君もさ……皆に同じ過ちをして欲しくなかったただけなんだよ……ごめんねティアナ」

「どうして謝るんですか……私が悪いのに……」

「ティアナが1人悩んでる事に気付いてあげられなくてさ……私は教官失格だね……」

そう言うとき軽く笑うのはにティアナは涙を浮かべ抱きついた。

「そんな事無いです……本当にごめんなさい……ごめんなさい……」

そして泣きじゃくるティアナなのははそつと身体を寄せた。

海上に到着したダークはヘリのハッチが開いたのを確認すると飛び出した。

「さて、行くぜ！スターズ0、ダーク・アルジェント、行きます！

」

そして大量展開したガジェットに向かい牽制のブレイズシューターを数発放った。

「さて〜とつとと終わらせて帰還するかな。フェイトは左、ヴィータは右を頼む、俺は正面を落とす！」

「うん」

「OK」

「行くぜ！クロニクル！」

【I see!】

一気に加速をつけて次々と撃墜していった。

「なのはちゃん、もう1つ話があるの」

ティアナが落ち着いたところでシャーリーがそっとモニターを再び起動した。

「もう1つの話？」

「そう……なのはちゃんには初めて話すわね……彼にはずっと黙っ

ててって言われてたんだけど」

「まあこの機会に話すとするか」

「皆？ 一体何の話なの？」

なのは不思議そうな顔をしていた。

「なのはちゃんが倒れたあの事件に隠されたある1人の男の子の物語よ……」

そういうとシャーリーがモニターを操作するとなのは、フェイト、はやてと共に写る男の子の姿があった。

「あの子ってもしかして？」

エリオの質問になのはが答えた。

「そうダーク君だよ、ダーク君は小学校から一緒だったんだよ。魔導師になったのはちょうど闇の書事件の直後だけだね」

「闇の書事件をきっかけになのはの正体を知ったアルジエントは自ら志願して魔導師になったんだ。こいつもなのはと同じ様に魔法なんて知りもしない奴だったんだが奴も魔力が大きくてな、入局してすぐになのはやテストロッサ、主はやてに並ぶ活躍をしていたんだ」

そう聞かされた新人達は呆然としていた。

「だけどあの事件が起きた時なんだけどね……なのはちゃんが知らない真実があるの……」

「私の知らない真実？」

「まずは皆見てもらったと思うけどこの時のダークちゃんを見てどう思う？」

数々の映像を見て新人達は思い思いの回答を口にした。

「デバイスが違う？」

「今と違ってなのはさんみたいに杖のデバイスを使ってますね」

「その通り、アルジエントはかつて今のなのは様に砲撃主体の魔導師だったんだ……だが今の奴を見てお前達はどう思う？」

「ダーク隊長って言ったら剣主体のシグナム副隊長のように接近戦主体ですよ……」

「あっ……そういえばあの時光に包まれて現れたダークさんのデバイスは杖でしたよね？」

スバルが気付きシグナムに尋ねる。

「ああ、あれはアルジエントのデバイスのもう1つのモード……かつての砲撃主体時の姿……バスターモードだ」

「あの姿は普段は使用しない……というよりバスターの使用は隊長クラスのリミッターを1つ外すに等しいくらいの事なんだ」

「その多大なる魔力消費と引き換えに得られる火力はなのはちゃんをも上回ると言われてるわ」

そして過去のダークの戦闘映像を見た新人達が唖然とした……何せなのは収束砲をも上回る威力の砲撃を放っていたからである。

「そんなに！」

「凄い……」

「そしてバスターモード限定の技をいくつか存在するんだ……そのうちの1つがあの時使ったスターダストミラージュさ」

シャルはダークがあの時使用した魔法についての説明を始めた。

「あの時光に包まれてダークさんが出現したあの魔法ですよね？」

「そうよ、スターダストミラージュは一言で言えば移動魔法……自身の体力と引き換えに周りに光の粒子を出現させながら瞬間移動する技よ……」

「そしてあの粒子はバリアの役割を果たすのよ」

「だからティアに放たれた光弾を防いだダークさんには傷1つ付いていなかったんだ」

「ただ、あの技は普段禁止してる技なんだ」

「えっ？ そうなんですか？」

「あの技は魔力消費があんまり無いが体力を大きく消耗するんだ……だから本来は使用は控えるように言ってるんだけど……」

シグナムとシャルは軽く呆れたような顔をした。

「ダークちゃんあの性格だからね……前の誤射した時もヴィータが止めなきゃ使ってたのよ」

「そうなんですか……ダークさん……」

「でもどうして普段使わないんですか？」

「これだけ強いモードなのに……」

「その理由を今から説明するわね」

一通りダークの説明が終わるとそつとシグナムは真剣な顔へとなりなのはを見つめた。

「なのは……この事はアルジェントから黙っててくれとあの日以来頼まれてた事なんだ」

「ダーク君が？」

「あのお前が重症を負った事件の時……ダークもあの場にいた……いや正確にはあの付近にいたんだ」

「ヴィータからの通信を受けたアルジェントはすぐさま駆けつけお前を見て愕然とした……そこであいつはある魔法を使った……」

「ある……魔法？」

「その魔法は現在は本人は勿論の事、使用が禁じられている禁断魔法を使った……」

「禁断魔法！」

「私達も訓練校で聞いた事があります……その名の通り使用が禁じられてる魔法……その主な理由は身体への負担やその効果の危険さから絶対使用禁止の魔法……」

「奴は……元々家庭の事情等が原因で自己犠牲の精神が強いタイプでな……秘密に取得しようとしていたんだ……」

「そしてダークちゃん……まだ未完成だった禁断魔法を使った……その魔法の名はダメージ・ドレイン……」

「それって?!」

「その名の通り……他の人物の負っているダメージを自らの身体に吸収する魔法……だがダークは他の人の制止を振り切り発動した……」

「……」

「その結果がこれだ……」

その瞬間皆は言葉を失った……病室に横たわるダークは全身を包帯で巻かれ意識は無く殆ど死んでいるに等しい状態だった。

「最初は成功したかのように見えたダメージ・ドレインも途中から暴走し、ダークはなのはのダメージを取れないどころかその反動からなのは以上のダメージを負ってしまったんだ……」

そして次の映像はなのはの様にリハビリに励むダークの姿が映し出された。

「この怪我でダークちゃんは1年の間生死の境を彷徨って、やっと目を覚ましたのも束の間……2年間リハビリをしてまた魔導師として復帰したのよ……だけど彼にはある障害が立ちはだかったの」

「障害？」

「余りにも大きいダメージを負った為、その後遺症として昔のように魔法を自由に放てなくなっただ」

「正確に言えば魔力の回復量が急激に衰えちゃったのよ……元々砲撃主体というスタイルとなのはちゃん以上の火力から来る大量の魔力消費……それを補えないダークちゃんにとっては死活問題……」

「1度は絶望していたアルジェントがとった行動がスタイルのチェンジ……つまり今の接近戦型スタイルの確立さ」

次の映像ではダークがデバイスを改造し今のソードモードの確立した映像が流れた。

ヴィータ、シグナム、ザフィーラによって何度も敗北させられながらも諦めず戦い続けるダークの姿がそこにあった。

「アルジェントは我々の元にやってきては近接戦闘を学んでいた……あいつ自身センスは良かったから剣技は自身で鍛え上げたようだがな」

「そうだったんだ……」

「前のシグナム副隊長とあそこまで渡り合ってたのが元々のスタイルじゃないなんて……」

「ダークさん……本当に凄い人……」

「本当に凄いよね……ダーク君……」

一通りのダークの過去を聞いた新人達の横でなのはは涙を浮かべていた。

「凄いけど……本当に……馬鹿なんだから……」

そう言うとなのははそっと出て行った。

「なのはさん……」

「あとは本人に任せるかな、シャーリー頼んだぞ」

「分かりました」

そう言うシャーリーはヘリポートへと向かった。

「ラスト1機、ダークお願い！」
「了解、セイバースラッシュ！」

ダークの放った斬撃によつて最後のガジェットが破壊された。

「スターズ0、24機目を撃墜、これで全滅です。増援ありません」

「付近の海上観測隊に連絡をして、残骸の回収を」

「はい」

「待機する必要も無さそうやから3人は戻ってもらつてええかな、他の皆も解散で」

「了解」

そしてヘリに戻り六課本部に帰還した3人は、ヘリポートでシャリーがこちらに向かい頭を下げているのが見えた。

「どうしたんだ？ あいつ」

そしてヘリから降り立ったダークは戦闘中の話した内容や反応を聞いていた。

「んでついでに俺の事も話しちゃったって事か……」

「ご、ごめんなさい」

「いちよう許可とつてくれよ……」

「駄目だぜ、口の軽い女わよ」

ヴァイスも呆れた表情をしていた。

「まあ、いずれは話さなきゃいけない事だしな」

「そうだね」

「まあ……ティアナと仲直り出来たならそれで良いよ。シャーリー、なのはどこにいるかわかる？」

「えっと、多分……」

そしてダークはシャーリーの言っていた場所についた。
そこには座っているなのはの姿があった。

「あつ……ダーク君……」

「よう」

気付いたなのはがこちらに声をかけると軽く手を上げて返し、そつと隣に座った。

「シャーリーやシャマル先生達から話聞いたよ……私を庇って禁断魔法を使った事……どうして黙ってたの？」

「お前に心配を掛けたくなかったからさ……それにこの事話すとお前は絶対に俺の後遺症が出たのは自分のせいだと責める……それは避けたかったからな」

「だってそれは……」

「あれは俺がしたかったからしたんだ……それにあの魔法を成功出来なかった俺が未熟だったって事さ」

「そんなの間違ってるよ！」

なのははダークの服を掴んだ。その目からは涙が溢れていた。

「なのは?!」

「例えそれで助かっても私は嬉しくなんかないよ……ダーク君が死んじやったらどうするの……もっと自分の命を大切にしてよ……」

「……ああ、約束する」

ダークはそつとなのはを抱き寄せた。なのははダークの胸の中で声を殺して泣いた。

しばらくして落ち着いた所で再び話を進めた。

「まあティアナと仲直り出来て良かったよ」

「うん、お陰で伝えたい事が伝えられたよ。ありがとうねダーク君」

「別に気にするな、変に中違いが起きたままじゃあ駄目だしな」

「……ダーク君……1つ聞いてもいい？」

しばらくして落ち着いた後になのはが話し始めた。

「何だ？」

「どうして私をそんなに庇ってくれるの？」

「……何でだろうな」

軽く流しなのはの頭を撫でた。

「ちょ、ちよっとダーク君！ 誤魔化さないでよ」

すぐにダークは真剣な顔になると

「いずれ時がくれば話すよ」

つと言い残しそつと立ち上がった。

「えっ……ちよっと待ってよダーク君」

なのははその後を追いかけていった。

第6話 2人の過去（後書き）

中途半端になってしまったな><

次にデバイスのモードや技についての解説を少し載せます^^

何とかそれで時間稼ぎをwww

改めて皆さん観覧ありがとうございます^^

オリキャラ紹介2（前書き）

今回はデバイスや魔法について紹介します^^

ネタバレを極力さける為にいくつか紹介していない魔法やモードもあります^^

オリキャラ紹介2

デスクロニクル・ネクスト

デバイス形状

スタンバイモード

黒い剣型のアクセサリ（普段は首に掛けている）

ソードモード

近距離格闘特化のモードでデバイスは両手剣に変化する。両手剣だがダークが腕を上げた為、片手でも扱える程になり威力と素早さと高さを両立している。

魔力の消費を最小限に抑える為この状態で戦う事が多いがこの形態で魔法を放てないわけではなく、この状態からでも魔力消費をかなり落とした砲撃を放つ事は出来る。

バスターモード

遠距離砲撃特化でかつてはこのモードを主流にしていた。デバイスは杖に変化する。この状態で放つ魔法は魔力の消費が激しく、過去の後遺症の為連戦が出来ないのでこの形態の後は基本ソードのみで戦う事が多くなる。

剣技

鬼炎斬

修羅を纏い、剣を構えて螺旋を描くように回転し周りの敵を斬る技。主に囲まれた時や敵から来るときに待ち受ける時に使われる。ガリユー戦とシグナムとの模擬戦で使われ、ガリユー戦では飛び掛つてきたガリユーを弾き飛ばし、シグナム戦では紫電一閃と相打ちした。

セイバースラッシュ

剣を大きく振るう事で放たれる斬撃である。若干尾魔力を付加させる事で射程距離がそれなりにあり少し遠くにいる敵にさえあたる事もある。威力も高く、互いにリミッターが掛かっている状態でシグナムの飛竜一閃と相打ちした。

使用魔法

ブレイズシューター

射撃魔法

消費魔力 小（ソード時）中（バスター時）

アクセルシューターの強化タイプの魔法。

弾速、誘導性を上昇させた代わりに消費魔力が上がっている。

エターナルバスター

直射型砲撃魔法

消費魔力 小→大

ダークの主砲の砲撃魔法。威力や範囲を自由自在に操れ、それにより魔力消費も変わる。

ソニックムーブ

移動魔法

消費魔力 極小

高速移動魔法。フェイトのものと同様に瞬間移動したかのように見えるほど、高速の移動を行う。

ダークのは少し移動速度と消費魔力を下げた代わりに、何度も瞬時に使えるようにしてソードモードと組み合わせる事が多い。

スターダスト・ミラージュ

移動魔法

消費魔力 小

バスターモード時にのみ使用可能。体を金色の粒子化させ瞬間移動

する技。出現時に粒子が盾の役割を果たす為不意打ちにも強い。さらにソニッククムープとは違い瞬間移動なので離れた場所に駆けつける時等に使用される。

魔力消費は少ないが、それ以上に身体の方に大きな負担となるので存在を知っているはやてには普段は禁止されている技である。

ダメージ・ドレイン

禁断補助魔法

消費魔力 無し

使用者の手が触れた相手の負ったダメージを自らの体に移し変える技。一歩間違えば使用者も死に至る可能性のある危険な技である。

あの時の事件以来ダーク自らが封印している技である。

オリキャラ紹介2（後書き）

今回は紹介だけです^^

しばらく不定期になりますますがよろしく願いします^^

第7話 機動六課のある休日（前編）（前書き）

1ヶ月振りの投稿です^^

課題も終わりましたが不定期で更新を続けていきます

第7話 機動六課のある休日（前編）

「はい、今朝の訓練と模擬戦も無事終了。お疲れ様」

「それと実は今日の模擬戦が第2段階の見極めだったんだが」

「えっ?!」

ダークの言葉に驚く新人達。

「どうでした？」

なのはがフェイトに尋ねた。

「合格」

「「はやっ?!」」

フェイトの返事の速さにスバルとティアナは驚きの声を上げた。

「まっ、こんだけみっちりやってて問題あるようなら大変だったった」

「その心配も無く皆ちゃんとやれてるしな」

「私も皆良い線行ってると思うし、じゃあこれにて2段階終了」

新人達はそれぞれ喜びの声を上げる。

「デバイスリミッターも1段解除するから、後でシャーリーのところに行ってきてね」

「明日からはセカンドモードを基本形にして訓練するからな」

「えっ？ 明日？」

ダークの言葉にキヤロが尋ねた

「ああ、訓練再開は明日からだ」

「今日は私達も隊舎で待機する予定だし。今日は皆1日お休みです」

「お前らは入隊日からずっと訓練漬けだったしな。久々に街に行くなりして、羽を伸ばしてくるといい」

「……はい！」

隊長達の言葉に再び喜ぶ新人達であった

「ハンカチ持ったね。IDカード忘れてない？」

「え〜と大丈夫です」

「あつ……お小遣いは足りてる？もし足りなくなると大変だから……」

「あのフェイトさん、その……僕も、もうちゃんとお給料を頂いてますから」

「あつ……そうか〜」

「大丈夫です、ありがとうございます」

「フェイト〜相変わらずの過保護っぷりだな〜」

エリオを気にかけているフェイトの後ろではダークが軽く笑っていた

「もうダークったら〜ダークは無関心過ぎなの！」

「別に関心が無いわけじゃないさ。ただその人達がしたいようにさせればいいと思うんだけどな」

「もう！万が一2人に何かあつたらどうするの？」

「俺が悪かったよ〜じゃあそろそろ姫をつれてくるよ〜王子様」

少し怒ったようにダークに問い詰めるフェイトにダークはエリオにウィンクして見せると部屋を逃げるように出て行った

「ちょ、ちよつとダークさん〜」

「もう！ダークったら……」

戸惑っているエリオにフェイトが再び話しかけた

「でも普段はダークさんもフェイトさん程じゃないけど色々と気にかけてくれますよ」

「そうかな？私にはかなり無関心に見えるけど？」

その言葉にエリオは軽く笑った

「とりあえず、エリオは男の子だしキャラ口より2ヶ月年上なんだから、ちゃんとエスコートしてあげるんだよ」

「はい！」

「エリオ～お連れしたぜ」

「ごめんなさい～お待たせしました」

そこにキャラ口を連れたダークが戻ってきた

「あっキャラ口良いね～可愛いよ」

「ありがとうございます」

フェイトからの褒め言葉に喜ぶキャラ口

見とれているエリオにダークは念話で語りかけた

《エリオ、お前から何か言っただけな》

《でも……その、何を言っただけならいいからなくて……》

《お前の率直な感想を伝えればOKさ、頑張れよ》

《はい、ありがとうございます》

「キャラ、その……とっても似合ってるよ」

「あつ……エリオ君ありがとう」

2人は顔を赤くしてうつむいてしまった

「初々しいね」

「そうだね」

そんな2人をダークとフェイトは微笑ましくみていた

2人を見送りに来るとそこにはなのはの姿があった

「ライティング隊も一緒にお出かけ？」

「行ってきます」

「はい、気をつけて」

「あんまり遅くならないようにするんだよ、夜の街は危ないからね」

「「はい」」

まるで母親のように世話を焼いているフェイトの姿を見てなのはとダークは軽く笑っていた

そして2人を見送ると3人は隊舎に戻って行った。

なのはとフェイトと別れたダークは部屋へと戻るとデバイスの調整を始めた

「クロニクル、何とか出来そうか？」

【However, this mode becomes in the body of mastering and it becomes a further load.】

【訳：しかし、このモードはマスターの体に更なる負担になります】

「それは分かっている……だが以前のようなAMF状態での戦闘に對しての戦闘や更なる速さを持つ敵に對して必要なんだ……俺がまた皆を守ってやらないといけないから」

ダークは以前の戦闘の経験から新たなモードを実装しようとしていた

【Mastering……has been understood. Let's immediately start adjusting though it is not possible to mount at once.】

【訳：マスター……分かりました。すぐには実装は出来ませんが早速調整を始めましょう】

「ああ、このモードを早く完成させないとな……超高機動特化モード……アクセルモードを……」

自分の部屋で調整を行っているとなのはから通信が入った

《ダーク君、緊急事態につきすぐにヘリポートに向かって！状況については後から説明するから》

《OK、すぐに向かう！》

「行くぜ、クロニクル！」

【I・see】

ダークは通信を切るとクロニクルを持ちヘリポートへと向かった

そしてヘリにはなのは、フェイト、シャマルとリイン？が乗り込んだ

「それで状況は？」

「サードアベニュー、F-23の路地裏にて、キヤロとエリオがレリックと思えるケースとそれを持っていた小さな女の子が一人保護したの」

「レリックとその女の子の容態は？」

「キヤロが封印処理を済ませてはいるみたいだけど、女の子は今意識が無いみたいだから……」

「無事だといいが……」

そして隊長達を乗せたヘリが飛び立った。

ダーク達が隊舎を出ている時に……ある場所では別の人物が動いていた

「レリック反応を追っていたドローン？型六機、全て破壊されています」

「ほう……破壊したのは局の魔導師か、それとも……当たりを引いたか？」

通信で紫色の長髪の女性から報告を受けた研究服を着た男が僅かに笑みを浮かべる。

この男こそ次元犯罪者…… スカリエッティである

「確定はできませんが…… どうやら後者のようです」

「素晴らしい…… それならすぐに追跡をかけるとしよう」

「ねえドクター、それならアタシも出たいんだけど？」

スカリエッティ達が声のした方を向くと、赤い髪の少女が近づいてきた。

「ノーヴェ、君か」

「駄目よノーヴェ、貴方の武装は調整中なんだし」

「今回出てきたのが当たりなら、自分の目で見てみたい」

「別に焦らずとも、あれはいずれ必ずここにやってくる事になる訳だがね」

「っ……」

「まあ落ち着いて待っていてほしいな…… いいかい？」

「……分かった」

ノーヴェと呼ばれた赤髪の少女は不安そうにしながらも引き返していった

「ドローンの出撃は状況を見てからにしましょう。妹達の中から、

適任者を選んで出します」

「ああ……あと愛すべき友人にも頼んでおくとしよう……優しいルーテシア、レリック絡みだ、少し手伝って欲しい」

「うん……分かった……」

（またあの不思議な魔導師も来る……必ず……）

ルーテシアはそう心の中で思うと空を見上げた

第7話 機動六課のある休日（前編）（後書き）

久しぶりなのでちょっと自信が無いですw

次はまた前程よりかは早く投稿したいです^^

第8話 機動六課のある休日（後編）（前書き）

今書き終わったので今から寝ますw

第8話 機動六課のある休日（後編）

「うん、バトルは安定してるわね。危険な反応もないし、心配ないわ」

現場に到着したシャマルは早速女の子の様子を見ていた。幸い大きな怪我や危険な反応はなかった。

「はい」

「よかった……」

女の子が無事であることを聞いて、新人達は安堵の笑みを浮かべた。

「ごめんねみんな。お休みの最中だったのに……」

「いえ」

「平気です」

「ケースと女の子はそのままヘリで搬送するから、みんなはこっちで現場調査ね」

「……はい！」「……」

「ダークちゃん、この子をヘリまで抱いてってもらえる？」

「OK」

「っ……」

なのはは少女を見ながら悲しげな表情をしていた。

「どんな事情でこうなったかは知らないけど……この子は必ず守る……」

ダークは抱えた少女を見つめながら呟いた。

「ガジェット来ました！ 地下水路に数機ずつのグループが少数……16……20！」

「海上方面、20機単位の5グループを確認！」

へりへと少女を連れ戻った隊長達はガジェット出現の通信を受けた。

「数が多いな……どうするはやて？」

「そっやなあ……」

「スターズ2からロングアーチへ、こちらスターズ2」

隊長達が話し合っているとヴィータから通信が入った。

「海上で演習中だったんだけど、ナカジマ三佐が許可をくれた、今現場に向かっている。それからもう1人」

「108部隊、ギンガ・ナカジマです。別件捜査の途中だったんですが、そちらの事例とも関係がありそうなんです……参加してもよろしいでしょうか？」

その1人とはギンガの事だった。参加の許可を求めたギンガにはやては許可を出した。

「うん、お願いや」

「ほんならヴィータはラインと合流、協力して海上の南西方向を制圧」

「南西方向了解です」

「なのは隊長とフェイト隊長とダーク隊長は北西方向を頼むわ」

「了解！！」

「ヘリの方はヴァイス君とシャルマルに任せてもええか？」

「お任せあれ」

「しっかり守ります」

その言葉にヴァイスとシャルマルが心強い返事をする。

「ギンガは地下でスバル達と合流、道々別件の話も聞かせてな」

「はい」

「それじゃあ皆頼んだで！」

「了解！」「」「」

そしてダーク、なのは、フェイトの3人はヘリポートに降りたった。

「フォワードのみんな、ちょっと頼れる感じになってきた？」

「うふふ、もっと頼れるようになってもらわなきゃ」

「だな、俺達の後が継げるくらいにはなってもらわないとな……さて、俺達も行くか！」

「うん！」

【【Set Up！】】

そして3人はデバイスを起動させ、バリアジャケットを纏った。

「早く事件を片づけて、また今度お休みをあげようね」

「だな、その時はみんなどこかに遊びにいかうか」

「うん」

そして3人は北西方向へと飛び立った。

それと同時に敵も動き出していた。

「へりに確保されたケースとマテリアルは妹たちが回収します。お嬢様は地下の方に……」

「うん……」

「騎士ゼストとアギト様は……」

「……別行動」

「お一人ですか？」

「一人じゃない……私にはガリユーがいる」

そう言うとデバイスから召喚獣を出し顔に近づけていた。

「失礼しました。協力が必要でしたらお申し付け下さい。最優先で実行します」

そして通信が切られた後にルーテシアは行動を開始した。

「うん……行こうかガリユ……探し物を見つける為に……」

そう言うと足元に魔法陣を展開した。

「またあの魔導師が来ると思うけど無理はしないでね……あの人は手強いから」

最後にそつと呟くと転送魔法を発動し、その場から姿を消した。

「はああああ！」

ダークが1グループの最後の1機を撃墜した。

「スターズ0、スターズ1、ライトニング1、共に3グループ目を撃破。順調です」

「スターズ2とリイン曹長も1グループ目を撃破です」

「この調子で一気に落とすぜ！」

「あれは?!」

「増援？」

「でもこの反応……」

「航空反応増大！ これ……嘘でしょう!？」

「なんだこれは……」

ロングアーチのオペレータールームは驚きを隠せなかった。なんせ膨大な数のガジェット反応が突如出現したからである。

「波形チェック、誤認じゃないの?!」

「問題でません、どのチェックも実機としか……」

「なのはさん達も、目視で確認出来るって……」

「グリフィス君……ここは頼むで」

「はい！」

グリフィスに任せるとはやてがオペレータールームを出て行った。

「幻影と実機の、構成編隊……」

「防衛ラインを割られない自信はあるけど、ちょっとキリがないね」

「ここまで派手な引き付けをするって事は……」

「へりか地下道に、主力が向かっているって事が……」

3人はなのはが展開した球体型の防御魔法の中で相談していた。

「なのは、ダーク……ここは私が残ってここを抑えるからヴィータと一緒に行って」

「フエイトちゃん？」

「フエイト？」

「3人でこのまま空戦していたんじゃない時間掛かり過ぎる………だけ
と限定解除すれば広域殲滅でまとめて落とせる！」

「それはそうだけど……」

「それなら俺がバスターを解除して最大範囲でバスターを放てば一掃出来る……俺がやる」

「駄目だよダーク君……」

「割り込み失礼、ロングアーチからスターズ0とライティング1へ、その案も限定解除申請も部隊長権限にて却下します」

その時、割り込みで通信が入ったその通信者ははやてだった。

「はやて？」

「はやてちゃん……なんで騎士甲冑？」

「お前……まさか?!」

「嫌な予感私は同じでな。クロノ君から、私の限定解除許可をもらうことにした……空の掃除は私がやるよ」

「良いのか？ はやて……お前のリミッターを1つ外しちゃって」

ダークの心配そうな言葉をよそにはやては決意の固めた表情でこちらに答えた。

「使える能力を出し惜しみして、後で後悔するのは嫌やからな」

「そうか」

はやての固い決意が見えたのでダークは納得した。

「ちゅうことでなのはちゃん、フェイトちゃん、ダークは地上に向かってヘリの護衛、ヴィータとリインはフォワード陣と合流してケ

「スの確保を手伝ってな」

「了解……と言いたいがここが悪いがはやて……俺も地下に向かわせてもらっぜ……」

「ちよつとダーク?!」

なのはとフェイトが止める間も無くダークは高速で地上に向けて行ってしまった。

(必ず地下のレリックをルーは狙いに来るはず……すまないはやて……また命令違反をしちまって……)

そつ心の中で呟くとさらに速度を上げ地上を目指した。

「はやてちゃん、どうする？」

「行っけしもうたもんはしゃあない……さっき伝えた通り皆頼むな」

「了解!」

そしてダークを追うようになるのは、フェイトも地上を目指して飛び立った。

その頃、地下ではギンガと合流した新人フワード達がガジェットと戦闘を行っていた。

「えい！ やあ！」

「フリードー！」

「はあああつ！」

「デイベー……バスター！」

そしてガジェットを殲滅した新人達がしばらく進むと少女が持っていたのと同じケースが落ちていた。

「あつありました」

全員が安堵の表情を浮かべているとティアナが異変に気付いた。

「何この音？」

何者かが高速で壁を蹴り動きキャロに迫っていた、そして何者かが放った魔力弾の着弾の衝撃によってキャロはケースを落としてしまった。

「きゃあ！」

「キャラ！　でああああ！」

すぐさまその対象に向かいエリオが攻撃を仕掛けた。

「くっ！」

互いに相打ち、着地したがエリオは頬に傷を負ってしまった。

「エリオ君！」

そして攻撃を仕掛けてした者……ガリユーもステルスが切れその姿を現した。

「あつ！」

そして落ちているケースを拾っているルーテシアを確認したキャラはすぐさま近寄った。

「……邪魔」

ルーテシアは容赦無く近づくキャラに魔力弾を放った。キャラはすぐさまプロテクションを張るがその威力に耐え切れずに吹き飛ばされてしまった。

「くっ……きゃあ！」

「キャラ！　うわあ！」

ガリユーと向き合っていたエリオは吹き飛ばされたキャラを受け止めようとするが、受け止めきれずにエリオを飛ばされてしまった。

そして2人が壁に叩きつけられる瞬間だった。

「何かが高速でやってきます！」

「魔力反応大きい！」

（遂に来た……）

2人が壁にぶつかる瞬間、天井を突き破り現れたダークが2人を抱えていた。

「ふう……ギリギリ間に合ったな」

「ダーク隊長?!」

「何故ここにダークさんが？」

「まあお前達の援護にきたぜ……まあ必要無かったみたいだけどな」

ダークがそつと壁に2人を置くとその間にもナガシマ姉妹とガリユーが交戦していた。そしてレリックを持って行こうとしたルーテシアがティアナに拘束されていた。

「ごめんね乱暴で、でもねこれ本当に危ないものなのよ」

「……っ！」

「スターレンゲホイル！」

「皆離れる！」

ダークが叫んだ瞬間どこからか放たれた魔法により凄まじい轟音と

閃光により皆視界と聴覚を奪われてしまった。

「くっ！」

ケースを持ち去ろうとするルーテシアにティアナが銃口を向けた。

「ティアナ！」

「えっ！」

その瞬間ガリユーが飛び掛るがダークが寸前の所で防いだのであった。そしてガリユーを思いっきり薙ぎ払った。

「大丈夫かティアナ？」

「はい、何とか……このままじゃあ！」

「俺が何とかする……待て！」

ダークがルーテシアを追いかけるとそこにはリンと同じくらいのサイズの少女がいた。

「つたくも……私達に黙って勝手に出かけちゃったりするからだぞ」

「アギト……」

「ん？ あたしのスターレンゲホイルを回避しやがったのか？ ならもう1回行くぜ！」

アギトと呼ばれた少女は再び先程の魔法を発動しようとしていた。

（待てよ……この技を逆に利用すれば……こうなったら閃光が光り始める一瞬に賭ける！）

ダークは発動と同時に一気に駆け抜けた。

「ダーク隊長！」

「しまった！ ルールー！」

「っ！」

そしてその閃光が引いた時にはダーク、ルーテシア、アギトの姿はどこにも無かった。

「ダーク隊長？！ どこに行ったの？」

「分かりません……」

「ケースは？！」

「あつ……良かった～ありましたよ」

「まずはこれの封印処理から……」

「ちょっと待つてキャロ」

封印処理をしようとしたキャロをティアナが止めた。

「どうしたんですかティアさん？」

「ちょっと考えがあるんだ……手伝って」

「はい！」

「まずはここからの脱出ね……スバル！ 行くわよ！」

「うん！」

2人はウイングロードを展開して地上へと伸ばしていった。

その頃地上ではダークガルーシアとアギトとガリユールと向き合っていた。

「ガリユー……怪我大丈夫？」

ガリユーは無言で頷いた。

「戻って良いよ……アギトがいてくれるから……」

そうルーテシアが言うところガリユーはデバイスの中に戻っていった

「おいお前！　あたし達まで連れて来た理由を教えてもらおうか？
！」

アギトがダークに突っかかる感じで話しかけた。

「目的があつてな……ルーと話がしたくてな」

「つてもしかしてお前、ゼストの旦那が言っていたダークってやつか？」

アギトは以前ダークが会ったゼストと知り合いのようであつて話を聞いていたらしくダークの事を知っていた。

「ああ、それは俺の事だ。答えられる範囲でいいから答えてくれ、話が終わればまた逃がしてあげるから」

「本当におかしなやつだな……まあ敵とはいえ借りがあるわけだし答えてやるよ」

「うん……分かった……」

敵同士なので最初は渋っていたが借りがあるため、そしてダークが

らは敵意が感じられなかったので2人はダークの質問に応じた。

「まずルー、お前の目的が知りたい。何故レリックを集めているんだ？ スカリエッティに命令されているからか？」

「それは違う……」

「あの変態医師とは本当は関わりたくないんだけど……ルールーには大事な目的があるんだよ」

「私は……レリックを集めているというよりは……あるナンバーのレリックも求めているだけ……」

「そのレリックを使って何をするつもりなんだ？」

「それを使ってお母さんを蘇らせる……」

「……えっ？！ お母さんってメガーヌ・アルピーノの事か？」

その言葉に2人は少し驚いていた。

「……そうだけど……何故貴方が知っているの？」

先程のルーテシアの言葉にダークは驚きを隠せなかった。

（そんな……でも義母さんは亡くなったって聞いていたけど……）

「おい？ どうしたんだよ？！」

「って事はルーのお母さんの体は今スカリエッティが持っているの

か？」

「うん……」

「そんな……」

ダークは驚愕の事実を突きつけられ、完全に俯いてしまった。

「そろそろあんたの正体について教えろよ、何でルーラーの事とか知ってるんだよ？」

「俺はルーの……ん?! 不味いお前達早く逃げろ！」

アギトの質問に答えようとしたダークは他の反応が迫っている事に気づき、2人を逃がそうとした。

「何だってんだよ?! 突然?!」

「俺の仲間が迫ってる……急がないと捕まるぞ! 話はまた今度出来たら続きを話そう……」

「早く行こう! ルーラー!」

「うん……っ!」

「しまった!」

（何て事だ……）

しかし2人はダークの目の前でバインドにより拘束されてしまった。

「ここまでです！」

「ダーク……足止めしてくれたって訳じゃなさそうだな……後で色々と聞かせてもらおうぞ……」

そこには援護にやってきたリン？とヴィータの姿があった。

第8話 機動六課のある休日（後編）（後書き）

中途半端なところで切ります。

何か変になってきました><

そしてダークとルーちゃんとの関係が遂に明らかになりました^^

そしてこれがこれからのストーリーにどう影響していくのかがポイントですね^^

第9話 ナンバーズ（前書き）

今回からストーリーのおさらび的な感じであらすじを書いてみます
ルーテシアとの会話する為にアギトの技を利用して地上に出て会話
していたダークは自身の義理の母であるメガーヌの体がスカリエツ
ティのところにある事、そしてメガーヌを復活させる為にルーテシ
アがレリックの探している事を知り苦悩する。
そして2人を逃がそうとしたその時、ヴィータとリインにより2人
が捕まってしまう……

第9話 ナンバーズ

そして地下にいたフォワード達が集まった頃、別の場所でヘリを監視している者がいた。

「でもいいのかクアットロ、撃っちゃって？」

「うふふつ……ドクターとウーノお姉様曰く、あのマテリアルが当たりなら……本当に聖王の器なら砲撃くらいでは死んだりしないから大丈夫、だそうよ……ん？」

《クアットロ、ルーテシアお嬢様とアギトさんが捕まったわ》

通信が入り、ルーテシアが捕まった事の報告を受けていた。

《ああ〜そういえばあのお兄様と話してる間に捕まってましたね〜》

そう言うクアットロと呼ばれた眼鏡をかけた女性は軽く笑った。

《今はセインが様子を窺ってるけど……》

《……フォローしましょうか？》

《お願いするわ》

そう言うクアットロは別の人物へと通信を繋いだ。

《セインちゃん》

セインと呼ばれた人物は地面に潜り様子を伺っていた。

《あいよくクア姉》

《こつちから指示を出すわくお姉様の言つとおり動いてね》

《了解く》

そして次にクアットロはルーテシアに通信を繋いだ。

《はい、ルーお嬢様》

《……クアットロ？く》

《何やらピンチのようで……お邪魔でなければクアットロがお手伝いいたしますよ？く》

《お願い……く》

《はいくではクアットロが言う言葉を全て先程一緒に会話していた魔導師に言ってくださいく》

《……わかったく》

その頃なのはとフェイトは市街地に向け飛行していた。

《なのはさん、フェイトさん、大丈夫ですか？》

《幻影が市街地に向けても展開されてて時間が掛かっちゃって》

《今やつと抜けたけどヘリの姿はまだ見えない……》

《まだヘリは無事なの？》

《今はまだ大丈夫ですが……えっ！》

《どうしたのシャーリー？》

《市街地にエネルギー反応……大きい……砲撃のチャージ確認！
物理破壊型 推定Sランク！》

《そんな……》

《こっからじゃとてもじゃないけど間に合わない！》

《急ごう、フェイトちゃん！》

《うん！》

なのはとフェイトはさらに加速して市街地へと向かった。

そしてクアットロの言う通りルーテシアは言葉を言った。

「逮捕はいいけど……大事なヘリは放って置いていいの？」

「しまった！」

「こうなったら！ クロニクル、バスターモード！」

【OK・Buster Mode!】

《お嬢様もう一言追加いいですか？》

ダークがバスターモードへとチェンジした時、ルーが再び口を開いた。

「貴方は何も守れない……母親も……そして私も……」

「くっ！」

その言葉を聞いたダークは突然頭を抱えてその場に蹲った。

「うああああ！」

「ダーク！」

「ダークさん！　どうしたんですか？」

「発射！」

そして砲撃は無常にも放たれてしまった……そしてヘリのあった場所からは煙が上がっていた。

そしてオペレータールームでは動揺が広がっていた。

「砲撃……ヘリに直撃……」

「そんな……」

「ジャミングが酷くて通信が聞きません！」

「てめえ！」

怒り心頭のヴィータはルーテシアに掴みかかった。

「ヴィータ副隊長、落ち着いて……」

だがヴィータはスバルの制止も聞かずルーテシアを問い詰めた。

「うるせえ！ おい、仲間がいんのか？！ お前はダークとどんな関係なんだよ！」

「……」

ヴィータの問い詰めに全く動じないルーテシア。

「ダークがあんなにも取り乱すなんて……さあ！ 答えろ！」

ふと周りを見ていたギンガが異変に気がついた。

「エリオ君！ 足元に何かいるわ！」

「えっ？ ……うわあ！」

そしてケースは一瞬にして奪われてしまった。

「くそっ！」

《ルーお嬢様、ナンバーズ？番のセインです。私のISディーブダイバーでお助けしますね。フィールドとバリアをオフにしてじっとしてて下さいね》

《うん……》

「あっこいつ！ ……くっ！」

そして再び現れたセインがルーテシアを抱えて逃げられてしまった。

「反応……ロストです……」

「くそっ！……ロングアーチ、ヘリは無事か？ あいつら……落ちてねーよな！」

《その質問には俺が答えてあげるよ》

ヴィータの悲痛な叫びに答えた通信の主はダークであった。

「スターズ2とロングアーチへ……スターズ0、ミラージユの使用でギリギリ間に合った……ヘリは無事だ！」

そこには金色の粒子を辺りに靡かせるダークの姿があった。

「ダーク……」

「でもダークに切り札を使わせてしもうた……」

「あいつ……何時の間に……」

「こっちもフルパワーじゃないとはいえ傷1つ付いてないなんて……」

2人が逃走を図っているとその場にフェイトが降り立った。

「止まりなさい！ 市街地での危険魔法使用、及び殺人未遂の現行

犯で逮捕します！」

「今日は遠慮します」

「IS発動……シルバーカーテン」

フェイトの目の前から2人の姿が消えた。

「はやて！」

「位置確認、詠唱完了……発動まで後4秒！」

「了解！」

「離れた……何で？」

2人はフェイトの追跡が止んだ事を疑問に思っていると上空を見てその理由を理解した。

「まさか……広域空間攻撃！」

「うっそっ」

「遠き地にて闇に沈め……デアボリックエミッション！」

はやての広域魔法を何とか回避した2人の前にはなのはとフェイトが立ちはだかった。

【Nonos rendi remos... asipuen
o piens en un escape pelligro
so.】

【訳：投降の意志無し……逃走の危険ありと認定】

【Los golpearémos
después de eso, los
arrestare
mos.】

【訳：砲撃で昏倒させて捕らえます】

そして2人の砲撃が2人に向かい放たれた。

「トライデントスマッシャー！」

「エクセリオンバスター！」

2人の砲撃がぶつかり合い凄まじい爆発が起きた。

「ビンゴ！」

「……じゃない、避けられた！」

「直前で救援が入った……」

「ダーク君！」

「目標発見……撃退する！」

ダークはすぐさまソードモードへとチェンジすると現場に向けて急
行した。

「ふう……トーレ姉様、助かりました」

「感謝……」

「ぼーっとするな！ まだ逃げ切れた訳では無い！」

「「えっ?!」」

トーレと呼ばれた人物が身構えると追ってきたダークと戦闘を開始した。

【S o n i c M o v e .】

「くっ！」

ダークはソニックムーブを駆使し、一気に押し切るとそのまま地面に叩きつけた。

「トーレ姉様！」

「大丈夫だ……この程度！」

トーレはよろけながらも立ち上がった。ダークは3人の前に降り立つと再び斬りかかった。

「シルバーカーテン……」

ダークは斬りかかるものの攻撃は幻影に命中した。

「あら残念ね、ルーお嬢様のお兄様」

ダークは後ろから不意打ちを入れられてしまった。

「くっ……」

「特別に言っておいてあげますけど、貴方がどれだけ頑張ろうがル―お嬢様は貴方がどうにか出来る事ではないのよ」

「何を……お前だな……ルーに色々と言わせてたのは……」

「あれはただ真実を伝えてあげただけでしたのに……まあ貴方があの状況で行けたのは予想外でしたけど」

「ふん……あの程度の事で俺が本当に動揺すると思ったか？」

「でもあまり調子に乗らない事ね……こちらにはルーお嬢様と言う人質がいるも同然なんだから」

「ルーは必ず俺がこの手で救ってみせる……もう何も失うわけにはいかないんだ！」

ダークは再び一気に距離を詰め斬りかかった。

「うふふ……残念ね、今回は貴方の相手をしてる暇は無いのよ」

しかしダークの斬撃が命中したのはまたもや幻影だった。

「待て！」

次の瞬間ダークの周りを霧状の煙幕が視界を遮った。ダークはすぐ

さま剣を高速で回転させ煙幕を吹き飛ばした時には3人の姿は無かった。

「ロングアーチ敵の反応は？」

「反応……ロストです……」

「くそっ！ 逃げられたか……」

「ダーク君！」

「ダーク！」

「大丈夫か？！」

上空からなのは、フェイト、はやての3人が降りてきた。

「ああ……だが奴らに逃げられた……すまない」

「今回はまだあの女の子とレリックが奪われなかったただけよかったよ」

「そうだよ……私達だって翻弄されちゃったわけだし」

「ダーク君、大丈夫？」

「急にどうしたんだ？」

「ミラージュを使ったしそれに何だが疲れてる感じがするし……」

「大丈夫だ……」

「ちょっとダーク君?!」

「はやて……六課で皆に話がある……会議室にフォワード達とギンガを含めて集めておいてくれ」

「……わかった」

「それと今回の処罰についてもそこで話合つとするよ……」

心配したなのはが近づくがダークははやてにいくつかの言葉を言い残すと飛び立ってしまった。

「ダーク君……」

「ダーク……どうしちゃったんだろ……それに皆に話って何だろう？」

心配そうにしているのはとフェイトをよそにある程度の状況を聞いていたはやては2人を上手く纏めた。

「うちらもそろそろ戻ろうか……ダークが色々と話してくれるみたいやし」

「「うん」」

3人も飛び立つとヘリとフォワード達と合流し六課本部へと帰還していった。

その夜……ダークの呼び出しでフォワード陣と隊長陣が会議室へとやってきた。

「すまないな……お疲れのところを呼び出して」

「お互い様だよ」

「大丈夫です」

ダークを含め皆が席に着くとダークがまず口を開いた。

「じゃあまずは皆の疑問から答えようと思う……挙手をしてどんどん聞いてくれ」

「はい！」

まずヴィータが先陣を切った。

「率直に聞くけどあの召喚師は何もんだ？ お前とどんな関係なん

だ？
」

「いきなり核心をついてくるか……ヴィータらしいな」

「ふざけるなよ！ あの時あんなに動揺してるお前見た事無いよ……さあ答えるよ」

ダークの言葉に怒るヴィータを何とかなだめるとそつと語った。

「あいつは俺の義理の妹さ……」

そこにいた全員が驚きを隠せなかった。

「義理の妹？！」

「でもダーク隊長の義妹がどうして奴らと一緒にいるんですか？」

「それについては俺の出生から辿る事になる……」

「ダーク隊長の出生の秘密？」

「俺は産まれてすぐに親が俺を施設に預けたみたいでな……本当の親の顔を知らないんだ」

その事を知らない新人達は驚いていた。

「そんな……」

「ダークさん……」

「でもそんな俺を引き取ってくれた人がいた……それがあの子の母親だったんだ」

「そうだったのか……でもお前はなのはと同じ学校なんじゃねーのか？」

「ああ、しばらくは地球を離れてただけど9歳の時に帰ってきてなのはと同じ学校に転入したんだ」

「でもどうしてあの子はダークさんを見てもなんとも思わなかったの？」

「なんだか全く知らない人を見てる感じで……」

無表情だったルーテシアの事を思い出したティアナとスバルが疑問をぶつけた。

「知らないのも無理は無い……あの子は俺と会った事は無いんだ……」

「会った事が無い?!」

「どうしてですか？」

「俺が地球にやってきたのが9歳の時であの子が産まれたのが俺が10歳の時だ……義母さんから連絡が来てその時に見たつきりなんだよ……赤ちゃんの時に見た人なんてとてもじゃないけど記憶なんて無いしな」

「そうなんですか」

「しかも俺は1年後に前に話されたと思うけどあの事件でしばらく意識が無かった……その間に義母さんは亡くなって、あの子も居場

所が分からなくて……最初見た時は本当にびっくりしたよ」

皆俯いて聞いていた。

「あの……ダーク隊長」

「どうしたスバル？」

「その……ルーちゃんはどうしてスカリエッティのところにいるんですか？　もしかして操られてるとか？」

「ドクターの事だから何かした可能性は無しとは言えないけど……ただ目的があるのは確かなんだ」

「目的？　もしかしてレリックですか？」

「ああ、どのレリックかは分からないけどそれである事をするつもりなんだ……」

「ある事？」

「義母さんを復活させる……それがルーの目的……そして義母さんの体はドクターが持ってるってルーが教えてくれた」

その言葉に再び驚く隊長陣とフォワード陣。

「そんな……」

「ドクター……どこまで酷い奴なんだ！」

その中には憤りを覚えるメンバーもいた。

「過去に何があつたかは知らない……でも俺はルーと義母さんを救いたい！でもその為に皆を裏切ってしまった……」

ダークは立ち上がると全員に向け頭を下げていた。

「皆に改めて謝りたい……ごめん……俺皆を裏切つてた……命令を何度も無視したし、何度もルーを逃がしたし、それに……」

「ダークさん……そんなに気にしないでください」

「ダーク隊長……頭を上げてください」

「皆……」

「ダーク、確かに今までの行動は本来なら相当罰せなあかん事やけど今回は特別やに」

「ダーク君……もう1人で抱え込まないでよ」

「話し辛い事もあるとは思うけど……これからは何でも相談に乗るからね」

「なのは、フェイト、はやて……本当にごめんな」

「うちだけやないよ、皆にももう1回謝らないと」

「皆……本当にごめん！」

そしてダークは決めたのであった……もう皆を裏切らないと……そして家族を必ず救ってみせると覚悟を決めたのである。

第9話 ナンバーズ（後書き）

現在就職に向け色々とあつて大変な日々を送ってますW
これからも不定期更新ですが宜しくお願いします^^

第10話 創設の理由（前書き）

前回の戦闘を経て保護した謎の少女……彼女を検査の為に病院へと連れていつてから次の日……意識が回復したという少女を迎えに行く為にダークはなのはを乗せ病院へと車を走らせたのであった。

第10話 創設の理由

ダークとなのはの2人は前回の事件で保護した少女を引き取りに行く為に、聖王医療院に向かっていた。

「だが……これからあの子はどうなるんだろうな……」

運転しているダークがなのはに話しかけた。

「当面は六課か教会で預かるしか無いよね……受け入れ先を探すにしても長期の安全確認が取れてからでないとね……」

「だよな……ん？」

ダークは通信が入ったのですぐに繋いだ。

「アルジェント一等空尉、聖王教会のシャッハ・ヌエラです」

「どうかしましたか？」

「すみません……こちらの不手際がありまして……検査の合間にある子が姿を消してしまいました……」

「分かりました……すぐに向かいます、そちらで出来る限りの対応をしておいてください」

「はい。分かりました」

ダークは通信を切ると急いで医療院に向かった。

そして教会に到着した2人をシャツハが迎えた。

「申し訳ありません」

「状況はどうなってますか？」

「はい……特別病棟とその周辺の封鎖と非難は済んでいます。今の所飛行や転移、侵入者の反応は見つかっていません」

「外には出られないって事は中にいる可能性が高いな……なのは手分けして探すそう」

「うん」

ダークとなのはとシャツハは3手に別れて搜索する事にした。
なのははシャツハに少女の検査の結果などを聞くので途中まで2人で行動をしていた。

一方ダークは庭を搜索していた。

「ここにはいないのかな？……っ！」

ガサっと言う音に振り返るとそこには探していた女の子がいた。

「あっここにいたのか、心配したんだぞ」

ダークがそつと近付こうとしていると突如目の前にシャツハが現れた。

「ああ……うああ……」

武器を構えられ完全に少女は怯えてしまった。

「シスター・シャツハ、ここは任せてください」

「あの……はい……」

「ごめんな、驚かせちゃって……大丈夫？」

そしてダークは少女が落としてしまったウサギのぬいぐるみを拾うと埃を落とすと少女に渡した。

「あっ……」

「立てるか？」

ダークは少女に付いた砂埃を落としながらシャツハに念話で語りかけた。

（緊急の危険は無さそうだ。シスター・シャツハ、ありがとうございました）

（分かりました）

ダークはそう言うのとそつと笑いかけて少女に話しかけた。

「初めまして、ダーク・アルジェントって言います。貴方の名前は？」

「……ヴィヴィオ」

「ヴィヴィオ、可愛い名前だね。ヴィヴィオはどこかに行きたかったのかな？」

「パパとママ……いないの……」

「それは大変だ、じゃあお兄さんと一緒に探そうか？」

「うん……」

そう言うヴィヴィオを抱っこすると立ち上がった。

「ダーク君凄いね」

後ろではシスター・シャツハとなのはが關心していた。

「なのは見てたのか」

「ダーク君って意外にフェイトちゃんより過保護なところがあるのかな？」

そう言いながら軽く笑うのは。

「とつとと行くぞ、なのは。ではシスター・シャツハ、ありがとうございました」

「はい」

ダークはヴィヴィオになのはの紹介も行いつつ車に戻り六課に戻った。

2人は戻るとフェイト、はやてと共に聖王教会へと向かう用事があった為、フォワード陣にヴィヴィオを預けようとしていた。

「うわあああん！」

「泣かないで、落ち着いてヴィヴィオ」

ダークとなのはが離れるのを嫌がったヴィヴィオが大きな声で泣き出してしまった。

新人達も必死であやそうとするが効果が無かった。

「あの〜何の騒ぎ？」

「あつフェイト隊長、実はちょっとね……」

「見ての通りだ……」

「行っちゃやだあ！うえええん！」

その様子をモニター越しに見ていたフェイトとはやては現場に向かった。

「エース・オブ・エースと管理局の黒き守護者にも勝てへん相手はおるもんやね〜」

（フェイトちゃん、はやてちゃん、あの〜助けて）
（何とかしてくれ〜）

「スバル、キャラ、離れて落ちついでここか」

「あつ……はい」

はやてがスバルとキャラを一旦離れさせると、フェイトがそつと近付き床に落としていたぬいぐるみを拾うと動かしながら話しかけた。

「こんにちは」

「うえ？」

ぬいぐるみを巧みに使い話しかけたフェイトを見てヴィヴィオを最初は戸惑っていた。

「この子は貴方のお友達？」

「ヴィヴィオ、こちらフェイトさんって言って俺達の大事なお友達なんだ」

ダークがすぐさまヴィヴィオにフェイトを紹介した。

「ヴィヴィオ、どうしたの？」

フェイトがぬいぐるみを動かしてヴィヴィオの気を逸らしている間に2人はフェイトに念話で語りかけた。

（病院から連れてきたまでは良かったんだが……この通り俺達から離れてくれないんだ）

（すっかり懐かれちゃったみたいだね）

（それで、フォワード陣に相手してもらおうと思ったんだけど……）

新人達は申し訳なさそうにこちらを見ていた。

（すみません……）

（良いよ、任せて）

「ねえ、ヴィヴィオはダークさんやなのはさんと一緒にいたいのか？」

「うん」

すっかり泣き止んだもののまだ目に涙を浮かべているヴィヴィオはそっと返事をした。

「でも2人共、大事な御用でお出掛けしなきゃいけないのにヴィヴィオが我が儘言うから困っちゃってるよ、この子も……ね」

そう言うとなぐさるみを使い巧みなテクニックで説得にかかった。

「うえ……」

「ヴィヴィオはダークさんやなのはさんを困らせたい訳じゃないんだよね？」

「うん……」

「だから良い子で待っていていようね」

「うん……」

ヴィヴィオが2人の服から手を離したのであった。

「ありがとね、ヴィヴィオ」

「少しお出掛けしてくるだけだからな」

そしてヴィヴィオの世話をエリオとキャロに任せたダークとなのは
はフェイト、はやてと共にへりに乗り込んだ。

「ごめんね、お騒がせしちゃって」

「すまないな、子供の相手は苦手でさ」

「いやゝええもん見せてもらったよ」

はやてとが笑うとダークとなのはは恥ずかしそうに笑った。

「でもダークにも懐いてるって事は本当は相手するの得意なんじゃないのかな？」

「うん、ダーク君って意外に……」

「それ以上言うな！」

ダークが慌てる姿を見て3人はクスクスと笑った。

「しかしあの子はどうしよか……なんなら教会に預けてとくんでも
ええけど」

「平気さ、帰ったらもう少し俺達で話して何とかするよ」

「そうか、なら2人に任せてええかな？」

「OK、頑張るよ」

「今は周りに頼れる人がいなくて不安なだけだと思うから」

そして聖王教会本部へ到着した4人はカリム達がいる部屋の前についた。

「どうぞ」

ノックをすると返事が返ってきたのを確認すると4人は入室した。

「失礼します、高町なのは一等空尉であります」

「フェイト・テストロッサ・ハラOWN執務官です」

「ダーク・アルジェント一等空尉であります」

「いらつしゃい、初めまして聖王教会騎士団騎士 カリム・グラシアと申します。どうぞこちらへ」

案内された先にははやての上司にしてクロノ・ハラオウンの姿があった。

「失礼します」

「お久しぶりです、クロノ提督」

「クロノ提督、少しお久しぶりです」

「ああ、高町一等空尉、アルジェント一等空尉、フェイト執務官。久しぶりだな」

親友であるにも関わらず余所余所しい3人を見てカリムがクスクスと笑った。

「3人共、そんなに硬くならないで。私達は個人的にも友人だから何時も通りで平気ですよ」

「つと騎士カリムが仰せだ、普段と同じで
「平気や」

「じゃあクロノ君久しぶり」

「クロノさん、お久しぶりです」

「お兄ちゃん、元気だった？」

予想外の言葉にクロノが照れていた。

「なっ！それはよせ、お互いもう良い年だぞ」

「兄妹関係に年齢は関係無いよ、クロノ」

「……」

皆はクスクスと笑ったが、クロノはすっかり照れて軽く俯いてしまった。

はやては軽く咳払いすると本題へと入った。

「さて、昨日の動きについてのまとめと、改めて機動六課の設立の裏表について……それから今後の話や」

「六課設立の表向きの理由は、ロストロギア……レリックの対策と、独立性の高い少数部隊の実験例」

カーテンが閉められるとクロノが早速話し始めた。

「知つての通り六課の後見人は僕と騎士カリム、それから僕とフェイトの母親で上官であるリンディ・ハラウン。それに加えて非公式ながらも、かの三提督も設立を認め、協力を申し出てくれている」

なのは、フェイト、ダークの3人は驚きの声を上げた。

「その理由は私の能力と関係があります。私の能力、プロフェーティン・シュリフテン預言者の著書……これは最短で半年、最長で数年先の未来……それを詩文形式で書き出した預言書の作成を行なう事が出来ます。2つの月の魔力がうまく揃わないと発動出来ませんから、ページの作成は年に1度しか出来ません」

「聖王教会は勿論、次元航行部隊のトップもこの予言には目を通す。信用するかどうかは別として有識者による予想情報の1つとしてな」

「ちなみに地上部隊はこの予言がお嫌いや……実質のトップがこの手のレアスキルがお嫌いやからな」

「あのおっさんか」

「レジアス・ゲイズ中将……だね」

「精度自体はよく当たる程度の占い程度であんまり便利な能力では無いんですが……」

「この予言に設立の理由が隠されているって事が……」

「ああ、ダークの言う通りだ……数年前から少しずつある事件が書き出されているんだ」

そう言うところカリムは預言書の1つを出すと読み上げた。

「古い結晶と無限の欲望が集い交わる地、死せる王の下、聖地よりかの翼が蘇る。」

死者達が踊り、なかつ大地の法の塔はむなく焼け落ち、それを先駆けに数多の海を守る法の船もくだけ落ちる」

「何だと！」

「それって！」

「まさか！」

その予言を聞き3人は驚き声を上げた。

「ロストログアをきっかけに始まる管理局地上本部の壊滅と、そして管理局システムの崩壊……」

4人は聖王教会から帰還するとヴィヴィオを迎えに行く為に途中で隊長室に向かうはやてと別れる事になった。

「ほんならなのはちゃん、フェイトちゃん、ダーク、今日はありがとうな」

「うん」

「ああ」

「情報は十分、大丈夫だよ」

3人ははやてに別れを告げると歩き出した。

「あいな！」

3人を見送っていたはやてが突然呼び止めた。

「どうしたはやて？」

「私にとって3人はかけがえの無い友達や、六課がどんな展開と結末になるかまだ分からへんけど……」

申し訳なさ氣に俯くはやてに3人は優しく声をかけた。

「その話なら出向決める時にちゃんと聞いたよ」

「俺もなのはもフェイトもちゃんと納得してここにいるんだ。大丈夫、心配するなよ」

「それに私とダーク君の教導隊入りとかフェイトちゃんの試験とか、はやてちゃんや八神家の皆が凄くフォローしてくれたじゃない」

「だから今度は、はやての夢をフォローしないとね」

3人の言葉にはやての表情からは曇った表情は消えていた。

「あかなゝそれやと恩返しとフォローの永久機関や」

その言葉に3人は笑った。

「友達ってそうゆうものだと思うよ」

そして3人は突然敬礼すると

「八神部隊長、今のところ部隊長は何も間違っていないであります」

「だから大丈夫、何時ものように堂々と命令してください」

「胸を張ってエヘっとな」

「うん！」

3人は笑いあった後にはやてと別れヴィヴィオの元へ向かった。

「『ただいま』」

3人の声に反応したヴィヴィオがすぐさま走ってこちらに向かつて

きた。

ダークがそつと抱き上げると話しかけた。

「ヴィヴィオ、ただいま。良い子にしてたか？」

会えなかった時間が寂しかったのか涙を目に浮かべながら飛びついてきた。

「うん！」

「ありがとね、エリオ、キャロ」

「いえ」

「ヴィヴィオ、良い子で居てくれましたよ」

「そう、よしよし」

なのはがヴィヴィオの頭を撫でた。
そしてダークが一旦降ろすと、次はなのはとフェイトに飛びついて離れなくなっていた

「そろそろ寝る時間だし、今日は私達の部屋で預かるよ」

「ああ、頼んだぜ。2人共、今日はヴィヴィオのお守り本当にお疲れ様」

「あっいえ」

「大丈夫です」

エリオとキャラロが部屋を出て行った後にダークも出て行くとする
とヴィヴィオが泣きそうな顔でこちらを見てきた。

「うう……」

ダークはヴィヴィオの元へ戻ると頭をそつと撫でた。

「大丈夫だよ、ヴィヴィオ。また明日ね」

「今日はなのはさん達と一緒に寝ようね」

「……うん」

何とか説得出来たらしく素直に2人に連れていかれた

「さて、俺も戻るかな」

ダークも自身の部屋へと戻っていった

第10話 創設の理由（後書き）

次かその次くらいにオリジナルシナリオを入れる予定ですが完全オリジナルは初なので変にならないように頑張りますw

第11話 思い（前書き）

次の話でオリジナルと入れたいと思います

それとこの話と原作の違いを書いておきます

ヴィヴィオのイベントは本来ギンガ出向の時に起こるんですがこちらの都合で1ヶ月程前のこの期間に入れました

第11話 思い

ダークは部屋で自身のデバイスを調整していた。以前開発していた新モードの導入に成功したのであった

「アクセルモード実装完了……だが問題は時間をどれだけ伸ばせるかな……」

【It is possible to master, and to continue under the present situation only for two seconds.】

【訳：マスター、現状では2秒間しか持続出来ません】

「2秒か……流石に実践レベルならもっと伸ばさないと……ってもう夜か?!」

ダークは再びデバイスの調整を行おうとした時、ふと外を見ると外が暗くてびっくりしたのであった、それもそのはず今日は1日オフだった為、ヴィヴィオの保護責任者としての登録をなのはと共に済ませた後からはなのはに任せて、昼間には部屋に戻ってからずっと籠ってデバイスの調整を行っていたのであった

「一旦飯でも食ってくるかな」

ダークは部屋を出て食堂に向かった

「あつダークさん」

食堂に着くとダークを発見したエリオが声をかけてきた

「おう、エリオとキャロとスバルか、隣失礼するぜ」

ダークは飲み物を取ってくると空いている席に座った

「ダーク隊長も今からご飯ですか？」

「ああ、昼からデバイスの調整してたら気が付いたらこの時間だったんだよ」

ダークが笑いながら話すと3人は苦笑いしていた

しばらく雑談しているとスバルがヴィヴィオについての話をした

「確かなのはさんが言っていましたよ、保護責任者になったんだからもっと自覚を持ちなさいって」

「ああ……まあなのはに任せちゃったけど今日ちょうどせっかくのオフだったからもう少して出来そうだったデバイスの調整がしたくてさ」

その話題に興味を持ったキャラが質問した

「デバイスの調整って具体的に何をしてたんですか？」

「まあ言っちゃうとデバイスの新モードの実装だね」

「新モード？」

「ただこの事は他言無用で頼むよ。特に隊長陣にはね」

「何か理由でもあるんですか？」

その言葉に一瞬迷ったような表情を見せたがすぐに表情を戻すと答えた

「俺が前に話したAMF発生装置は覚えてるか？」

「私がフリードの力を初めて解放した時ですよね」

「ああ、あの時ルーが持っていたあの装置……魔力に頼ってる俺達に取って死活問題だ……ガジェット程度なら何とかできるけどそれがナンバーズ達なら話は別だ」

その言葉を聞き3人の表情が一気に曇った

「あつ……」

「魔力を利用しない……もしくは奴らがAMF無効化装置をつけていた場合、またあの装置が起動した状態で奴らとの戦闘になった場合……俺達は太刀打ち出来なくなってしまうからな」

「そうですね……」

「それに対抗する為のモードなんだ。まあこのモードはあくまで切り札としてとっておく為のモードだけだな」

そう言うとき、ダークはお茶を一気に飲み干し立ち上がった

「って事はダーク隊長はまた無茶を……」

スバルが心配そうに尋ねた

「流石に過去に無茶をすればどうなるか経験した事があるから心配するような無茶はしないさ……まあ自分の身勝手な理由で命令無視してた俺が言っても説得力無いけどな」

「ダーク隊長……」

ダークは自嘲気味に軽く笑いながら食堂を出て行った

次の日……その日の訓練が終わりクールダウンをしている隊長陣と新人フォワード陣の元へヴィヴィオがやってきた

「ママ」

その呼びかけになのはとフェイトが振り返る

「あっヴィヴィオ」

「危ないよ、転ばないでね」

しかしその不安は的中し見事に転んでしまった

「うわぁっ!」

しかしヴィヴィオが地面にぶつかる前に支えられていた

「大丈夫か?ヴィヴィオ」

「ふえ?」

「ダーク君?!」

「ダーク？何時の間に」

ダークが一瞬でヴィヴィオの傍へと近付き地面との衝突を回避していたのであった。戸惑っていたヴィヴィオだったが助けてくれた人物を見ると安心したように笑いながらお礼を述べた

「パパ、ありがとう」

その言葉にダークは驚いた

「誰が要らない知識を植えつけたんだ？」

「にやはは、だって私達がママだからダーク君にはパパの代わりになってもらおうと思って」

「だけどさ」

「うう……」

何やら不穏な空気を察したのかヴィヴィオが涙目でダークの方を見ていた

「ダーク、ヴィヴィオ泣かせたら承知しないよ」

「分かったよ……」

ダークはしゃがむとそつと頭を撫でながらヴィヴィオに語りかけた

「パパでいいよ」

「エヘヘ」

「さて戻るか、行くぞヴィヴィオ」

「パパ〱抱っこして」

「分かった。おっヴィヴィオ、そのリボン可愛いな」

「うん、アイナさんにしてもらったの」

「そうか、良かったな」

「うん！」

そしてヴィヴィオを抱っこしてにこやかに会話しているダークの後ろでは新人フォワード達がコソコソ話していた

「ダーク隊長ってかなりヴィヴィオに甘々ですね」

「ダークさん、僕が小さい時もフェイトさんがいない時は代わりによく遊んでくれてましたし」

「意外な一面ですね」

「お前達〱聞こえてるぞ」

ダークは新人達だけでなく隊長達からもからかわれながら六課の食堂へ向かった

皆でご飯を食べているとヴィヴィオがピーマンを残していた

「あつ、ヴィヴィオ駄目だよ好き嫌いしちゃ」

「ううゝ苦いの嫌い」

「そんな事ないよ、美味しいよ」

「しっかり食べないと大きくなれないんだから」

「ううゝパパ」

ヴィヴィオは助けを求めるように目の前の席のダークを見た

「まあ気持ちは分かるけど頑張って食べようなヴィヴィオ」

「ううゝ」

はやてもこちらを見てヴィヴィオに食べるように言った

「好き嫌い多いとママ達みたいに美人になれへんよ」

「うう……」

ヴィヴィオは泣きそうな顔になりながらも頑張って食べた

「うん、よく食べたね」

なのはがよしよしと頭を撫でた

昼ご飯を食べ終わると再びダークは部屋に籠りデバイスの調整を行っていた。気が付けば辺りはすっかり暗くなっていた

「クロニクル、調子はどうだ？」

【Excellent master】

【訳：良好です、マスター】

「とりあえずこれでどれくらい起動時間が伸びたんだ?」

【It expanded for three seconds from former.】

【訳：以前から3秒伸びました】

「5秒か……とりあえずもう少し伸ばせるようにしないとな……バリアジャケットの強化も出来たか?」

【Yes.】

「そうか……すまないなクロニクル、こんなに無茶させちゃってさ」

【I also work hard to save an important person such a thing and to master.】

【訳：そんな事ないですよ、マスターの大切な人を救う為に私も頑張ります】

「ありがとなクロニクル、さて今日はこの辺で寝るかな。おやすみクロニクル」

【Good evening master.】

【訳：おやすみなさい、マスター】

「ルー……俺がお前を……そして義母さんを救ってやるからな」

ダークはベットに横たわるとそっと眩き眠りについた

第11話 思い（後書き）

今回はグダグダで終わってしまいました……

次のオリジナルは頑張りたいと思います^^

まあついでに報告すると今日は作者の誕生日ですw

何とか今日までに投稿したかったので投稿出来たのでよかったです

第12話 アクセルモード（前書き）

時代背景的な感じで言えば自分の11話以降、ギン姉出向までの間です

ここにオリジナルシナリオを挟みます

どうみてもあるキャラクターのフラグ立てイベントになってしまったなw

あとセリフの後の（）はその人の心境を書いてみました

第12話 アクセルモード

ダークは以前の皆への反省の印の1つとして行っていた定期健診をする為にシャルの元へと来ていた

「ダークちゃん、貴方に頼みがあるのだけど……」

「俺に頼み？」

健診中に突然シャルが頼みがあると話しかけてきた。

「実ははやてちゃんについてなんだけど、最近はやてちゃんちよつと無理し過ぎてる感じがして……忙しいのはあるんだけど少しは休ませないと過労で倒れちゃってからでは遅いし」

「だな……あいつは昔から一人で抱え込む性格だし」

「それは貴方もでしょ？」

そう言われたダークは自嘲気味に笑った。

「で俺に何をしろと？」

「それはね……はやてちゃんをリフレッシュさせる為にどこかに連れ出してあげてくれないかしら？」

「全く……何を言い出すかと思ったら……連れ出すって言うてもどこに行けばいいか分からないし……でも何で俺なんだ？」

「細かい事は気にしない」はやてちゃんとデート出来るオマケ付きよ」

シャルは小悪魔っぽい笑いを浮かべながら答えた。

そして定期健診を終えたダークは廊下を歩きながら呟いていた。

「まあ理由はどうあれ何とかしないと、問題はどうかはやてを連れ出すかな……悩んでもしょうがないし早速行くかな」

ダークは悩みつつもまずは行かない事には話にならないため隊長室へと向かった。

「失礼します」

「どうぞーあつダーク」

「はやては今1人か？」

「そうやけどどうしたん？」

リン？は任務に出ているのかいなくてはやて1人だった。
ダークは丁度良い機会なので早速誘いをかけてみた。

「ちょっと今から空いてるか？」

「何かあるん？」

「ちょっと今から2人で出掛けないか？」

「私と2人で？」

はやては少し驚いた様子で少し俯いてしまった。

（もしかしてダーク……私をデートに誘ってるん？！ さっきも私が1人なんを確認してたし……）

「はやて？」

「ふえ？！」

なかなか返事が無いので心配したダークの言葉に色々と考えていたはやては驚いて声をあげた。

「駄目かな？」

「あつ……ああ、ちょうど仕事も区切りがついたところやでええよ」

「そうか、良かった〜じゃあ早速行こうか」

「うん」

安心したような様子のダークは早速はやてを連れて隊長室を後にした。

そしてダークははやてを車に乗せると走りだした。

「せやけどどこに行くん？」

「ミッドチルダの北西部にある場所に連れて行くことと思ってさ……俺の思い出の場所に」

「思い出の場所？」

「俺の出身については知ってるだろ、義母さんが亡くなってからは行っていないんだけど……とても落ち着く場所があるんだ」

「そこにうちを連れてくん？」

「ああ、そこならきっとはやても落ち着くし気分転換になると思ってたさ」

「気分転換？」

（どうゆう事やる？）

「ヴォルケンの皆心配してたよ、はやてが最近無理し過ぎてるって」

「もしかしてそれが私を連れ出した原因なん？」

「そうだけど」

「そう……」

（はあゝでも私何で残念がつてるんだろ……）

「はやて？」

（どうしたんだろ？）

「うっん、何もないよ」

「そっか」

しばらく雑談を繰り返していると目的の場所に到着した。

「ここは？」

ダークに連れられて到着したのは緑が広がる丘であった。

「ここは俺の秘密の場所……嫌な事があった時はここでよく寝そべってたもんさ」

（この事だけは覚えているんだよね……）

そう言いながらダークは横になった。

「意外と今でも落ち着くもんだな」はやてもやっぺーらん」

はやてもそつと横になった。

「ほんまやなく結構ええもんやね」

「だろー1回ずつとここにいて夜になって義母さんに怒られた事もあるからな」

「もうダークったら」

しばらく2人で笑いあっていた。

「さて久々に来たしもう少し辺りを散策するかな」

「私も付いてくわ」

2人は辺りの森を散策し始めた。

「あれは何だ？」

少しするとダークはある建物を発見した。

「こんな施設見た事無いぞ？」

「しかも廃棄されて結構経ってるみたいやな……」

「これは何かあるかもしれないな……調べるか」

「OKや」

何やら不穏な空気が立ち込めるその廃棄施設に2人は捜査の為に入っていった。

「これって……ガジェットの残骸?!」

「こつちもや……色々と実験を行ってみたいやし」

ダークは近くに落ちていた残骸に書かれている名前を見てすぐに誰が作ったものか判明した。

「やはりここはかつてのドクターの研究施設！」

「やな、なら他にも色々とありそうや」

2人はさらに奥へと向かっていった。

「こいつは?!」

「これは戦闘機人?!」

そこには怪しげに光る培養液の中に漂う人型のメカの様なものがあった。その大きさは普通の人の倍近くの体格をしていた。

「恐らく前に現れた奴らのプロトタイプのようなものか……」

「ここで戦闘機人の研究もおこなったんか……ダーク急いでこ

「を連絡して、詳しく調査する必要があるからな」

「OK……はやて危ない！」

「えっ？ ……きゃあ！」

突然目の前の培養液が割れたかと思うとその中の戦闘機人がはやて目掛け飛び出してきた。それを間一髪ダークが庇い何とか防いだのであった。

「ぐはあ！」

「ダーク大丈夫？！」

ダークは一撃を喰らいつつも何とか立ちあがるとすぐさまデバイスをセットアップしバリアジャケットを身に纏った。

「俺の心配はいい……それより先に奴の相手をしないと！ クロニクル、セットアップ！」

はやてもすぐにデバイスをセットアップし騎士甲冑を身に纏った。

「グワアアアア！」

戦闘機人は凄まじい雄たけびを上げながらこちらに向かってきた。

「速い！」

その巨体からは想像も出来ない速度であった。ダークもソニックムーブで応戦するが戦闘機人の速度はそれすら上回りダークは捕まっ

てしまった。

「ぐっ……はやて……お前は逃げる……」

「そんな！　ダークなんて事言っん！」

「お前1人では敵わない……ここは何とかする……逃げる……」

戦闘機人は首に手を掛けてさらに絞めていった為にダークは苦しそうにしながらもがいていた。

「ダーク！」

はやてもダークの言葉の意味が分かっていた、今の状態ではリミッターも外れておらず更にユニゾンをしていないため大した魔法が放てず元々接近戦に弱い為、接近戦に強いダークでさえ苦戦している相手に勝ち目など無い事も承知していた。

（それでも私はダークの為に戦う！　こんなところで見捨てられへん！）

はやては自身のデバイスの夜天の書を出現させると周りに赤い刃を無数に生み出した。

「ダークから離れる！　ブラッディダガー！」

はやては戦闘機人に向かいかつて闇の書の闇が使用していたブラッディダガーを放った。

「グワアアアアアア！」

「ぐはあ！ ゲホゲホ……はや……て」

戦闘機人は掴んでいたダークを投げずるとはやてへと襲い掛かった。はやては撃ち続けるものの、あつと言う間に距離を詰められて首をつかまれてしまった。

「ダー……ク……」

「はやて！」

（今はどんなリスクも恐れてる場合じゃない！）

ダークははやてを救う為に遂に覚悟を決めた。

「クロニクル、アクセルモード！」

【OK・Axel Mode・】

起動した途端にダークの周りに凄まじい衝撃波が発生し始めた。

【Start up!】

クロニクルの起動音と共に凄まじいスピードでその場を駆けつけたダークは戦闘機人に蹴りを入れた。その一撃により腹部には穴が開いた。

「グルルウ！」

痛み苦しむ戦闘機人へと超高速で動くダークは腕を剣で斬り落とした。

【3・2・1・Time Out!】

そして腕から開放されたはやてが地面に着くまでの間に戦闘機人はバラバラになっていた。

それと同時にダークのアクセルモードも限界時間を超え自動的にソードモードへと戻っていた。

「現状は5秒が限界か……まだまだ調整が必要だな……」

ダークはその場に倒れこんだ。

「ダークすっかりして！ ダーク！」

はやての悲痛な呼びかけにダークが応じる事は無かった。

「……は？」

ダークは医務室のベットの上で横たわっていた。

「ダーク！」

隣では涙で頬を赤くしたはやてがいた。

「はやて……ごめんな、お前を気分転換させるはずがこんな事になつて……」

そう言つた途端にはやてはダークに抱きついてきた。

「馬鹿……また私との約束破つた……無茶したらあかんてあれほど言つたのに……私がどれだけ心配したか分かるん！」

「はやて?! ……本当にごめんな、でもあの状況では仕方なかったんだ……」

「うん、分かつてる……ありがとな……でもあんまり心配かけさせやんといてな」

「気をつけるよ」

「あの〜取り込み中かな？」

2人が声の方向を向くと、そこにはなのはが立っていた。

「なのはちゃん?! ううんそんな事あらへんよ」

「なのは、心配かけたな」

ダークがベットから起き上がろうとすると体中から痛みが走った。

「痛ってえ！」

「大丈夫ダーク君?!」

「あんま無理しんどき、今日はゆっくり休み」

「ああ、そうさせてもらっよ」

「ダーク君、1つ話があるんだけどいいかな？」

「ああ、何だ？」

「ダーク君のデバイスであるクロニクル何だけど……今修理してるからね」

「修理？」

「ダークが気絶してたから知らへんと思うけどあの後デバイスみたら相当ダメージ負ってて半壊状態やったんよ」

（やはりクロニクルにも相当な負荷がかかってしまったか……）

「それでなんだけどさっきシャーリーからの報告で修理したら何か前には見かけないモードが追加されてたみたいなんだけど」

なのはの放つオーラのようなものが段々と不穏なものへとなってきた。

「これについて説明してもらえるかな？」

「……はい」

笑顔でこちらを見るなのはにダークは流石に命の危険を感じて本当の事を話したのであった。

一方その頃……ダークとはやてが訪れていた廃棄施設では1つの人影があった。

「面白いものをみせてもらったな……人間の分際でこいつをよく倒したものだ」

その人影は破壊された戦闘機人の残っていたデータチップを眺めながら呟いた。

「いずれは俺が奴を倒す……そしてドクター……奴へと復讐する……」

そして破壊された戦闘機人の残骸を拾うとその廃棄施設を後にした。

第12話 アクセルモード（後書き）

アクセルモードは俺の好きなある特撮から拝借させてもらったフォームの1つです

今回は起動音までそのまま利用しましたw

途中から導入したモードなだけにこのような形での参戦となりましたw

第13話 その日、機動六課（前編）（前書き）

本来ならギン姉出向があるんですが書く部分が少ないという勝手な都合でギン姉が出向済み前提で書かせていただきます

ダークの怪我の容態を回復し、陸士108部隊からギンガが出向しフォワードと共に訓練を行った日々が数日過ぎた……遂に公開意見陳述会前日へとなった

第13話 その日、機動六課（前編）

隊長陣を含めたフォワード陣ははやての指示の元ロビーへと集まっていた。

「と言う訳で明日はいよいよ公開意見陳述会や、明日14時からの開会に備えて現場の警備はもう始まつてる。なのは隊長とダーク隊長とヴィータ副隊長、リイン曹長とフォワード4名はこれから出発、ナイトシフトで警備開始」

「皆、ちゃんと仮眠取った？」

「……………はい！……………」

フェイトの言葉に元氣良く返事を返すフォワード陣。

「私とフェイト隊長、シグナム副隊長は明日の早朝に中央入りする。それまでの間よろしくな」

「……………はい！……………」

はやての言葉に再び元氣良く返事を返すフォワード陣、そして全員でヘリポートへと向かった。

「あつ」

「ん？」

そしてヘリに乗り込もうとしたダークとなのはがふとヘリポートを見ると、そこに寮母のアイナとヴィヴィオの姿があった。

「あれ？ ヴィヴィオ」

「どうしたんだ？ ここは危ないよ」

「ごめんなさいね、なのは隊長、ダーク隊長、どうしてもパパとママのお見送りするんだって」

「駄目だよヴィヴィオ、アイナさんにわがまま言っちゃあ」

「ごめんなさい……」

「まあ夜勤で出掛けるのは初めてだから不安なのは分かるけどな」

そう言うときダークは不安そうにしているヴィヴィオの頭をそつと撫でた。

「あつそつか、なのはママとダークパパ、今夜は外でお泊りだけど明日の夜にはちゃんと帰ってくるからね」

「絶対？」

「絶対に絶対、良い子で待ってたらヴィヴィオの好きなキャラメルミルク作ってあげるからね」

「うん」

「パパとママと約束ね」

「うん！」

ダークとなのはと指切りしたヴィヴィオの頭を再びダークが撫でた。

ヘリの中では先の光景を見ていたフォワード達が話しかけてきた。

「それにしてもヴィヴィオ本当に懐いちゃってますね」

「そうだね、私は結構厳しく接してるつもりなんだけどな～ある人は何時でも優しくしてるのが原因かな？」

そう言うとなのははダークの方に視線を向けた。

「誰だろな」その人って」

ダークは軽く受け流すとなのはから視線を少し逸らした。

「でもきつと分かるんですよ、厳しさの中にあるなのはさんの優しさ」

キヤロの言葉になのはは苦笑いを浮かべた。

「にやはは……」

「もういつその事2人の本当の子供にしちゃえばいいんじゃないですか？」

「受け入れてくれる家庭探しはまだまだ続けるよ、良い受け入れ先が見つかってヴィヴィオがそこに行ってくれる事を納得してくれれば」

「納得しない気が……」

エリオの言葉に他のフォワード達も頷いていた。

「ええ？そりゃあずつと一緒に居られたら嬉しいけど本当に良い行き先が見つかったらその時はちゃんと説得するよ」

「説得しても駄目な気もするんだけどな」

ダークがそつと呟いた。

「ダーク君？」

「いや、何でもないよ。でもあの子には絶対に幸せになってほしいからな、それまでは俺達が必ず責任持つて守っていくけどな」

「そうだね」

2人は顔を合わせ笑みを浮かべた。

そして中央管理局 地上本部へと到着したフォワード陣はそれぞれの場所へ配置についた。
その途中でダークとなのはとスバルとギンガは入り口の前に来た。

「さて、じゃあ私達はそろそろ中に入るよ」

「はい！」

「内部警備の時、デバイスは持ち込み禁止みただからギンガ、悪いがクロニクル預かっていてくれないか？」

「分かりました」

「スバルは私のレイジングハートお願いしていい？」

「あっはい」

「前線メンバーで隊長達の分を預かっていてくれないか？」

「はい！」

そして2人は中へと入っていった。

遂に陳述会が開始されたが今の所は何も起こる雰囲気は無かった。

（恐らく……必ず奴らは仕掛けてくるはずだ……だが目的がハッキリしねえ……奴らの目的はなんだ？）

途中でなのはと合流して話し合いをした後に解散した後、ダークは1人考えながらをしながら歩いていた。

陳述会も終わりに差し掛かった頃……本部の周りでは計画が着々と進みつつあった。

「ナンバーズ、ナンバー3トローレからナンバー12デイドまで全機配置完了」

スカリエッティのアジトで紫の髪の女性がパネルを操作していた。

「お嬢とゼスト殿も所定の位置に着かれた」

以前ダークが戦ったトローレと呼ばれていた戦闘機人から応答があった。

「攻撃準備も全て万全、後はGOサインを待つだけです」

次にメガネの戦闘機人が答えた。

「ええ」

「ふふふふ……くくくくはははは！」

後ろに座っていたスカリエッティが不気味に笑っていた。その笑っているスカリエッティに紫の髪の女性が話しかけた。

「楽しそうですね」

「ああ楽しいさ、この手で世界の歴史を変える瞬間を、研究者として技術者として、そうだろうウーノ？」

ウーノと呼ばれた紫の髪の女性は笑みを浮かべた。

「我々のスポンサー氏にとくと見せてやろう。我らの想いと、研究と開発の成果をな……さあ始めよう！」

「はい」

スカリエッティの指示が出た途端にウーノがパネルを操作し始めた……遂にスカリエッティの計画が始動したのであった。

その頃本部では異常が起きていた、管制システムがやられ、通信もシャットアウトされ、さらに防壁出力の低下、そして大量のガジェットの出現、ダークはすぐさま異常に気付き走り出した。

（恐らく奴らは俺達が外に出るのを防ぐつもりだ！）

ダークは急いで出口へと走った。

「不味い！」

目の前のシャッターが閉まりかけていたのであった、ダークは滑り込むとギリギリで潜り抜け外に出る事に成功した。

「くそっ通信妨害が酷い……これだと連絡も取れやしない」

「ダーク隊長！」

ダークが連絡を取ろうとしているとギンガがこちらに走ってきた。

「ギンガ、丁度良いところにいた」

ダークはギンガからデバイスを受けとった。

「ダーク隊長、ガジエットの襲撃です、私は中へと入り隊長達と合流します」

「頼んだぞ、俺は敵の撃墜に入る」

ギンガと別れたダークはすぐさまセットアップすると飛び立とうとした。

「ふっ……逃しはしない！」

ダークは突如出現した転移魔法陣に囲まれてしまった。

「何だ！」

そして一瞬にしてダークの姿が消えたのであった。

「……はっ……」

ダークはどこかの倉庫のような場所へと転移していた。

「すぐに戻らないと！」

「待ちたまえ」

外へ向かおうとするダークの前に1人の青年の姿が立ちはだかった。

「お前は何者だ？」

「僕の名はプロト、かつて忌まわしいドクターに作られた戦闘機人のプロトタイプさ！」

第13話 その日、機動六課（前編）（後書き）

凄い中途半端なところであえて切りました

ちよつとぶつ飛びすぎてますがそこはご愛嬌という事でw

第14話 その日、機動六課（後編）（前書き）

ダークが謎の戦闘機人プロトに転送されている時、他の六課メンバー達にも危機が迫っていた。

第14話 その日、機動六課（後編）

（くっ……戦闘機人……）

ギンガはダークと別れた後に建物内部で戦闘機人と遭遇し戦っていた。

（なかなか手強い……応援を呼ぼうにも通信が繋がらない……ここは私1人でやるしかないわね）

覚悟を決めたギンガは再び攻撃を行った。

「くっ！」

「はああ！」

相手の戦闘機人は攻撃を避けつつ、こちらにナイフを何発か飛ばしてきた。そして一瞬の隙を付きギンガが戦闘機人を捉えようとした。

「もらった！」

しかしギンガは自らの身にも攻撃が迫っている事に気が付かなかった……

その頃ダークは転移された先で戦闘機人のプロトと向かい合っていた。

「戦闘機人?!　だがスカリエツィの手下では無いのか?」

「あのドクターは俺が使い物にならないからという理由で俺を失敗作として処分したのさ……だが俺は生き延びた!　奴への復讐をする為にな」

「それは勝手だが何故俺をここに呼んだ?」

「お前の力は凄い……何せあの巨大な戦闘機人を一瞬にして倒す程の力を持っているのだからな、そんなお前の力が欲しい」

「何故お前が知っている?!　それに俺の力を欲しいってどうゆう事だ?」

「あの施設ではお前達が去った後に残っていたデータチップからお前の戦闘データをコピーさせてもらってな、オリジナルのお前を倒し、そして完全なデータを取り込めば俺は無敵になれる！」

ダークはクスッと軽く笑った。

「何が可笑しい？」

「全く……何を勘違いしてるのかは知らないけどお前が思ってる程俺は強くない、ただとお前に倒されるつもりもない！」

ダークは剣の形態のクロニクルを構えた。

「くくくつ……何故わざわざ君をここへ呼んだと思ってる、周りを見たまえ」

ダークは見渡すと巨大なロボットが多数置いてあった。

「こいつは？」

「ドクターの過去の産物らしいな、ここには廃棄されたものばかりが置いてあるようだね……早速利用させてもらおう！」

そう言ったプロトは後方へとジャンプすると2足歩行型のロボットへと乗り込んだ。

「喰らえ！」

プロトはダークに向かいレーザーを放ってきた。そしてダークの避

けた先にあつた他のロボットへと命中した。

（ちっ……流石にこのままでは分が悪い……）

ダークはレーザーを避けつつ飛行型ロボットへと乗り込むとガトリングで応戦した。

「その程度のロボットで僕に勝てると思っているのかい？」

プロトが笑いながらこちらへ目掛けてレーザーを乱射してきた。

（確かに状況は俺の方が不利だが……機動力ではこちらが大きく秀でている、そこに僅かな勝機があるはずだ）

そしてダークは機動力を生かしながら足を集中砲火し続けた。

「何だ?!」

プロトのロボットの足はボロボロとなり立っている事が出来なくなったロボットはその場に崩れた。しかし同時にダークのロボットもレーザーを受けてしまいその場に着陸した。

「ドアが開かない?! くそ！」

ダークは外へと脱出しようとするがドアがビクともしなかった。

「君の負けだよダーク……じゃあ大人しくあの世にいきな！」

「不味い！」

完全に動きが止まったかと思われたプロトのロボットから大量のミサイルが降り注いだ……

ミサイルが着弾した瞬間に凄まじい爆発が起きた……だが瞬間、ダークがプロトに対して特攻してきたのである。

「ほう……面白いね。これが前に倒したっていう高速移動のモードかな？」

「喰らえ！」

間一髪アクセルモードで脱出したダークが蹴りを入れようとした瞬間、目の前からプロトの姿が消えた。

「何！」

「何も君だけが高速で動ける訳じゃないさ、しかも君はただの人間だけど僕は戦闘機人なんだよ？」

「くっ！」

2人は壮絶な格闘戦を繰り広げた。

【5】

（不味い……もう時間が……）

【4】

「君と違って僕にはリスクは少なくてね、君は所詮この程度だったとはね……がっかりだよ！」

【3】

（こうなったら一瞬の隙を突いて！）

【2】

ダークは捨て身の覚悟で懐へと飛び込み剣を抜いた。

「まさか?!」

【1】

「悪かったな……俺がこの程度の人間で！」

【Time Out】

「がはあ！」

「けどこの程度の人間に倒されるお前は……一体何なんだ？」

プロトの切断された身体と共にダークも倒れこんだ。

「くっ！ 身体が動かない……意識を失わないだけマシだけどな……」

ダークは呟いているとロンググーチから通信が入った。しかしノイズがかなり酷く聞き取りづらいものだった。

《こちららロン…グアー…チスタ…ーズ0…応答願…います……》

《グリフィス、どうしたんだ？通信がかなり酷いんだが》

《こちら…は今ガジェツ…トとアン…ノーンの襲撃を…受けて…います…持ちこた…えてい…ますけど……もう》

《了解した、すぐに向かう！》

ダークは通信を切ると立ち上がった。

「はぁはぁ……急いで戻らないと！」

ダークは身体の硬直が解けた後に立ち上がるとバスターモードへとチェンジした。

（持ちこたえてくれ……俺の身体……）

「クロニクル、スターダストミラージュ！」

【StarDust Mirage！】

そして倉庫からダークの姿が消えた。

その頃……機動六課本部ではシャマルとザフィーラが戦っていた。
しかし余りにも多いガジェットに加え戦闘機人を相手にたった2人
でもう限界だった。

「たった2人で良く守った……だけでもう終わり、僕のIS（レ
イストーム）の前では抵抗は無意味だ！」

見下した様に無表情に見つめる戦闘機人^{オットー}が機動六課目掛け緑色の光
線を放った。

「クラールヴィンド！ 防いで」

【Yes！】

シャルが障壁を展開して何とか光線を防いだ。

「でゅおおおおあああああ！」

ザフィーラがガジェットガジェットの攻撃を避けながら光線を放つオートーオートーに向かい飛び掛っていった。

「デイド！」

「IS（ツインブレイズ）」

ザフィーラの死角からデイドと呼ばれたもう1人の戦闘機人が現れ、双剣による一撃で叩き落した。

「ぐわあ！」

そして落下地点にいたシャルを巻き込んだ事により障壁が消え六課が大爆発を起こした。

「さよなら」

「くっ！」

そして意識が消えかかっている2人に目掛けて光線が放たれた。だが2人は光線が目の前で防がれている事に気付いた。

「なっ……？！」

「この光はまさか……？！」

最後に意識を失う直前に2人が見たものは星屑の様に光散らすダークの姿であった。そしてダークは砲撃の体勢に入った。

「これ以上……お前達の好きにはさせない！」

「確かお前はドクターが言っていた要注意人物？！」

「私達の任務は完了した、離脱するぞ」

2人は逃走を図りすぐさま離れようとしていた。

「喰らえ！ エターナルバスター！」

「くっ！」

「何て威力だ！」

ダークのバスターによって周辺にいたガジェットを殲滅し、ダメージは与えたものの戦闘機人の2人は逃げられてしまった。

「くそ……逃げられたか……くっ！ 流石にアクセルとミラーージュの連続使用は身体に負担をかけ過ぎたか……ごめん皆……」

そしてバスターを撃ち終わった瞬間にその場に倒れこんだ。

その頃……スバルは姉・ギンガの行方を捜していた。

「ギン姉……ギン姉……」

そして開けた場所に出た瞬間スバルの目の前に衝撃の光景が広がっていた。戦闘機人3人がそこには居てそのうち1人に捕獲されている人物は……捜していた姉のギンガであった。

「あつ……あ……あ……うわああああ！」

次の瞬間はスバルの瞳の色は普段の緑色から金色へと変化して凄まじい叫びを上げ、周りには衝撃波を放っていた。

「ギン姉を返せ……ギン姉を……返せええええ！」

そして戦闘機人達に向かい突撃していった。

「くっ！」

「どおおけえええ！」

空中で蹴り合いをした赤い髪の戦闘機人ノーヴェとスバルはその衝撃で互いに吹き飛んだ。

「ぐわあ！」

「ぐっ！」

その間にもノーヴェと濃いピンク色の髪の戦闘機人ウエンディがギンガを連れて逃走してしまった。

それを追いかけようとするスバルを残りの眼帯をした銀髪の戦闘機人チンが妨害する。

「邪魔……すんなあああああ！！！」

チンクはスバルの連続で打ち付けられる拳をシールドで防ぎ続けていた。

「うおおおおあー！！！」

振動破碎によってシールドは碎かれその衝撃で2人共が再び吹き飛んだ。

「うわあ！」

「ぐっ！」

そして逃走した戦闘機人を追跡しようとした瞬間、再びチンクにより妨害されてしまった。

「ギン姉！」

「行か……せん……」

爆発が起こったもののその煙の中からスバルがボロボロの身体でチンクに向かい歩いてきていた。

「返せ……」

「くっ……」

「ギン姉を返せよおお！」

チンクの目の前まで来た瞬間、セインが現れ、チンクを回収していた。

「うう……うわあああああん！」

「スバル！」

なのはが到着した頃には、無情にもスバルの悲痛な叫びがこだましているだけであった。

この事件により六課は壊滅……フォワードメンバー、ダーク、リンフォースIE、スバル、シャマル、ザフィーラが怪我を負い、ヴィヴィオとギンガが拉致されてしまった。
そして映し出されているスカリエッティが話しているのを見ていたカリムがそつと呟いた。

「予言は覆らなかった……」

その言葉にはやてがそつと答えた

「まだや……機動六課は私達はまだ終わってない！」

第14話 その日、機動六課（後編）（後書き）

中途半端に戦闘描写が入れました><

今まではダーク目線オンリーだったんですが今度からは書けたらなんですが他のキャラからの目線も書けたらいいなと思います。

次はキャラの詳細について再び載せます

オリキャラ紹介3（前書き）

今回は新たなモードとオリジナルの敵のプロットについて紹介します。

オリキャラ紹介3

アクセルモード

ダークのデスクロニクルのモードの1つでソードモードから派生する超高機動特化モード。発動時には周りに凄まじい衝撃波を発生する。

なのはのレイジングハートにある同名のモードとは全く違い、身体に強力なドーピングの様な効果を与える事で、一時的に急激な速度上昇を可能にしたモードである。その機動力はフェイトの真・ソニックフォームでさえ比にならない程である。

だがその機動力と引き換えに身体への負担が大きく、動き出してから10秒しか維持出来ず、10秒経つと自動的にソードモードに戻りしばらく使用が出来なくなる。

さらに戻った直後はその反動で少しの間硬直がある為、敵を仕留められなかった場合は逆に窮地に陥る事もある。

初使用時は、巨人型ガジェットとの戦闘で使用したがまだ調整中だった為、5秒しか維持出来ず、アクセルの終了と共に意識を失ってしまった。この時、デバイスにもかなりの負担が掛かっておりクロニクルも半壊してしまった。

現時点では行動時間は10秒となり安定してきたモードだがあくまで試作のモードであり、ダークは更なる改良を加えて完全なモードへとしている途中である。

プロト

性別 男

肉体増強レベル SS

かつてスカリエッティにより作り出された戦闘機人。

ISはアブソリューション。戦闘機人やガジェット等のデータチップを自らの身体に入れる事で即座にデータ分析が行われ相手の技を瞬時に再現する事が出来る。

作られた時期で言えばウーノより前でナンバーズに真の1番目の戦闘機人になるはずだった。

戦闘能力は高かったものの、性別の都合や元々スカリエッティに反抗的だった為に処分され存在自体が闇に葬られていた。

しかし、生き残ったプロトは何とか逃げ出し10年近くの間どこかで隠れて復讐心を膨らませながら生き延びていた。

そしてダークとはやてが訪れた廃棄施設でダークのデータを獲得し、その力を欲して完全なデータを獲得する為に地上本部襲撃の最中ダークを転送装置で廃棄倉庫へと呼び戦闘しアクセルをコピーした技で互角以上に渡りあうがアクセルが切れる直前に油断した隙に特攻され真つ二つに切断されてしまった。

オリキャラ紹介3（後書き）

遂に物語はもうすぐクライマックスへと進んでいきます。

これからもよろしく願いします^^

第15話 翼、再び（前書き）

前回の襲撃で重症を負った者は病院に送られ、負傷の軽かった者は調査に当たっていた。

その最中未だにダークだけが意識が戻らずにいた。

第15話 翼、再び

ダークの様子を見る為にヴィータがダークのいる病室にやってきた。病室ではシャルとザフィーラがダークを見守っていた。

「お前ら無理すんな、怪我をしてるのはお前達もなんだぞ」

「ダークの今の状態に比べたら俺達なんて軽いさ」

「ダークちゃん……アクセルの使用と直後にミラージュ使って駆けつけてくれたから……私達の盾になってくれて守ってくれた……でもその代償で身体へのとても大きな負担になってて……」

シャルは未だに目を覚まさないダークを見て悲しげな顔をした。

「私の方も……リインが守ってくれた、リインとユニゾンしてなかったら死んでたかもしれねえ……」

「さつき連絡があってリインちゃんは今夜には目を覚ますそうよ。ただ……ダークちゃんは何時目を覚ますか分からないわ……」

「ああ……とりあえずお前らはもう部屋に戻って寝てろ」

「とか言ってるヴィータちゃんも休まないといけないでしょ」

「私は今からナカジマ三佐からの話があつてな、なのは達と地上本部へ向かうんだ。分かったなら行くぞ」

3人は部屋を出て行った。

そして地上本部に到着した隊長陣はカリムとクロノのいる聖王教会と入院している六課のメンバーがいる病院で通信で繋ぎながらゲンヤの話を聞いた。

「まずはどっから話したもんかな」

「三佐が追っていらした戦闘機人事件からでしょうか」

「出来ればギンガとスバルの事、奥様の事についても」

「ああ……戦闘機人の大元は人型戦闘機械、これはずいぶん古くからある研究でな、旧暦のかなり古い時代から行われてきた。人間を模した機械兵器、いろんな形式で開発されたがものになった例はあまり多くない。それがあるとき劇的な進化を遂げた……25年ばかり前の事だ」

「機械と生体の融合自体は、特別な技術ではない。人工骨格や人工臓器等、それこそ古くから使われている。ただ……」

「足りない機能を補うことが目的ですから、強化とはほど遠く拒絶反応や長期使用におけるメンテナンスの問題もあります」

「だが、戦闘機人はな……素体になる人間の身体の方を弄る事で、それを解決しやがった」

「っ！！！」

ゲンヤの言葉に驚く隊長陣。

「誕生の段階で戦闘機人のベースとなるよう、機械の身体を受け入れられるよう、遺伝子レベルで調整された子供達……それを生み出せる技術をあの男は作り出した……」

「それがジェイル・スカリエッティ……」

「11年前……まだスカリエッティなんて男が絡んでは知らなかったが、うちの女房は陸戦魔導師として、捜査官として戦闘機人事件を追ってた。違法研究施設の制圧、暴走する試作機の捕獲。スバルとギンガは、事件の追跡中に女房が助けた戦闘機人の実験体なんだ……うちは子供が出来なくてな。二人とも、髪の色や顔立ちもなんだか自分に似てるしってよ……」

「まあともかく俺達の娘として、人間として育てる……って言い出した。技術局でのメンテだの、検査や研究協力だのも多少はあったが、二人とも実に普通に育ったよ」

「女房が死んだのはあいつらにそれなりに物心がついた頃だった…… 特秘任務中の事故だとかで死亡原因も真相も未だに闇の中だ。女房はどうかで見ちゃいけねえものを…… 踏み込んだじゃいけねえ場所に踏み込んでしまっただろうと思ってる…… 命を捨てる覚悟で事件を追っかかりや良かったんだが女房との約束でな。ギンガとスバルをちゃんと育ててやるってな……」

「そしてちょうど同じ時期に俺の義母さんも亡くなってしまった」

その声の主にその場にいた全員が驚きの声を上げた、何せ意識を失っているはずのダークがそこにいたからである。

「『ダーク?!』」

「意識を失ってたはずじゃあ?」

「さっき目が覚めたときさ」

ダークはそつとモニターの前に座った。

「そうか…… お前さんが女房が言っていた少年か」

ゲンヤは何かを納得した様に頷いていた。

「ナカジマ三佐、ダーク君の事知ってるんですか?」

なのはがゲンヤに尋ねた。

「ああ、女房が同僚がよく連れてきてた少年とよく遊んだって言う」

ててな。それで何となくピンと来たんだ」

「って事はダーク君はナカジマ三佐の奥さんと幼少の頃に会ったって事？」

「そうなるな……幼少の頃によく義母さんに連れられて管理局に行ったりした時にクイント姉さんはよく遊んでくれたんだ」

ダークがクイントとの関係を話し終えたあと自らの義母であるメガーヌについて話し始めた。

「俺の義母さん事メガーヌ・アルピーノはクイント姉さんと同じく陸戦魔導師として、捜査官として戦闘機人事件を追ってたんだ……だけど俺はなのはを庇った時の事件で気を失ってる間に義母さんは亡くなってしまっていたんだ……」

「あつ……」

「俺はずっと逃げてたんだ……義母さんが無くなった事を知った直後……それまでの思い出も無意識の内に全て封印してたんだ……だけどあの2人に会ってから途中から少しずつ思い出してきたんだ」

「あの2人？」

「スバルとギンガさ、クイント姉さんに容姿が似てたしな。そしてルーとの出会い……様々な要素が絡み合って意識を失ってる時に全てを思い出したんだ」

話を聞き終えたゲンヤがダークに質問を投げかけた。

「ダーク、お前さんも自身でいくつか調べたんだろ？……あの時の事件はどう思う？」

「俺も調べたんですが思った情報は得られなくて……それどころかルーの居場所さえ掴めませんでしたからね……ナカジマ三佐はどう思われますか？」

ダークは自嘲気味に話した。

「俺も告発の機会があると思って調べてはいたんだがよ、確信には至れてないってのが現状だ」

「そうですか……」

ダークはそつと俯いた、ゲンヤはお茶を飲み干すとダークに質問をぶつけた。

「それとこれは個人的な事なんだが、何で女房の事を姉さんって呼んでるんだ？」

「義母さんに言われたのと本人にもそう呼ぶように言われたんですよ」

ダークは軽く笑いながら答えた。

「全くあいつは……」

ゲンヤは軽く呆れたように笑った。

「まあ家の女房と娘達についてはこんなとこだ、後は合同捜査の方

だが……お嬢」

「はい……」

それから合同捜査についての話があり、皆解散した。

ダークとフェイトは屋上に上がるとそこには1人なのはが佇んでいた。

「なのは？」

「フェイトちゃん、ダーク君……」

「どうしたんだ、こんなところで？」

「うん……」

「ヴィヴィオの事……考えてた？」

「うん……約束破っちゃったなって……」

振り向いたなのはの目には涙が溢れていた。

「わたしがママの代わりだよって……守っていくよって約束したのに……側にいてあげられなかった……守ってあげられなかった……あの子きつと泣いてるっ！」

「なのは……」

フェイトがそつと抱きしめた。

「ヴィヴィオがひとりで泣いてるって……悲しい思いとか、痛い思いをしてるかもって思うと……身体が震えてどうにかなりそうなの……」

「なのは……俺だって……守りきれなかったんだ……お前だけが気に病む事は無いんだ、絶対に俺達の手で救いだすんだ！」

「ダーク君……」

「ダーク……」

（ヴィヴィオ……必ず救い出してやるからな！）

心の中で呟きながら、声を上げ涙を流すのはとフェイトをそつと抱きしめた。

その頃……スカリエッティに捕らえられたヴィヴィオは台座の上に
仰向けにされバインドで拘束されていた。その表情はすっかり怯え
きつて涙を流していた。

「ふええ……うええ……」

怯えるヴィヴィオにクアットロが声をかけた。

「はい、お姫様。怖くないですよ」

「バイタルも正常。魔力安定よし、移植準備OK」

「良いタイミングだ」

扉が開くと、スカリエッティとレリックの入ったケースを持ったウーノが現れた。

「いやああああ！！」

「お姫様、きっと分かるのよ。自分がこれからどうなるのかってことを」

「パパア！ ママア！」

「泣いても叫んでも、だれも助けになんか来てくれませんよ」

「うわああああ！！ うわああああああ！！」

そしてスカリエッティはケースの中からレリックを取り出した。

「さて始めようか、聖王の器に王の印を譲り渡す。ヴィヴィオ、君は私の最高傑作になるんだよ！」

「パパー！！ ママー！！」

スカリエッティのアジトにヴィヴィオの叫び声が虚しく響き渡った。

第15話 翼、再び（後書き）

遂に物語も終盤に入ってきました

ダークは果たして大切な者達を救う事が出来るのか……次回をお楽しみに^^

それとこれからも宜しくお願いします^^

第16話 ゆりかご（前書き）

六課本部の壊滅により拠点を失ってしまった機動六課、だが戦艦アイスラへと拠点を移し復活を遂げる。

その中前回の戦闘で怪我を負ったチンク、オットー、ディードの様子を見に他の戦闘機人達が生体ポットの前に来ていた。

第16話 ゆりかご

チンクが入っている生体ポットの前にはクアットロ、ノーヴェ、ウエンディがチンクの様子を伺っていた。

「やあ」

「セインか」

水色の髪 of 戦闘機人のセインが他の機人達と合流した。

「チンク姉達の様子は？」

「他の2人はまだ軽いけどチンク姉は特に酷くて……」

「基礎フレームの破損がかなり酷いつて……」

「あの子……ゼロ・セカンドのIS【振動破碎】って私達の体内にある電子部品とかフレームに対してもの凄い威力が出るのね、勿論対人や対物に使ってもかなりの威力だろうけど」

「まともに当たれば間違いなく一撃必殺」

「ノーヴェちゃんの右腕も結構な手術がいりそうなの」

「そっか」

「私はいいけど、チンク姉……そんな攻撃を何発も……」

申し訳なさそうに俯くノーヴェの頭にそつと手をおいたセインはもう1つの生体ポットに入っているギンガを見た。

「あたしらとは違う生まれ方をしたあたし達のオリジナル」

「ドクターの技術を使ってるのは間違いないけど誰が作ったかも知れない子」

「そんな別に興味もねーし関係ねえ！ チンク姉をこんなにしやがったあのハチマキ！ あいつは絶対ぶっ壊す！」

熱くなっているノーヴェにクアットロが逆撫でするように話しかけた。

「壊しちゃ駄目よー回収しなきゃ」

「あのオレンジ頭の幻術使いもだ、あいつであんなに手こずってなきゃ！」

セインも頭に手を置きながら軽く対応した。

「あゝ分かった分かった、次はきつとやっつけような」

「クアットロ、ドクターが呼んでる」

通信が入りディエチがクアットロを呼び出した。

「はい、セインちゃん。チンクちゃんの様子見ててあげてね」

「あいよ」

別の場所ではルーテシアが紫色の髪の女性の入った生体ポットを見ていた。

そこにウェンディがやってきた。

「あゝルーお嬢様、１１番ウェンディっす」

「ん」

「これルーお嬢様のお母さんなんでしたっけ？」

「らしいよ」

「らしい？」

「この人の事覚えてないから……」

「あつ……」

少し暗い表情になったルーテシアを見て、ウエンディは地雷を踏んでしまったという顔をしつつも急いで取り繕った。

「いやゝまあ……こちらのお母さんも適合するレリックコアが見つければちゃんと復活されるんすよね？」

「ドクターからはそう聞いている。11番が見つければこの人は目を覚ます……目を覚ましてお母さんになってくれれば私には心が生まれるんだって……」

「そうっすかゝルーお嬢様には他には家族とかいないんっすか？」

「覚えて無いし私は1人だから……」

再び少し暗い表情をしてしまったルーテシアを見てウエンディはまた地雷を踏んでしまったといった顔をした。

（あの魔導師は一体なんなんだろう……私の事は知ってるし……私のお父さん？……にしては若過ぎるし……もしかしたら警戒しないといけない対象かもしれない）

ルーテシアは1人ダークの正体について考えていた。

それから数日後……拠点をアースラへと移した機動六課のフォーワードメンバーは会議室で待機していた。

「ああ、皆お揃いやな」

会議室のドアが開き、はやてとグリフィスが入ってきた。

「失礼します」

「ちょうどよかった。今機動六課の方針が決まったところや」

「地上本部による事件の対策は相変わらず後手に回っています。地上本部だけでの事件調査の継続を強行に主張し、本局の介入を堅く拒んでいます。よって本局からの戦力投入はまだ行われません。同様に本局所属である機動六課にも捜査情報は公開されません」

「そやけどな……私達が追うのはテロ事件でも、その主犯格としてのスカリエッティでもない。ロストログア・レリック……その捜査線上に、スカリエッティやその一味がおるだけ。そう言う方向や……ほんでその過程において誘拐されたギンガ・ナカジマ陸曹となのは隊長とフェイト隊長とダーク隊長の保護児童。ヴィヴィオを捜索・救出する……そう言う線で動いていく。両隊長、意見があれば……」

はやての言葉に隊長達が答えた。

「理想の状況だけど……」

「俺が言えた義理は無いんだが……また無茶してないか？」

「大丈夫？」

「後見人の皆さんの黙認と協力はちゃんと固めてあるよ、大丈夫。なによりこんな時の為の機動六課やここで動けな部隊を興した意味も無い」

「了解」

「ならば方針に依存は無い」

「よし。ほんなら、捜査出動は本日中の予定や。万全の体制で出動命令を待ってな」

「」「」「はい！」「」「」

はやての言葉で会議が終了すると皆会議室を後にした。

ダークは会議室から出た後にアースラ内に設けられた自室に向かっていた。

「クロニクル、アクセルと久々のバスターの負担とか大丈夫そうか？」

【Please worry about master about master though I am safer.】

「訳：私は大丈夫ですがマスターはマスターの心配をしてください。」

「俺はもう大丈夫だよ、もう少し負担を下げれるように調整するか」

【OK.】

「あつダークさん！ デスクロニクル！」

ダークとデスクロニクルが自室に向かっている途中にリインに出会った。

「リイン、もう大丈夫なのか？」

「はいです〜お陰様で完全回復です〜ダークさんも大丈夫なんですか？」

「ああ」

「シャーリーからクロスミラージュ達のファイナルリミッター解除を頼まれたですよ〜」

「俺となのはが頼んだんだ」

ダークは手を差し出すとそこに掴まったリインを肩に乗せた。

「失礼します」

「本来ならもう少し慎重にいきたかったんだが、そう言われてられる状況じゃないしな」

「でも皆きつとちゃんと使いこなせるですよ」

「だな」

「ダークさんとデスクロニクルの方は……正式解除が認められたア
クセルはともかくグリッターモードだけはやっぱり……」

「流石に使わないよ……グリッターは俺とデスクロニクルの最強に
しての最後の切り札のモードだ……」

【That's right.】

「バスターだけでも火力は十分だ、魔力の消費量とか計算しておけ
ば十分間に合う量だ、それにアクセルだって余程の状況で無ければ
ソードで対処すればいいしな」

【Yes.】

（もうすぐだ……パパがすぐに助けにいくからな！）

ダークは心の中で呟いた。

自室へと戻ったダークはデバイスの最終チェックを済ませ部屋で休んでいた、そんな中スカリエッティのアジト発見の報告を受け、操縦室に向かう為に部屋を出たダークはその途中になのはとスバルとティアナと合流した。

「廃棄都市から膨大なエネルギー反応！ これは…… 戦闘機人？！
地上本部に向かってます。映像出ます！」

「っ？！」

「これは……」

「あっ……！」

そこには戦闘機人達と共に地上本部へ向かうギンガの姿があった。

「ギン……姉……」

その姿にスバルは愕然とその光景を見ていた。

「さあいよいよ復活の時だ！」

（私のスポンサー諸氏。そして、こんな世界を作り出した管理局の諸君。偽善の平和を謳う、聖王教会の諸君。見えるかい？これこそが君達が忌避しながら求めていた、絶対の力）

地面が揺れ、その揺れが激しさを増し、地割れが起きた途端に地面が競りあがったかと思うと超巨大な要塞が姿を現した。

（旧暦の時代。一度は世界を席卷し……そして破壊した、古代ベルカの悪夢の英知）

「あれが……聖王のゆりかごか……」

（見えるかい？ 待ち望んだ主を得て、古代の技術と英知の結晶は今、その力を発揮する）

そのモニターに映し出された光景を見て皆怒りを覚えた。そこには聖王の台座に座らされたヴィヴィオの姿があった。

「パパ……ママ……あつ！ 痛いよ……怖いよ……パパ！ ママ！」

「くっ！」
「ヴィヴィオ……」

（さあ、ここから夢の始まりだ！ わははははは！ うわはははははははははは！）

その光景を見て震えるのはをダークはそつと抱きしめた。

「必ず救いだすんだ！ 俺達の手で！」

「うん！」

ダークとなのはは改めて決意を固めた、必ずあの子を、ヴィヴィオを救う為に。

第16話 ゆりかご（後書き）

ちよつと前回の投稿後に入れなかった部分を半ば無理やり詰め込みました><

以後はこのような失敗は極力さけたいと思います。

遂に出現したゆりかご、そして最終決戦が始まります。次回をお楽しみに^^

第17話 無限の欲望

管理局本局某所……脳が入ったカプセルが3つ並ぶ部屋では最高意思決定機関、管理局最高評議会の面々が極秘で会議を行っていた。

「ジェイルは、少々やりすぎたな」

「レジアスとて我らにとっては重要な駒の1つであるというのに」

「我らが求めた聖王のゆりかごも、奴は自分の玩具にしようとしている」

「止めねばならんな」

「だが、ジェイルは貴重な個体だ。消去するにはまだ惜しい」

「しかしかの人造魔導師計画のゼストは失敗、ルーテシアも成功には至らなかったが……聖王の器は完全な成功のようだ。そろそろ良いのではないか？」

「我らが求める、優れた指導者によって統べられる世界。我らがその指導者を選び、その陰で我らが世界を導かねばならん」

「そのための生命操作技術、そのためのゆりかご」

「旧暦の時代より、世界を見守るために我が身を捨てて永らえたが……もつさほど長くは保たぬ」

「だが次元の海と管理局は、未だ我等が見守ってゆかねばならぬ」

「……失礼します」

会議の途中に別の場所から女性の声が聞こえてきた。

「ゼストが五体無事であればな。ジェイルの監視役として最適だったんだが」

3つのカプセルの前に新しいウィンドウが開かれるとそこにゼストが映し出された。

「皆様、ポットメンテナンスのお時間ですが」

そこへ先程の声の主である女性局員が現れた。

「ああ、お前か」

「会議中だ、手早く済ませてくれ」

「はい……」

「あれは武人だ、我らには御せぬよ。戦闘機人事件の追跡情報とルーテシアの安全を引き換えに辛うじて鎖を付けていただけだ。奴がレジアスの元に辿り着いてしまえばそこで終わりよ」

「お悩み事そうですね」

メンテナンスに来た女性局員が、ポットのパネルを操作しながら言った。

「なに、瑣末な厄介ごとよ」

「お前が、気に掛ける事でもない」

「はい……」

「レジアスや地上からは、何の連絡も無いのか？」

「ええ……未だにどなたからも」

「そうか……しばらくは慌しくなりそうだが、お前にも苦勞をかけるな」

「いいえ。私は望んでここにいますから」

そう言うと女性局員は不気味に微笑んだ。

その頃、アースラでは六課のフォワード陣が集まり会議が行われていた。

「理由はどうあれ、レジアス中將や最高評議会は偉業の天才犯罪者、ジェイル・スカリエッティを利用しようとした、そやけど逆に利用されて裏切られた。どこからどこまでが誰の計画で、何が誰の思惑なのかそれは分からへん……そやけど今、巨大船が空を飛んで、街中に大量のガジェットと戦闘機人が現れて、市民の安全を脅かしてる……これは事実。私たちは止めなあかん」

「うん、ゆりかごには本局の艦隊が向かってるし、地上の戦闘機人達やガジェットも各部隊が協力して対応に当たる」

「だけど、高レベルなAMF戦をできる魔導師は多くない」

「だから俺達は、ゆりかごと地上とアジトの3グループに分かれて、各部署に協力することになる」

そしてグループ分けが始まり

ゆりかごへはなのは、はやて、ヴィータ。

アジトへはフェイト、ダーク。

地上へはシグナム、リインフォース？、スバル、ティアナ、エリオ、キャロ。

そしてフォワード陣は上記のようなグループへと振り分けられたの

であつた。

「フェイトさん！」

「ダークさん！」

会議が終わり会議室を出ようとしたフェイトとダークをエリオとキヤロが呼び止めた。

「別グループになっちゃったね。ごめんね……私、いつも大切な時に2人のそばに居られないね」

「そんな……」

「フェイトさんとダークさん……たった2人でスカリエッティのところになんて、心配で……」

「緊急事態のために、シグナムに地上に残ってもらいたいし、ダークは勿論、アコース査察官やシスター・シャツハも一緒だよ！人じゃない」

そう言うとフェイトは2人を抱きしめた。

「2人とも頑張つて、絶対無茶とかしないんだよ！」

「はい……」

「それは、フェイトさんですよ……」

「ダークさんもあんまり無茶しないでくださいよ……」

「ああ」

そう言うとダークは2人の頭を撫でた。

「恐らくルーもお前達に立ちほだかと思う、その時は頼んだぞ」

「「はい！」」

そして2人との会話を終えるとダークはフェイトと共に部屋を出た。その途中で前方に見えたヴィータ、シグナム、リインと合流した。

《俺が途中で離脱する事……言わなくて良かったのか?》

気にかけて事があつたダークは念話でフェイトに尋ねた。

《うん……あの子達には心配かけたくないから》

《ドクターは得体の知れない人だ、やっぱり俺も残つた方が……》

《ダークには他にもやる事があるでしょ……お母さんを見つけた後は妹さんを助けにいつて……そしてヴィヴィオを助けにいかないかね》

《……すまないな》

ダークはそう言うつとフェイトにそつと頭を下げた。それにフェイトは軽くウィンクして答えた。

《ダークさん、ダークさん!》

《アルジェント、ちよつといいか?》

フェイトとの念話を終えた所でシグナムとリインが念話で語りかけてきた。

《どうした?》

《次の戦闘ではあの騎士と赤い子がまた出てくるかもですよね》

《《ゼスト・グランガイツと融合騎アギトの事か》》

《えっ?!》

ダークとシグナムの同じ言葉にリインは驚きの声を上げる。

《騎士ゼストについてはナガシマ三佐がご存知だった。元管理局員で首都防衛隊のストライカー級魔導師、8年前に亡くなったはずのレジラス中将の親友だそうだ》

《そしてメガーヌ義母さんとクイント姉さんの部隊の隊長だった人さ》

《そうだったんですか》

《シグナム、本来なら俺は行きたいとこだけど……》

《みなまで言うな、お前には他にやる事があるだろう。私に任せてくれ》

《お願いします》

ダークはシグナムにそつと頭を下げた。それにシグナムは微笑み返した。

「それじゃあ私達は先に行く」

「皆さん、頑張ってくださいね」

「2人も気をつけるよな」

「ああ、互いに頑張ろうな」

先に出撃するシグナムとリインと途中で別れた3人は途中、新人フオワード陣の所へ向かうヴィータとも別れ、2人は持ち場で待機していた。

なのは、ヴィータ、はやてと合流した2人は降下ハッチへと向かった。

「ほんなら、隊長陣も出動や！」

「うん！」

「おう！」

（降下ハッチ、開きます）

降下ハッチが開かれた途端にそこから5色の閃光が走っていった。
そして聖王教会にいるカリムから通信が入った。

《機動六課隊長、副隊長一同、能力限定完全解除。はやて、シグナム、ヴィータ、なのはさん、フェイトさん、ダークさん、皆さん……どうか！》

「しっかりやるよ！」

「迅速に解決します！」

「お任せください！」

「全てを終わらせます！」

カリムの言葉に隊長達が答える。

《リミット……リリース！》

そしてカリムは隊長と副隊長達のリミッターを完全解除した。

リミッターが完全に解除されたのはとダークはフルドライブを起動させ、バリアジャケットをチェンジし、デバイスもエクシードモードとバスターモードへと変更した。

「エクシード……ドライブ！」

「バスター……フルドライブ！」

（今までとは違ってフル状態のバスターか、この状態ならあいつらも仕留めれたかもしれないな……）

ダークは六課襲撃の時に仕留めなかった戦闘機人の事を考えていた。その2体の機人は今回の戦闘に出撃している情報を知りとても悔やんでいたのであった。

（魔力残量とかもちゃんと計算して戦わないとな……まあその為のソードもあるわけだし）

「なのは、ダーク……」

ダークが1人考えているとなのは共々にフェイトに話しかけられた。

「フェイトちゃん？」

「フェイト？」

「なのはとレイジングハートのリミットブレイク【ブラスターモード】、ダークとデスクロニクルのリミットブレイク【グリッターモード】2人共、言っても聞かないだろうから使っちゃ駄目とは言わないけど……お願いだから無理だけはしないで」

「私はフェイトちゃんの方が心配……」

「ああ、フェイトとバルディッシュのリミットブレイクだって、高性能な分、危険も負担も大きい……」

「私は平気……大丈夫」

「む……もう、フェイトちゃんは相変わらず頑固だな……」

「な、なのはだって何時も危ない事ばかり」

「まあ2人共無茶ばかりしてるって事だよ」

ダークの言葉に2人が同時に突っ込んだ。

「ダーク君が1番言えないでしょ！」

「ダークが1番言えないでしょ！」

その少し上ではやてとヴィータが呆然と3人の言い争いを見ていた。

「だって俺は航空魔導師だぜ、危ないのも仕事だからな」

「だからってなのはもダークも無茶が多過ぎるの！ 私が、私達がいつもどれだけ心配してるか……」

「知ってるよ。ずっと心配してくれてたこと、よく知ってる」

「だから今日もちゃんと帰ってくる。ヴィヴィオを連れて一緒に元気に帰ってくるさ！」

「うん！」

会話が一区切りが付いたのを見計らってはやてが話しかけた。

「あの〜フェイトちゃん、ダーク、そろそろ……」

「あっうん！」

「OK！」

「ダークは言うまでもねえけど、フェイト隊長も無茶すんなよ。地上と空はあたしらがキツチリ抑えるからな！」

「うん、大丈夫」

「任せろよ」

2人はヴィータに向かい親指を立てて返答した。

「2人共、頑張ろうね」

なのはが拳をこちらへと向けた。

「うん！」

「ああ！」

そう言いながらなのはと拳を合わせた後、2人はアジトの方面へ向かい加速した。

最初救うのは自らを育ててくれた義母さん……彼女を救えない限りルーは救えない……

（義母さん……待っててくれ！）

ダークはそっと呟いた。

その頃、管理局本局某所……突然凄まじい音がしたかと思うと次には叫び声が響き渡った。

「な、何故！ 何故だああああ！」

床一面にはカプセルの中に入っていた培養液と脳が床に散乱していた。そのカプセルを割った主である女性局員の腕には鋭く尖った鉤爪が装着されていた。

「……ご老体に無理をされては、良くありませんからね。そろそろ

お休みを」

「貴様は……ジェイルの！」

この女性局員は遂に正体を現した。ナンバーズの1人であるドウーエであった。

「貴方が見つけ出し、生み出し育てた異能の天才児。失われた世界の知恵と、限りなき欲望をその身に秘めたアルハザードの遺児。開発コードネーム、アンリミテッド・デザイア……ジェイル・スカリエッティ。彼を生み出し、力を与えてしまった時点でこの運命は決まっていたのですよ。どんな首輪を付けようと……いかなる檻に閉じ込めようと……扱いきれはるはずもない力は必ず破滅を呼ぶものです」

「馬鹿な……馬鹿なあああ！」

「おやすみなさい……」

そして残酷にも静かに振り下ろされたその一撃によって最後のカプセルが砕かれてしまった。

第17話 無限の欲望（後書き）

最近は就活が忙しくて更に更新が不定期になりそうです<>
この不景気なんてスターライトブレイカーで吹き飛ばしてやりたい
です！

遂に最終決戦が幕を切って落とされました、果たしてダークは大切な人達を救う事が出来るのか?! 次回をお楽しみに^^

第18話 決戦（前書き）

アジトへと到着したフェイトとダークはシャツハと合流してアジト内部へと進入していった。

そして次々迫り来るガジェットの大群を撃退していく中、ダークは母との過ごした日々を思い出していた。

第18話 決戦

「こんにちは」

俺と義母さんの出会いは15年も前に遡る、任務で地球へと来ていたメガーヌと義母さんは帰りの途中に俺の居た孤児院へと寄った、そこで俺と出会い挨拶をしてきたのであった。

「こ、こんにちは」

「君、名前は何て言うの？」

「ダーク、ダーク・アルジェントって言うの、お姉さんは？」

そう答えるとメガーヌは一瞬複雑な顔をした後に何かを考えている顔をしていた。

「私はメガーヌ・アルピーノって言うの、よろしくね」

「よろしく、お姉さん」

しばらく話をしているとメガーヌは施設の方へと入っていった。しまった。

（あのお姉さん何をしに行ったんだろー）

そして施設から出てきたメガーヌが再びダークの元へやってきて言った言葉にダークは驚いた。

「私の子供にならない？」

「……えっ?!」

「許可はもらってきたし拒否権は無しよ」

突然の言葉に戸惑うダークを尻目にメガーヌは笑った。

「……で、でも」

「お姉さんと暮らすのは嫌? 貴方のお母さん代わりになってあげようかと思ったのに……」

そう言うとメガーヌは涙ぐみながらこちらを見た。

「嫌では無いですけど……その……」

「じゃあ決定ね〜行くわよ」

正直相当強引な人だとは思った、けど何だか信用は出来る人だと思ったダークはすぐに準備を済ませ、メガーヌへと付いていった。そして一緒に任務で来ていたクイントと合流し2人の住む世界……ミッドチルダへと足を踏み入れたのであった。

「……は?」

「うーん、説明は難しいんだけど貴方の居た世界とは違う世界ね」

その言葉にまだその頃は理解出来ていなかったダークは首を傾げた。

「????」

その様子を見ていたクイントがクスクス笑いながら言った。

「メガーヌ、流石にまだ分らないわよ」

「まだ難しいかったわね」

そう言っているとメガーヌはダークを抱きしめた。

「お姉さん……恥ずかしいよ」

抱きしめられていたダークはクイントを始め他の人からの視線に気付き顔を赤らめた。

「もう可愛いんだから、あっそうそうもう私の事は母さんって呼ぶことないわね？」

「えっ?! ……義母……さん」

「なあにダーク」

顔を真っ赤にしながら呼びかけるとメガーヌは優しく微笑み言葉を返した。

「烈風一陣！ 切り裂けヴィンデルシャフト！」

「疾風迅雷！ はああああ！」

「ブレイズ……シューター！」

一通りのガジェットを殲滅し終わった時、奥からヴェロッサの稀少^{レア}スキル^{スキル} ウンエントリヒ・ヤークト 技能の無限の獵犬が走ってきた。それと同時にヴェロッサから通信が入った。

「別働隊、通路確認。危険物の順次封印を行います」

「了解！ 各突入ルートはアコース査察官の指示通りに」

「はい！」

「ありがとうございます、シスターシャッハ。お2人の調査のおかげで迷わず進めます」

「探査はロツサの専門です。この子達が頑張ってくれました。それとダーク一尉、この分岐の右の方向に貴方の母と思われる反応があります」

「そうですか、ありがとうございます」

ダークは深々と頭を下げた。

「フエイト、シスター・シャッハ、気をつけてな」

「うん！」

「はい！ 我々はこのまま奥へ、スカリエッティの居場所まで！」

そしてその途中の分岐地点でフェイト&シャツハとダークの2手に別れた。

その頃地上では本部へと向かう戦闘機人達を止めるべく新人達が降り立った。それを監視していたオットーが他の機人達に指示を出した。

「ノーヴェ、デイド、ウェンディ。例の4人がそっちに向かってる」

「ホントか？」

「ああ。ただ前とは状況が違う。正面から戦う気で来てる」

「なぐに。望むところッスよ」

「ゆりかご浮上前に中央本部を制圧、司令部を抑えたい。状況に対する不確定要素はなるべく排除する」

「了解」

「任せるッス」

「あの子……ルーちゃん！」

少し進むとビルの上でルーテシアがヘリを狙っているのをキャロが見つけた。

「フリード！」

キャロとエリオと共にフリードに指示を出しルーテシアに向かっていった。

「キャロ！」

そしてスバルとティアナも気付き指示を出す。

「予定変更、こっちを先に捕まえる。良いわねスバル？」

「うん！ ウイング……」

「IS発動……レイストーム」

スバルがウイングロードを展開しようとした瞬間、緑の閃光による妨害があった。すぐさま避けたスバルとティアナの前に戦闘機人達が立ちはだかった。

「きゃあ！」

ツインブレイズを駆使し斬りかかってくるデイドにダガーモードにして必死で応戦するティアナだったが力負けしてビルへと吹き飛ばされてしまった。

「ティア！」

「うりやあああ！」

「くっ！」

そしてスバルもノーヴェに蹴りを入れられ飛ばされてしまった。

「エリアルキャノン！」

「あっ！」

そこに更にウェンディの砲撃による追い討ちがかけられた。

「スバルさんとティアさんが！」

「合流を……あっ！」

エリオとキャロが気付きすぐさま合流しようとするがガリユーによって阻まれた。

「ホイールプロテクション！」

何とか応戦する2人。その中だんだんと分断されていくフォワード陣、ビルの中へと飛ばされたティアナに向かいスバルが必死に呼びかけていた。

《ティア……ティア！》

《ゲホゲホ……この状況で個人戦は不味いわ、合流を……あっ！》

ティアナが合流を図ろうとしたが結界によってビル内に閉じ込められてしまった。

「残念でした！合流はさせねーッス」

そしてビルの中には無数のガジェットを引き連れたノーヴェとウェンディの姿があった。

「あっ……」

何とか体勢を立て直したスバルの前にギンガが立ちはだかった。

「ギン姉……」

「……………」

現場の司令塔であるオットーが機人達に指示を出していた。

「幻術使いは閉じ込めた、後はなるべく引き離しながら戦って」

《はいよ》

次にルーテシアへと通信を繋いだ。

《お嬢様もお願いします》

ルーテシアは無言で頷くと飛行型のガジェットに乗りキャロとエリオを引き離しに掛かった。

「ふふっハチマキとコンビでどうにか半人前、4人でやっとなんか1人前のヘッポコガンナーが仲間と引き離された気持ちはどうっすか」

「チンク姉の痛さと悔しさ、ハチマキの代わりにお前に返してやる！」

（こっちは結界の中……ライトニングもスバルも分断距離と戦力負担はかなり大きい……背中を見せたらその瞬間終わる……）

そして指示を出すために念話で他のフォワードに語りかけた。

《ライトニング、スバル、作戦ちょっと変更……目の前の相手を無理して1人で倒す必要は無いわ。足止めて削りながらそれぞれに対処、それでも十分市街地と中央本部は守れる》

「ばっかじゃねーの、そんなに時間かからねーよ」

「あんたは捕獲対象じゃねーっすから殺しても怒られねーっすからね」

（念話が聞かれてる?!）

念話が聞かれてる事に気付いたティアナは急いで念話を切った。

《通信は以上……全員、自分の戦いに集中!》

その頃アジトではしばらく進んだ先にカプセルが大量に並んでいる通路があった。そしてその内のカプセルの前でダークは止まった。

「義母さん……」

そこには10年前と殆ど姿が変わっていない義母　メガーヌ・アル
ピーノの姿があった。

「義母さん…… やつと会えた…… 実際に会うのは13年振りだね」

カプセル前に立ったダークはカプセルの中のメガーヌに話しかけた。

「やつと取り戻せた…… 義母さん！」

そしてダークはそつと涙を流した。

「…… 感傷に浸るのは全てが終わってからだ…… まだまだ救わなき
やいけない人はいる」

涙を拭き取るとダークはカプセルを抱えた。

「行くぜ！ クロニクル！」

【OK! StarDust Mirage!】

ダークはミラージュを発動しカプセル毎転移した。そしてその転移
先である病院の中の施設へとカプセルを預けた。その時、グリフィ
スから通信が入った。

《ダーク、無事救出出来たかい？》

《ああ、それで何かあったのか？》

《君の妹さんが今ライトニングの2人と戦闘してる、早く向かってあげてくれ》

《了解！》

ダークは通信を終えるとメガーヌの入ったカプセルを見ながら心の中で呟いた。

（義母さん……次はルーを救いに行ってくるよ！）

そして外へと出るとすぐさま飛び立った。

（頑張ってくれ……エリオ、キャロ！）

ダークは心の中で呟きながら2人の元へと急行した。

第18話 決戦（後書き）

そのうち外伝を1つ乗せるかもです。

そして就活は相変わらず大変です><

今度説明会があるのでそれに行ってきますゝ

受かる確立は0に等しいですが頑張ってきますw

遂にメガ―ヌを助け出す事が出来たダーク……そして次はルーテシアを救いに向かうが……次回をお楽しみに^^

第19話 P a i n t o P a i n (前書き)

無事義母・メガーヌを救いだす事を成功したダークはすぐさま義妹であるルーテシアの元へと向かっていた。

第19話 Pain to Pain

ゆりかご 玉座の間

ヴィヴィオを苦しそうに座っている姿を見たディエチは心苦しそうな表情をしながらクアットロに重い口を開いた。

「……クアットロ、正直な感想言っていない？」

「自由」

「この作戦……あまり気が進まない」

「あゝら？ どうして？」

クアットロはパネルをいじりながら答えた。

「こんな小さな子供を使って、こんな大きな船を動かして、そこまではないといけないことなのかな？ 技術者の復讐とかそんなのって」

「あゝあれ、あんなのドクターの口先三寸。ただのデタラメよ？」

「そうなの？」

「ドクターの目標は初めから1つだけ。生命操作技術の完全なる完成。そして、それができる空間作り。このゆりかごはそのための船であり、実現のための力。まあ今回の件で軽く何千人かが死ぬでしょうけど、百年経たずに帳尻が合うわよ。ドクターの研究はあ、人

々を救える力だもの」

「……」

「どうしたの？ デイエチちゃん。お姉さまやドクターの言うこと、信じられなくなっちゃったあ？」

「そうじゃないよ。そうじゃないけど……ただこんなに弱くてちっちゃい命が、それでも生きて動いてるのを見ちゃうと、この子達は別に関係ないんじゃないかって」

「姿を見る前なら平然とトリガーをひけたのに、ねえ？」

迷いが見えるディエチに向かい威圧感を込めた声でクアットロが声をかけた。

「はあ、ごめん。気の迷いだ。忘れて」

「そお？」

「命令された任務はちゃんとやる。そうしないと、地上のお姉や妹たちも面倒なことになるしね」

（お馬鹿なディエチちゃん。あなたもチンクやセインみたいなつまんない子なのね）

ディエチの立ち去り際にクアットロは心の中で本心を呟くと複数のモニターを起動した。

（うふふふふ）なんにもできない無力な命なんて、その辺の虫とお

んなじじゃない。いくら殺しても勝手に生まれてくる、それを弄んだり蹂躪したり、籠に閉じ込めてもがいてるのを眺めるのって、こゝんなに楽しいのに！　ねえ？　）

そう言い放ち笑みを浮かべながらゆりかご内に進入していたのはとヴィータに向かい大量のガジェットを送り込んだ。

同時刻……なのはとヴィータの2人は進入口が見つかった為に内部へと侵入していた。

「行くぞなのは！」

「うん！　ヴィータちゃん」

内部に侵入してから少ししてから通信が入った。

《機動六課、スターズ分隊へ》

《はい！　》

《駆動炉と玉座の間、詳細ルートが判明しました》

そしてモニターにルートが映し出された。それを見て2人は少し驚いた。

《真逆方向……》

《突入隊のメンバーはまだそろわねーか？》

《各地から緊急徴兵していますが……あと40分はかかるかと……》

《仕方ねえ。スターズ1とスターズ2、別行動で行く》

《了解しました。急いで応援を揃えます》

「ヴィータちゃん?!」

「駆動炉と玉座のヴィヴィオ。かたっぽとめただけで止まるかもしれないし、かたっぽとめただけじゃ止まらねえかもしれないだ。こうしてる間にも外は危なくなってる、だからあたしが駆動炉に回る。おまえはさっさとヴィヴィオを助けて来い」

「でも！」

ヴィータはグラーフアイゼンを構えると言った。

「あたしとアイゼンの1番の得意分野知ってんだろ？ 破壊と粉砕、鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵 グラーフアイゼン。砕けねえ物なぞこの世にねえ。一瞬でぶっ壊しておまえの援護に行つてやる。さっさと上昇を止めて、表のはやてに合流だ」

「うん……気をつけて、絶対すぐに合流だよ！」

「あつたりめーだ！」

そう言つと2手に別れて進み始めた。

その頃、ゼストとアギトは地上本部へと向かっていた。

「むっ！」

「旦那、あいつら！」

2人の前にシグナムとリイン？が立ちはだかった。

「局の騎士か？」

「本局機動六課 シグナム二尉です。前所属は首都防衛隊……貴方の後輩という事になります」

「そうか」

「中央本部を壊しにでもいかれるのですか？」

「古い友人に……レジアスに会いにゆくだけだ」

「それは復讐の為に？」

「言葉で語れるものではない、道を開けてもらおう」

「言葉にしてもらわねば、譲れる道も譲れません」

レヴァンティンに纏われた炎を見てアギトが反応した。

「あっ！」

「アギト、どうかしたか？」

「な、何でもねえ。グダグダ語る何てな！ 騎士のやるこっちゃねーんだよ！」

ゼストとアギトはユニゾンしたのを見てシグナムとリイン？もユニゾンした。

「騎士とか！ そうでないとか！ お話をしないで意地を張るから戦うことになっちゃうですよ！」

「五月蠅えバツテンチビ！ 剣精アギト、大儀と友人ゼストがためにこの手の炎で押して参る！」

「祝福の風、リインフォースツヴァイ。管理局の一員として、あなた方を止めさせて貰います！」

「行きます！」

「むっ！」

そして2人の騎士はぶつかり合い、辺りに凄い衝撃が起きた。

その頃、ルーテシアと戦っていたエリオとキャロは必死でルーテシアへと呼びかけていた。

「ルーちゃん！ 何でこんな事するの！」

ガリユーと交戦中のエリオも呼びかける。

「でないと僕達は君達を本当に……」

「ドクターのお願い事だから……」

そう言うときゃろへと魔力弾を放った。

「ウイングシューター！」

キャロもそれに応戦し互いの魔力弾が衝突しあって爆発が起きた。その煙の中から2人の召喚師が近くビルへと降り立った。

「ドクターは私の探し物、レリックの??番……それを探す手伝いをしてくれる。だからドクターのお願いを聞いてあげる」

「そんな、そんなことのために」

「そんなこと？」

「くうっ……」

ルーテシアが再び魔力弾を放ってきたのでキャロはそれを瞬時に防御した。

「あなたにとってはそんなことでも、私にとっては大事なこと」

「はあはあ……違う違う！ 探し物のことじゃなくて」

「ゼストももうすぐいなくなっちゃう。アギトもきつとどこかへ行っちゃう。でもこのお祭が終わればドクターやウーノたち皆で？ 番を探してくれる。そしたら母さんが帰ってくる……そしたら私は不幸じゃなくなるかもしれない」

「違う！ それ違うよ！」

「あなたと話すの、嫌い」

必死に呼びかけるキャロに向かいガリユーが襲い掛かるうとした。

「あっ！」

「でいやああ！」

それをエリオが間一髪阻止した。

「違うんだよ。幸せになりたいなら、自分がどんなに不幸で悲しくても、人を傷つけたり不幸にしたりしちゃ駄目だよ！そんなことしたら、欲しいものも幸せも、何も見つからなくなっちゃうよ。あたし、アルザスの竜召喚師 管理局の機動六課の魔道師！ キャロ・

ル・ルシエ！」

「同じく、エリオ・モンディアルと飛竜フリードリヒ！」

「話を聞かせて！ レリック探しも！ あたし達が、機動六課の皆が手伝うから！」

「……」

2人の説得に心が揺らいでいるルーテシアを見てクアットロはそつと呟いた。

（チビ共余計な事を……こうなったら……）

「そして今ダーク隊長が貴方のお母さんを救いに行っているから」

「ダーク……あの魔導師が何だというの？」

「ダークさんはあなたの……」

「あらら駄目ですよルーテシアお嬢様、ガリユーさんも」

クアットロはすぐに妨害する為に空中にモニターを展開しルーテシアに話しかけた。

「戦いの最中、敵の言うことに耳を貸しちゃいけません。邪魔なものが出てきたらぶつち殺してまかり通るゝそれがあたしたちの力の使い道。ルーお嬢様にはこの後市街地ライフライン停止ですとか、防衛拠点のぶつ潰しですとか、色々お願いしたいお仕事もありますしゝ」

「クアットロ、でも……」

「あゝ迷っちゃってますね。無理もないです。純粹無垢なルーテシアお嬢様にそこのおチビの言葉は毒なんですね。と言う訳で……ポチッと」

クアットロがパネルのボタンを押した瞬間にルーテシアは苦しそうな顔をしていた。そして周りに無数の召喚魔法陣が現れ、そこからはインゼクトと地雷王が無数に出現し、ルーテシアの後ろから更に巨大な魔法陣が現れそこから白天王が現れた。

「ガリユーこれは?!」

「ルーお嬢様が迷ったりしないようにしてあげます、まずはそこのおチビ達に消えてもらいましょう、そいつらを倒さないとお母さんと会えませんよ」

「こ、この！」

そして再び目を開いたルーテシアの目には憎しみの感情しか映っていないかった。

「白天王……こいつらを……殺して!!」

キャロとエリオの悲痛な叫びにも耳を貸さず、無情にも下された指示により白天王の魔力砲がキャロとエリオへに向かって放たれた。

「くっ！」

「ルーちゃん！」

直撃したかと思われた魔力砲は別の方向からの砲撃によって阻止された。

「これは！」

「まさか?!」

そしてその砲撃は白天王の魔力砲を押し返し命中した。その凄まじい威力で白天王を戦闘不能に陥った。

「邪魔が入ったわね……本当に貴方は厄介ですわね」

4人の視線の先には先程の砲撃を放った張本人であるダークが杖を構えていた。そして2人の傍へと降り立った。

「ダーク隊長! どうしてここに？」

「フェイトさんと一緒にアジトに行っているはずじゃあ?!」

「お前達には言っていなかったんだが俺は義母さんを救った後はこちらに来る予定だったんだ……でもお前達を不安にさせない為にフェイトが黙っていたんだよ」

「そう……だったんですか」

そしてダークは空中に映るモニターのクアットロに向かい叫んだ。

「貴様……ルーに何をした！」

「ドクターが仕込んでくれたコンシユレーション・コンソールで

誰の言うことも聞く耳を持たない無敵のハートをプレゼントしてあげただけですわ」

「てめえ！」

「お嬢様、そこにいるのが貴方を見捨てた憎いお兄様ですよ。感情の向くまま殺しちゃってください」

最後にルーテシアに嘘を言い放つとクアットロはモニターを切った。

「くそっ！」

「憎い……インゼクト、ガリユー、地雷王、……こいつら皆殺して！！」

「エリオはそのガリユーの相手を、キャロはフリードと共に残りの召喚獣の相手を頼む！」

「はい！」

完全に洗脳されているルーテシアは3人に対して攻撃を仕掛けてきた。

その頃、アジトを進んでいたフェイトは1人で戦闘機人2人を相手に戦っていた。

「はあはあ……」

（AMFが重い……シスター・シャツハとはさっきの戦闘機人と戦っていてすぐには来れない……早くこの2人を倒して先に進まなきゃいけない。

ダークに戻ってきてもらう訳にもいかないし、呼んだら必ずミラーージュで飛んでくるだろうけどそうなるともうダークの後が無くなっちゃう。

でもソニックもライオットもまだ使えない、あれを使ったらもう後が無くなる……スカリエッティまで辿り着けなくなったら最悪だし、対応出来ても他の皆の救援や援護に周れなくなる……）

フェイトが次の策を考えているとモニターが出現しそこには目的の相手であるスカリエッティの姿が映し出された。

「いやあゝ、ごきげんよう。フェイト・テストロッサ執務官」

「スカリエッツィ？！」

そして市街地上空にモニターを再び起動するとルーテシアと戦っている3人にもスカリエッツィは話しかけた。

「私の作品と戦っているFの遺産と竜召喚師、そして黒き守護者よ、聞こえてるかい？」

「「あつ！」」

「てめえ！」

「我々の楽しい祭の序章はいまやクライマックスだ」

「なにが、何が楽しい祭だ！今も地上を混乱させてる重犯罪者が」

「重犯罪？ 人造魔道師や戦闘機人計画のことかい？ それとも、私とその根幹を設計し、君の母君プレシア・テストロッサが完成させたプロジェクトFのことかい？」

「全部だ！」

「いつの世も革新的な人間は虐げられるものだよね」

「そんな傲慢で、人の命や運命を弄んで」

「貴重な材料を無差別に破壊したり、必要もなく殺したりはしていないさ。尊い実験材料に変えてあげたのだよ。価値のない、無駄な命をね」

「この！」

フェイトが飛び上がろうとした瞬間に赤い魔力系がフェイトの足とバルディッシュを拘束した。

「くっ！」

そしてフェイトの視線の先からスカリエッティが姿を現した。

「クククッハハハハハ、普段は温厚かつ冷静でも怒りと悲しみに
はすぐに我を失う……」

そしてスカリエッティは魔力系の拘束を強めてバルディッシュの刃を砕くと魔力弾を放った。

「しまっ……」

フェイトはそれを回避する事が出来ず命中し、落下した先に張り巡らされた魔力系に囲まれて囚われてしまった。

「君のその性格はまさに母親ゆずりだよ、フェイト・テストロッサ」

その様子をモニター越しに見ていた3人は声を上げた。

「「フェイトさん！」」

「フェイト！ 俺が付いていればこんな事にはならなかった……く
そっ！」

《「ダーク……私は大丈夫だから……来ちゃ駄目だよ！」》

自分を責めていたダークにフェイトから念話が入った。

《フェイト！ でも……》

《私は大丈夫だから……ダークは助けなきゃいけない人がいるから！》

《……ごめんな、フェイト……そしてありがとう》

《お礼なんていいよ、絶対助けるんだよ》

《ああ！》

念話を終了したダークは決意を固めた表情でルーテシアの方向を向いた。

「ルーちゃん、私達が戦う理由なんてない。私達と戦ったって何にもならないよ」

その言葉に返事が返ってこず、殺意のこもった視線がずっと3人を捉えていた。

「ガリユー。君も主人を護る戦士ならルーを止めて。ルーはあいつらに騙されてる、操られてるだけじゃないか！」

エリオがガリユーへと呼びかけるも効果は無かった。

「あなた達には分からない……優しくしてくれる人がいて、友達がいって、愛されてる。私の大切な人はみんな私の事を忘れて行っちゃ

う……1人は嫌だ……」

「ルーちゃん……」

「寂しいのはもう嫌だ……一人ぼつちは嫌だああ！！」

涙を流しながら叫ぶルーテシア、それに対してエリオとキャラロが身構えた。

「ルー！ お前は1人ぼつちなんかじゃないんだ！」

ダークはルーテシアに向けて歩みを進めながら叫んだ。

「嘘だ……」

「嘘じゃない！」

「嘘だああああ！！」

そう叫ぶとダーク目掛けて魔力弾を放った。

「くっ！」

ダークは放たれた魔力弾を避ける事無く受け止めた。

「「ダーク隊長？！」」

その光景を見ていたエリオとキャラロは驚き、モニター越しに様子を見ていたクアットロはダークの姿を見て嘲笑った。

「どうして避けないのかしらあゝ面白いわねえ」

「俺はもう逃げない……もう過去から逃げるのは止めた」

そう言うとき、ダークは再び歩みを進めた。ルーテシアは涙を流しながらこちらに複数の魔力弾を放ってきた。しかしルーテシアの意志が戻りつつあるのか、その魔力弾が命中する事は無かった。

「1度は手放してしまった……寂しい思いもさせてしまった……」

「うう……」

そしてダークは目の前に行くとき、としゃがむとルーテシアを抱きしめた。

「もう絶対に離さない……」

「お……に……い……ちゃん……」

「意識が戻ったのか？」

安堵した表情を浮かべるルーテシア、だが一瞬にして苦しみの表情へと変わった。

「ううううあああああ！」

「ルー！　しっかりしろ！」

「ダークさん危ない！」

キャラの声に振り向くと地雷王の攻撃が迫っていた。ダークはそれを間一髪避けるとキャラとエリオと共にフリードに乗った。

「ありがとな、キャラ。だが何が起こってるんだ？」

「ルーちゃんがまだ戦おうとしてるから召喚獣が混乱してるんです……」

「ダークさん、僕達でルーちゃんを見えています。ダークさんはゆりかごへ向かってください！」

「馬鹿言つな、お前達をこのまま放置なんて出来ない」

「大丈夫です、ダーク隊長はまだ助けなきゃいけない人がいます！
」

「私達なら大丈夫です、必ずルーちゃんを守ってみせます！」

2人の固い決意を見てダークは2人に任せる事にした。

「……無茶だけはするなよ！」

（ルー………すぐに戻ってくるからな）

ダークは呟きながら2人にルーテシアを預けるとゆりかごへ向かって飛んでいった。

第19話 Pain to Pain（後書き）

最近時間が取れないです><早く就職したいよぉ

気が付けばこの小説も投稿して4ヶ月ちよつとしか経ってないのに
もう終盤に差し掛かっています、早いものですね

そして最後にヴィヴィオを助けに向かったダーク……そこに待ち受ける運命とは……これからもよろしく願います^^

第20話 S t a r s S t r i k e（前書き）

ルーテシアを救う事に成功したダークはヴィヴィオとヴィヴィオを救いにいったなのはを援護に行く為にゆりかごへと向かった。その頃、なのはは聖王の間の近くへと来ていた。

第20話 Stars Strike

【Target point is near.】

【訳：玉座の間まで、もうすぐです。】

「うん」

レイジングハートの言葉にそつと答えるのは。

「あの小さな子の、お母さん、なんだっけ……」

その先ではディエチが待ち構えていた。モニター越しになのはを見ていたディエチは迷いを振り切るように顔を横に振り、砲撃のチャージを始めた。

「あんたに恨みはないけど……5・4・3・2――」

カウントダウンが進んでいく中遂にディエチの前になのはが姿を現した。

「1……」

その砲撃に気が付いたのははすぐさま砲撃の態勢を取った。

「っ！ エクセリオン……」

「0……」

「バスター！」

同時に放たれた砲撃は互角の威力を見せ互いに一步も引かなかった。

「……………うつ！　くつ！」

「くつ……………　ブラスターシステム、リミット1！　リリース！！」

【B l a s t e r s e t .】

「ブラスター、シュート！！」

なのははブラスターモードを開放し最初のリミットを外した。そしてその圧倒的な火力でディエチの砲撃を押し返し、撃墜させた。

「うつ！」

「はあはあ……………」

「抜き打ちで、この、威力……………」

（こいつ、本当に人間か？）

「じつとしてなさい。突入隊があなたを確保して、安全な場所まで護送してくれる」

【S e a l i n g .】

そしてディエチとイノーメスカノンにバインドを掛けた。

「この船は、私たちが停止させる！」

そう言い残すと再び飛び立った。

「……っ！」

【master】

先ほどのブラスターモードの反動のせい、腕を押さえるのは。その腕からは血が流れていた、その様子を見てレイジングハートが心配して声を掛けた。

「平気。ブラスター1はこのまま維持！ 急ぐよ、レイジングハート！」

【All right】

その様子をモニター越しに見ていたクアットロは高らかに笑った。

「あはは、ははは。なんだ、ブラスターシステムなんて大仰な名前がついてるから、どんなハイテクかと思ったら、バツカらしい。ねえ陛下あ？ あなたのママはそうとうおバカさんですよ？」

そう言いながらヴィヴィオに話しかけるが完全に怯えきってしまった。

その時、聖王の間の扉が吹き飛びそこからはが姿を現した。

「いつらしゃい。お待ちしました」

「……っ！」

「こんなところまで無駄足ご苦労様。さて、各地のあなたのお仲間は大変なことになってますよ」

クアットロが操作するとモニターには各地のフォワード陣の様子が

映し出された。

「大規模騒乱罪の現行犯であなたを逮捕します。すぐに騒乱の停止と武装の解除を」

「仲間の危機と自分の子供のピンチにも、表情一つ変えないでお仕事ですかあ？ いいですねえ、その悪魔染みた正義感」

「……っ！」

クアットロがそう言いながらヴィヴィオに触れようとした瞬間なのは砲撃を放った。しかしクアットロの姿は消え、さきほど起動されたモニターにその姿が映し出された。

「でも、これでもまだ平静でいられますか？」

そう言うヴィヴィオが突然苦しみ始めた。

「うっうああ！」

「ヴィヴィオ！」

「うわああああ！」

苦しみ叫ぶヴィヴィオに近付こうとするのは、しかし不思議な力にその行く手を阻まれてしまった。

「んっふ。いいこと教えてあげる。あの日、ケースの中で眠ったまま輸送トラックとガジェットを破壊したのはこの子なの。」

あの時、黒き魔導師が身体を張ってまでして防いだディエチの砲、

でも例えその直撃を受けたとしてもものともせずに生き残れたはずの能力。それが、古代ベルカ王族の固有スキル『聖王の鎧』。

レリックとの融合を経て、この子はその力を完全に取り戻す。古代ベルカの王族が自らその身を作り変えたという究極の生体兵器。レリックウエポンとしての力を」

「パパー！ ママー！」

その呼びかけになのはは必死で叫んだ。

「ヴィヴィオ！」

その言葉に反応したヴィヴィオがなのはの姿を確認してよりいつそ叫んだ。

「ママ！ やだ！ ママー！」

「ヴィヴィオ、ヴィヴィオ！」

駆け寄ろうとしたなのはは再び凄まじい力で吹き飛ばされてしまった。

「そこで大人しく見てなさい！すぐに完成しますよ。私たちの王がゆりかごの力を得て、無限の力を振るう究極の戦士」

「ママアアアー！！！」

「ヴィヴィオ！！！」

そしてなのはの目の前でヴィヴィオの断末魔の様な叫びと共に身体

中を光が包み込んだ。

「ほら陛下？　いつまでも泣いてないで。陛下のママが助けて欲しいって泣いてます。陛下のママを攫っていった怖い悪魔がそこにあります。頑張つてそいつをやっつけて本当のママを助けてあげましょう？　陛下の身体には、そのための力があるんですよ。心のままに、思いのままにその力を解放して」

そして光に包まれたヴィヴィオにクアットロは嘘の言葉を投げかけた。

「うううううああああ！！」

そして光の中から聖王としての姿となったヴィヴィオが現れた。

「あなたは、ヴィヴィオのママを……どこかに攫った」

「ヴィヴィオ、違うよ。私だよ！　なのはママだよ！」

なのはがヴィヴィオに対して必死で呼びかけた。

「違う！」

その言葉になのはは言葉を失った。

「っ！」

「嘘つき……あなたなんか、ママじゃない！」

「……っ……っ！」

「ヴィヴィオのママを、返して!!」

そう叫びながら、虹色の光を放つヴィヴィオ。

「ヴィヴィオ!!」

「うふふ、その子を止める事が出来たらこのゆりかごも止まるかも
しませんねえ」

「レイジングハート!」

【W・A・S・Full Driving】

「さあ、親子で仲良く、殺し合いを」

クアットロは最後に冷たく言い放ちモニターを切った。

「ママを、返して!!」

「ブラスター、リミット2!!」

なのははリミットを開放すると、ヴィヴィオを止めるべく立ち向かっていった。

その頃、融合騎アギトと合流したシグナムは部屋の奥へと辿り着くとそこには倒れている戦闘機人と腹部を貫かれているレジアス、そして血の付着した槍を持つゼストの姿があった。

「旦那……」

「これは……貴方が？」

シグナムの問い掛けにそつと頷くゼスト。

「そつだ、俺が殺した……俺が弱く遅すぎた……」

その表情からは悲しみが感じて取れた。

「同行をお願いします」

「断る、ルーテシアを救いに戻りスカリエッティを救いに行かねばならん」

シグナムの申し出を断り外へと向かおうとするゼスト。

「スカリエッティ、ルーテシア・アルピーノは義兄であるダーク・アルジェント始めとした六課局員が先程保護したとの連絡を受けました」

「メガーヌの息子が……よくやってくれたな、ならば俺の成すべき事は後1つだけだ」

その言葉にゼストは僅かに安心した表情を取ると持っていたシグナムの方を向き槍を構えた。

「旦那！ 何故?!」

「じつとしている！」

それに合わせてシグナムも剣を構えた。

「夢を描いて未来を見つめたはずが、いつの間にか随分と道を違えてしまった。本当に守りたいものを守る、ただそれだけの事の何と難しい事か」

そして2人の武士は互いにぶつかり合った……そして何度かの衝突

のうちにゼストの槍が遂に折れてしまった。
それに屈せず自らの拳を握り締め突撃するゼストをシグナムは迎え撃った。

「うおおおお！」

「紫電一閃！」

「旦那ああ！」

アギトの叫び声が響いた瞬間……決着がつきゼストはその場に倒れこんだ。

「俺の知る限りの事件の真相は、この中に納めてある」

そして傍に寄ったシグナムに情報の入ったデータチップを渡した。

「お預かりします」

「アギトとルーテシアのこと、頼めるか？ ルーテシアは母と義兄とようやく再開出来たが……ずっと巡り合うべき相手に、巡り合えずにいた不幸な子供だ」

「旦那！！」

アギトが駆け寄り叫んだ。

「アギト、おまえやルーテシアと過ごした日々。存外、悪くなかった。いい空だな」

駆け寄ったアギトをそつと撫でると外に見える空を見上げた。

「それとダークと言ったか……彼にルーテシアをこれからもずっと頼むと伝えてくれ」

「はい」

「俺やレジアスが守りたかった世界。お前達は、間違えずに進んでくれ」

「旦那……!!」

息を引き取ったゼストを見てアギトの叫びが虚しく響き渡った。

ゆりかご内部に侵入したダークは迫り来るガジェットを撃墜しながら聖王の間を目指していた。

（頼む……無事で居てくれ、なのは、ヴィヴィオ……）

そして壊された聖王の間へと入ったダークは驚愕の表情へと変わった。

「……なのは……ヴィヴィオ……」

そこには壁に叩き付けられているなのはと姿を変えてこちらへと憎悪の視線を向けるヴィヴィオの姿があった。

「ヴィヴィオ……パパが迎えに来てあげたよ」

ダークの自分の名を呼ぶ言葉に嫌悪感を露にした表情へととなるとこちらに魔力弾を数発放ってきた。

「あんたも嘘つき……あんたはパパじゃない！」

ダークは何とか防ぐと再び呼びかけた。

「くっ！ ヴィヴィオ！ 俺が分らないのか……」

ダークが必死で呼びかけているとモニターが付くとクアットロが現れた。

「ようやくお父様が来ましたわねえ、おバカなエースはもう戦えないみたいですしい」

「黙れ！」

ダークはモニターに向かい魔力弾を放った。

「やるしかないのか……」

苦渋の選択を強いられたダークは覚悟を決めると剣を構えた。

「パパとママを返して！」

そしてダークはヴィヴィオを止める為に向かっていった。

第20話 S t a r s S t r i k e (後書き)

ちよつと都合により一部本編と同じ所はカットさせていただいております><

中途半端な事になってしまいました><

これからもよろしく願います^^

第21話 護るべきもの（前書き）

迫り来るヴィヴィオに必死で向かっていったダーク、しかし大切な娘にはやはり手は出せず防戦一方となっていた。

第21話 護るべきもの

「ヴィヴィオやめるんだ！」

ダークは必死に呼びかけ続けた。

「勝手に呼ばないで！」

しかしヴィヴィオはダークの言葉を跳ね除けると壁に叩きつけられているのはへ向かって複数の光弾を放った。

「くっ！」

ダークは瞬時に移動するとなのはの前に立ち光弾を防いだ。

（このままの状態だと不利だ……こうなったらなのはにミラーージュをかけて避難させるしか……）

《駄目だよ、ダーク君！》

そう考えていると後ろにいるのはから念話が入った。

《なのは、大丈夫なのか？》

《私は平気……だけどまだちょっと身体が動かなくて……それでダーク君にお願いがあるの》

「はああああ！」

「くっ！」

ダークは自身に防御魔法をかけてヴィヴィオの攻撃を防ぎ続けた。

《ああ、手短に頼む。俺の防御魔法じゃ長くは持たない》

《時間稼ぎをお願いしたいの、私があの戦闘機人を見つけるまでの間、ヴィヴィオを止めていてほしいの》

《ああ、頼んだ。俺はやるだけの事をやってみる！》

「クロニクル！ ソードモード！」

【OK・Sword Mode！】

そう言うとダークは剣を構えて迫り来るヴィヴィオを迎え撃った。

一方、ヴィヴィオの猛攻に防戦一方のダークをクアットロはモニター越しに見ていた。

「もうすぐもう1人の馬鹿なエースも潰れる……ん？」

クアットロが呟いていると異常を示している別のモニターを見た。

「駆動炉……あの目障りなチビ騎士か……」

そのモニターではボロボロになりながらも必死で駆動炉を破壊しようとしているヴィータの姿があった。

「なんでだよ。なんでとやらねえ！ こいつをぶっ壊さなきゃ皆が困るんだ。はやてのことも、なのはのことも守れねえんだ！ こいつをぶちぬけなきゃ意味ねえんだ！！ だから……アイゼン！！」

【Jawohl！】

そう言うとヴィータは再びアイゼンを構えて駆動炉に向かっていった。

「ぶち抜けー！！」

しかしその衝撃に耐え切れずグラーファイゼンは大破しヴィータも戦意喪失し落下した。

「駄目だ……守れなかった。はやて……皆……ごめん……」

そこへ応援へと駆けつけたはやてが現れた。

「謝ることなんて、なんもあらへん」

そしてヴィータの身体をそつと支えた。

「はやて、リイン」

「はいです」

「鉄槌の騎士ヴィータとグラーファイゼンが、こんなになるまで頑張っ……」

はやてはそつと駆動炉の方を向いた。その先では駆動炉に僅かに刺さるグラーファイゼンの欠片があった。

「それでも壊せへんもんなんで、この世のどこにも、あるわけないやんかつ」

そしてはやてとヴィータの見つめる先で駆動炉は粉々に砕け散った。

「くっ！ 厄介な事を……」

その様子をモニターで見ていたクアットロはすぐさま修復に入った。

「防御機構フル稼働、予備エンジン駆動、自動修復開始。ふふ、まだまだ……っ！ これは」

【Wide Area Search successful. Coordinates are specific. Distance calculated.】

【訳：WAS成功。座標特定、距離算出】

「見つけた」

そう呟くとなのははそつと降り立った。

「エリアサーチ！ まさか気絶したフリをしてずつと私を探してた？ だ、だけどここは最深部。ここまで来られる人間なんて……っ

！
」

そしてなのはは示された床に向かってレイジングハートを構えた。

「壁ぬき？！ まさか、そんな馬鹿げたことが？！
」

その最中クアットロの頭の中に過去の回想で空港でのなのはの打ち抜き映像が再生された。

「あああああ！ 陛下！
」

クアットロの指示を受けなのはに攻撃をしようとするヴィヴィオを必死でダークが遮った。

「ヴィヴィオ！
」

ダークは再び呼びかけ続けた。

「邪魔するなあああ！
」

するとヴィヴィオの周囲を凄まじい衝撃波が発生し始めた。

「くっ！ クロニクル、アクセルモード！
」

【Start up！】

ダークは瞬時にアクセルモードで対抗した。

（アクセルについて来てる？！ 何て速度だ！ 何とかなのはが奴を撃退するまで持ちこたえないと……）

【Clearance confirmation・Firing lock is cancelled.】

【訳：通路の安全確認、ファイアリングロック解除します】

「ブラスター3!!」

なのはは最後のリミットを解除すると砲撃の態勢に入った。

「デバインバスター!!!」

【Five.】

アクセルモードの制限時間がカウントされる中、バスターが発射された。

その中、ダークは必死で速度についてくるヴィヴィオの猛攻を何とか防いでいた。

【Four.】

いくつもの壁を突き破り、一直線にクアットロへ目掛けて向かっていった。

（後4秒……間に合うか……）

【Three.】

「いやああああ！」

【Two】

クアットロの悲鳴が響き渡ったと同時にバスターが直撃した。

【One】

「ドクターの夢が……私達の……世界が……」
その言葉と共にクアットロは意識を失った。

【Time out】

そして制限時間の終わりとともにヴィヴィオの動きが止まった。

「何とか……間に合ったか」

そう言うとダークはその場に崩れた。

「ヴィヴィオ、ダーク君！」

なのはが2人に駆け寄ろうとした。

「ダークパパ、なのはママ……駄目、逃げてえ！」

ヴィヴィオの叫びも虚しくダークとなのはの2人は壁に叩きつけられてしまった。

「駄目なの……制御出来ない……」

そう言うとき再びこちらへ向かってきた。

「くっ！」

（これ以上の長期戦はなのはやヴィヴィオに負担をかける……俺自身いつまで持つか分からない……）

2人は再び防戦一方の戦いを強いられてしまった。その中ダークがなのはに呼びかけた。

「なのは！ 少しの間だけでいい……ヴィヴィオの動きを止めてくれ！」

「分かった」

そう言うとなのははブラスタービットを展開すると何重にもバインドをかけた。

その間にダークの身体の周りを金色の粒子が包み始めた。

（これを使っちゃうとどうなるか分からない……だけどやるしかないんだ！）

「ダーク君、何をするつもりなの？」

「ミラージュの原理を応用してヴィヴィオの体内のレリックを取り除く……」

「でもミラージュは元々身体に負担をかける技……それなのに本来の使用用途以外で使ったら……」

そう言っているうちにダークの腕に粒子が集中していった。

「どうなるか分からない……けどなのはとヴィヴィオにこれ以上の負担をかける訳にはいかない……行くぜヴィヴィオ！」

「パパ、やめて！」

「ダーク君やめて！」

なのはとヴィヴィオの制止を振り切るとダークは手の先から金色の光線を放った。

「スターダスト・ミラージュ！」

そしてそれがヴィヴィオの体内にへと入ると彼女の中のレリックを別の次元へと飛ばし消滅させた。

「くっ！」

そして再びヴィヴィオが光に包まれた。

「ヴィヴィオっ！」

そしてその光の中を掻き分けてこちらへと歩みを進めるヴィヴィオの姿があった。

「パパ！ ママ！」
「ヴィヴィオ！」

ヴィヴィオが2人に駆け寄ったがその瞬間ダークはその場に倒れこんだ。

「パパ！！」
「ダーク君！ しっかりして！」

2人が必死で呼びかけるもののダークからは返事が返ってこず意識も無い状態であった。

そしてはやてを始め救助に駆けつけたフォワード達によってダークは運ばれていった。

レリック事件をきっかけに始まった任務はこうして終わりを迎えた……皆が喜びと安心に浸っていた……1人を除いては……

第21話 護るべきもの（後書き）

何か色々グダグダに……不安になってきました……分かってはいるけど自分の才能の無さに嘆きます。

予定では次が最終回となります^^

今まで見てくださったかた感謝です。これからもよろしく願います^^

最終話 限らない未来へ（前書き）

機動六課と管理局の活躍によってこうしてJ・S事件は終わりを告げた……しかしその喜びや安堵の表情を人々は浮かべていた……六課の人間を除いては……

最終話 限らない未来へ

ミッドチルダ海上 隔離施設……ここには罪を認めた戦闘機人達が収容されていた。そして戦闘機人達と共にルーテシアとアギトもそこにいた。

窓の外を眺めているルーテシアにセインとウエンディが話しかけた。

「まあ、お二人はすぐに出られると思いますけどね」

「精神操作。心神喪失。その他もろもろがあるツスからね」

ルーテシアは振り返るとそつと頷きながら答えた。

「うん」

「アギトさんなんかは、こなくてもよさそうなもんなのに」

「ルールーが心配だったんだよ！それに、これからはちゃんと生きなきゃならねえからな」

照れた表情を見られたく無い為かソッポを向いたアギトを見て2人は笑いあった。

ふと何かに気付いたウエンディがルーテシアに尋ねた。

「あれ？　そーいやルーお嬢様。お母さんは？」

ルーテシアは先程まで向いていた窓の方向を再び向きながら答えた。

「お兄ちゃんと一緒に病院で眠ってる……ちゃんと治療すればレリ

ツクが無くても何時か目を覚ますだろうって……」

「そうっすか、お兄さんとお母さん、早く目を覚ますと良いですね」

「うん」

ルーテシアは僅かに微笑みながら答えた。

ダークを見舞いになのはは新人達の訓練が終わると毎日通い続けていた。

なのははあの日以来眠り続けているダークに向かい話しかけた。

「ダーク君……私がブラスター3を解放してスターライトブレイカーでレリックを破壊していればダーク君は無茶しなかったのに……」（でもそれだとヴィヴィオに大きな負担が掛かっちゃった……でもダーク君が取った方法も1番良い方法じゃないんだよ……）

「早く目を覚ましてよダーク君……私の……思い……を……すう……すう……」

なのはは日ごろの疲れが出たのかその場に寝てしまった。

「ん……ここは……」

なのはが目覚めるとそこは病院のベットであった。

「しまった……あのまま寝ちゃったんだ……でもこっつて……」

なのはが戸惑っていると隣から声が聞こえた。

「おはよう、なのは」

「えっ?! ダーク君……っ!」

なのはが驚き振り向くとそこにはそつと微笑むダークの顔があった。
なのはは涙を流しながら抱きついた。

「やっと目を覚ましてくれた……皆心配したんだよ!」

「ごめんな、でもなのはは毎日訓練が終わってから通ってくれて
たみたいだね」

「どうしてそれを?」

「もし好きな人が同じ状況になったら俺だつてそうするからさ」

さらっと言われた言葉になのはがそつと頬を赤くした。

「そうだけど……今何て言ったの?!」

「恥ずかしい事もう1回言わせる気かよ……」

なのは上目遣い気味に言った。

「にやはは、そう言う事はちゃんと聞きたいなあ」

「これからお前をずっと守っていく……なのは……好きだよ」

その言葉を言うとダークは頬を赤く染めると恥ずかしがって反対側を向いた。

「ダーク君可愛い」

「ったくからかうなよ」それでなのは……答えはどうなんだ？」

ダークが振り向いた瞬間なのは顔が目の前にあり、唇を奪われてしまった。

「これが私の答えだよダーク君」

2人は顔を真っ赤にしながらもう1度キスをした。

そして迎えた機動六課最後の日……はやての挨拶が終わり二次会に向かおうとするフォワードメンバーをなのはが呼び寄せ外へと連れ出した。

フォワードメンバーは一瞬にしてその光景に酔いしれた。そこには沢山の桜が咲き乱れ、花びらが舞っていた。

「この花確か……」

「私やなのはちゃんの故郷の花」

「お別れと、始まりの季節に……つきものの花なんだ」

「おっし、フォワード一同、整列！」

「はい！！」

「さて、まずは4人とも、一年間訓練も任務もよく頑張りました」

「この1年間。あたしはあんまり褒めたことなかったが。ふっ、おまえら、まあ、随分強くなった」

予想外の人からの褒め言葉に流石に戸惑いを隠せないフォワード陣。

「え？」

「辛い訓練、きつい状況、困難な任務。だけど、一生懸命頑張って、負けずに全部クリアしてくれた……皆、本当に強くなった。4人とも、もう立派なストライカーだよ」

その言葉に新人達は目に涙を浮かべた。

「あああ。泣くな馬鹿たれどもが」

そう言うヴィータの目にもうつすらと涙が浮かんでいた。

「はい！」

そして涙をそっと拭うとなのはが続けた。

「さて。せっかくの卒業。せっかくの桜吹雪。湿っぽいのはなしにしよう」

「ああ」

「自分の相棒、連れてきてるだろうな」

「え？」

「この１年間での成長を見る意味でも……そしてお前達の教官としての最後の仕事として……」

その声の主にはいち早く気付いたフェイトが驚きの声を上げた。

「えっ？ えっ？！」

そして言葉のした方向に新人達が振り向くとそこには杖の形態をしたクロニクルを手にするダークの姿があった。

「全力全開！ 手加減なし！ 機動六課で最後の模擬戦！」

フォワードメンバーは互いに顔を見合わせると、元気よく返事をした。

「はい！」

しかしその状況に１人戸惑っている人物がいた。

「全力全開って…聞いてませんよ！？ それにダーク！ 意識不明って聞いてたのにピンピンしてるってどうゆう事？！」

「何だ聞いてなかったのか。ダークは３ヶ月前に目を覚ましてるぞ」

「にやははーちょっとフェイトちゃんと新人達には内緒にしてたんだ。本人が最後のサプライズだって言ってたから」

その言葉を聞いて新人達&フェイトはダークに詰め寄った。
詰め寄る5人にダークは必死で謝った。

「酷いよダーク！ 私達がどれだけ心配してた事が……」

「そうですよダーク隊長！」

「皆心配かけて本当にごめんな」

それを見ていたシグナムが5人を宥めにかかった。

「まあ、許してやれ。ちゃんと目を覚ましたんだしな」

「そうですけど、それに模擬戦の事も聞いて無いですよ！」

戸惑いを隠せないフェイトを尻目に隊長陣4人はバリアジャケットを身に纏った。

「固いこと言うな。せつかくリミッターもとれたんだしよ」

「心配ないない。皆強いんだから」

「はああ」

そんな隊長達の様子を見て困り果てているとヴィヴィオがフェイトに話しかけた。

「フェイトママ、大丈夫」

「え？」

「皆、楽しそうだもん」

「フェイトさんも、お願いします！」

「頑張つて勝ちます！」

「んー、もうー」

フェイトは半ば呆れたような様子だったがそつと笑うとデバイスを起動してバリアジャケットを身に纏った。

「頑張つてダークパパ、なのはママ、フェイトママ」

ヴィヴィオの応援に3人は手を振って答えた。

「それでは」

「レディ」

「ゴー！！」

はやてとギンガの声が響き渡ったと同時に花びらが舞い上がり最後を飾るに相応しい模擬戦が開始された。（完）

最終話 限らない未来へ（後書き）

とても中途半端になってしまった感じがあるな……

この物語としてはこれで終わりとなります^^

ちなみにこの後日話は次の後のIFエントで描いていきます。

今まで読んでくださった方ありがとうございます^^

IFエンディング 高町なのは編（前書き）

ダークが目を覚ましてからのなのはとの中心としたストーリーを書いていきます。

IFエンディング 高町なのは編

ダークが目覚めてから数日が経ったある日、極秘退院したダークはヴィヴィオに会いになのはの部屋へと向かった。

「パパっ！」

ヴィヴィオは部屋へと入ってきたダークに飛びついた。

「ごめんなヴィヴィオ、今まで心配かけて」

「パパ……もうどこにも行かないで……」

「ああ」

そう言うとダークはヴィヴィオの頭をそつと撫でてあげた。とても気持ち良さそうに目を細めるヴィヴィオ。

「後ヴィヴィオ、パパとママから大切なお話があるんだ」

「ん？ なあにダークパパ、なのはママ」

そう言うとダークとなのははベットに座ると自分達の間ヴィヴィオを座らせた。

「ヴィヴィオお話って言うのはね、お前を正式に引き取る事にしたんだよ」

ダークの言葉にいまいち理解が出来ないのか首を傾げるヴィヴィオ。

「簡単に言えばなのはママとダークパパがこれからずっとヴィヴィオと一緒に暮らしていくって事だよ」

次になのが分かりやすいように説明をした。

「これからもずっと？」

「うん、ずっと」

そつとなのはが微笑むとヴィヴィオはなのはに抱きついた。

そしてしばらく部屋で他愛も無い話をした後にダークはそつと立ち上がった。

「ダーク君、それでこれからどうするつもりなの？」

「とりあえずこの鈍った身体を何とかしないといけないしな、しばらくは隠れてリハビリを兼ねて鍛えなおすかな。悪いがはやてにはリハビリと言う名目で長期休暇を取っておいてくれ」

「分かった」

（１ヶ月後、俺の思い出の地……ミッド北西部の丘で待ってる）

（うん、分かった）

そう念話で言い残すとダークは部屋を出て行った。

「ヴィヴィオもパパの事は内緒だよ」

「うん」

「さて、はやてちゃんに報告しに行かないとね」

なのははヴィヴィオを連れ隊長室へと向かった。

そして1ヶ月後……ダークに呼び出されたなのは指定された丘へと到着した。

「来たか、なのは」

その声に振り向くとダークがそこに立っていた。

「ダーク君」

「悪いな、わざわざ呼び出して」

「それで何の用かな？」

ダークはそつとデバイスに手をかけるとセットアップしバリアジャケットを身に纏った。

「ダ、ダーク君?!」

突然の事になのはは驚いた。

「なのは、お前とは真の意味で決着を付けておきたいんだ……10年前……魔導師になって、それからなのは、フェイト、はやて達と戦って俺は強くなった……なのは、お前は守りたい存在であると共に超えたい存在でもあったんだ」

そして剣の形態のクロニクルを構えた。

「ダーク君、私にとってはダーク君はずっと超えたい存在だったよ、この1年間で更に強くなったダーク君と……私は戦いたい！」

そう言うとなのはもバリアジャケットを身に纏い、レイジングハー
トを構えた。

「なのは……この六課での集大成……俺に見せてみる！」

「うん！」

そう言うとなのは2人のエースは模擬戦を開始した。

「はああ！」

「アクセルシューター！」

開始された瞬間に接近しようとするダークに対してなのはは大量の
アクセルシューターを展開するとこちらへと放ってきた。
ダークの迫り来る光弾の間を抜けるとなのはに斬りかかった。

「早い！」

「喰らえ！」

なのはは何とか杖で応戦したがダークとの力の差もあり段々と押さ
れてしまっていた。

「油断したね、ダーク君！」

なのは大きく弧を描かせていた何発かの光弾を後ろから命中させた。

「くっ！」

その衝撃でダークがバランスを崩した瞬間になのははバインドをかけると少し距離をとりつつ砲撃のチャージを始めた。

「エクセリオオオン……バスター！」

なのははもがくダーク目掛けてエクセリオンバスターを放った。

「やべえ！　ぐおおおお！」

ダークはバインドを引き千切ると、迫り来る砲撃目掛けて斬撃を放った。

「引き千切られた？！」

「セイバースラッシュ！」

ダークは砲撃を相殺するとデバイスをバスターモードへと切り替えると砲撃をチャージし始めた。

「相殺された！　でも次はそうは行かないよ！」

それと同時になのはも砲撃のチャージを始めた。

「この一撃で決めてやるよ」

「そうは行かないよダーク君」

そして互いに全てのカートリッジを使うと、互いのデバイスはピンクと黒い魔力光の大きさを増していた。

「デイベイイーン！」

「エターナルー！」

「バスターー！！」

2人の巨大な砲撃が放たれぶつかり合い、凄まじい衝撃が起こった。

「何て威力！」

「くっ………凄い！」

そして徐々にダークの砲撃がなのはの砲撃を押し返し始めた。

「そ、そんな！」

「行けえ！」

次の瞬間なのはの視界は真っ黒になり、意識を失った。

「……な……なのは……」

「ん……」

なのはが目を覚ますと目の前にダークの顔があった。

「ダーク……君」

「ごめんな、ちょっとやり過ぎちゃったよ。怪我は無いかな？」

「うん、大丈夫だけど……ってちょっとダーク君！ 恥ずかしいよ……」

ダークにお姫様抱っこをされている自分の状況を理解したなのは顔を真っ赤にした。

「そうか、なら……」

「……やっぱり……もうちょっとだけこのままにして」

ダークが降ろそうとするとなのはが赤面しつつもそっと呟いた。

そしてダークは訓練していた間に使っていた隠れ家に向かい歩き始めた。

「また負けちゃったよ」

「でも勝ったって言っても結構危なかったぞ」

「ダーク君、今度は負けないよ」

「ああ、だが俺も負けるつもりは無いさ」

「ダーク君……」

「なのは……」

そして無言になり向き合つとそつと唇を重ねた。

そして解散から1年後……ダークとなのはは晴れて結婚式を挙げたのであった。

そこには六課のメンバーは勿論、義母と義妹であるメガーヌとルーテシア、そしてナンバーズも駆けつけてくれたのであった。

「本日より、1ヶ月の間皆の空戦教導を担当する事になったダーク・

アルジェント一等空尉だ」

そして今はダークは1人でも多くの人に自分と同じように何かを守れる力を受け継いでもらう為に日々教導を行っていた。

「結構辛い訓練だとは思うけど、皆付いてくれるか？」

「はい！！」

ダークの言葉に教導生達は元氣良く返事を返した。

「よし、早速始めるぞ！」

そして教導の傍ら、現役で今もなのはと共に空を飛んでいる……大切なものを守る為の力を今は全てのものを守る力へと変えて……これからもずっと……（完）

IFエンディング 高町なのは編（後書き）

しばらく就活やその他色々あってやっと書き上げる事が出来ました
>
<

次の投稿も何時になるかわかりませんが余裕があれば書き上げて投稿します^^

真・最終話 黒き守護者（前書き）

1つの物語として終えた最終話と違ってもう1つの終わりを書きます。ちょうどミラージュを放つ所から分岐を発生させてみました。

真・最終話 黒き守護者

（これで良いんだ……これでヴィヴィオが救えるなら……）

「スターダスト・ミラー……」

ダークが決死の覚悟でミラー・ジュを放とうとした瞬間だった、突然の攻撃にダークの身体が吹き飛ばされてしまった。

「ぐっ……何だ……」

「こんなところで終わりませんわ」

「貴方は！」

そこには先程の砲撃で気絶していたはずのクアットロの姿があった。

「て、てめえ！」

「こうなったら手段を選んではいませんわね」

そう言うとヴィヴィオが胸に手を当て苦しみ始めた。

その様子を見てダークとなのはがクアットロに向かい叫んだ。

「ヴィヴィオ！」

「お前！ ヴィヴィオに何をした！」

「何をつて陛下を解放してあげるんですよ、ちよつと苦しいでしょうけど元に戻るまでの間ですわね」

そう言つと苦しむヴィヴィオを嘲笑つように眺めていた。

「ふざけるな！」

ダークが数発ブレイズシューターを放ったが、クアットロに触れたかと思うと貫通していった。

「くそっ……また幻影か」

そしてダーク達が翻弄されている間にクアットロはヴィヴィオの傍へと近付くとヴィヴィオの体内に埋め込まれたレリックを取り出した。

「陛下あゝもう貴方の役目は終わりですう、後は私にお任せください」

「うううううっあああああ！」

「「ヴィヴィオ！」」

ヴィヴィオの叫び声が響いた瞬間にクアットロとヴィヴィオは光に包まれた。

その中を叫びながらダークとなのはが駆け寄っていった。

「きゃあっ！」

「ぐっ！」

光が輝きを増した瞬間、ダークは気を失ったヴィヴィオを辛うじて受け止める事に成功したものの、なのは共々吹き飛ばされてしまった。

そして光の中から異様な化物の様な姿へと化したクアットロが姿を現した。

「遂に私は無敵の力を手に入れた、まずはその目障りな虫ケラから葬るとしましょうか」

そう言い放つとダークとなのはに向け虹色の光線を放ってきた。

「くそっ……聖王の力を吸収したつてのか……」

「なのは、ヴィヴィオを頼む！」

光線を避けるとダークはヴィヴィオをなのはに預けると攻撃を避けつつ砲撃の体勢に入った。

なのははすぐさま防御魔法を掛けるとそつとヴィヴィオを地面へと置いた。

「ダーク君！」

その声に振り向くとダークの隣ではなのはも砲撃の体勢に入っていた。

「なのは、お前……」

「ダーク君だけに無理はさせない！ 私だってヴィヴィオを守りたいもの」

「……ああ、行くぜなのは！」

ダークとなのはは構えた。

「フルドライブ！ エターナルバスター！！」
「全力全開！ スターライトブレイカー！！」

2人の砲撃が放たれ、クアットロへと命中し爆発を起こした。

ダークは軽くよろけながらも、レイジングハートに寄りかかるよう

にして辛うじて立っているなのはの傍へと駆け寄った。

「なのは！」

「ダーク……君」

ダークの呼び掛けになのはは微笑みを返した。

「全く……無茶するなよ」

「普段の私の気持ち分かったでしょ？」

「うーん、これから気をつけるよ」

しかし次の瞬間、安堵の表情を浮かべていた2人は驚愕の表情へと変わった。

「えっ……」

「どうして……」

爆風が消えた場所には傷1つ負っていないクアットロの姿があった。

「この程度ですかあ」

「何で……直撃したはず……」

そしてクアットロは驚いている2人目掛けて光線を放ってきた。

「きゃあ！」

「くっ！」

2人は光線を受け壁へと叩きつけられてしまった。

（このままじゃあ俺達は確実にやられる……こうなったら最後の切り札を使っしかない！）

ダークは壁から抜け出すとデバイスを持ち直し構えた。

「リミットブレイク……グリッターモード！」

【Glitter Mode！】

その瞬間ダークの身体が金色の光に包まれた。

「これがダーク君の……リミットブレイク……」

（何とか時間内に勝負をつけるしか無い！）

「喰らえ！ エターナルバスター！」

ダークはすぐさま砲撃を放った。

「何て衝撃……」

そして先程よりも巨大な爆発が起こった。だが、クアットロにはダメージを与える事は出来なかった。

「何度やつても無駄だと分からないおバカさんですこと」

突如煙の中から再び光線がダークへと放たれた。

だが、ダークの表面を覆うミラージュ・シールドによって光線は無効化された。

「それはお互い様さ、これならどうだ！ スターダスト・ミラージュ！」

お次にダークは金色の光を手を集めて放った。光の粒子がクアットロを包み込んだもののバリアの様な物を張り巡らせ防がれてしまった。

「成程……その障壁がある限りお前にダメージを与える事は出来な
いって事が……」

（後2分……何とか敵の弱点を探るしか無いか！）

ダークは序々に距離を詰めつつクアットロの攻略法を見出そうとしていた。

互いの障壁の存在でダメージを与える事も受ける事も出来ない……

だがダークには時間制限がありダークの方が不利になりつつあった。

（ようやく見つけた！ 奴の抜け穴を、時間は後1分か……迷ってる時間は無い！）

ダークは加速すると一気に距離を詰めクアットロの懐へと飛び込んだ。

「何をするおつもり？！」

「この距離ならば障壁を張る事は出来まい！」

「だとしてもどうするおつもり？ 貴方のそのモードが切れた瞬間に勝てる可能性も無くなっちゃいますよぉ」

「ならここで決めるだけだ」

それと同時にスターダスト・ミラージュをなのはと意識を取り戻したヴィヴィオに向かって放った。

「パパ？！」

「ダーク君……一体何をするつもりなの？」

2人は金色の輝きに包まれ始めた。

「これしか方法が無いんだ、お前達だけでも逃がせれるなら俺は満

足だ……」

ダークの言葉にヴィヴィオは泣き出してしまいなのはも涙を浮かべながら声を荒げた。

「ダーク君！ 約束守ってくれるんじゃないの？！」

「ごめんな……約束守れそうにないや……」

ダークはそう言うとクロニクルを構えた。

「パパアア！」

「ヴィヴィオ……ママの言う事ちゃんと聞くんだぞ」

2人が最後に見たダークの表情は万遍の笑顔であった。

「さて……共に滅ぼうぜクアットロ！」

「いやあ、やめてええ！」

「ダークネスソウル！！」

「やめてええええええええええ！！！！」

「ブレイカー！！！！」

零距离での砲撃の発射により巨大な爆発が起こり、ゆりかごが爆発を起こした。

「ゆりかご」……爆破しました……」

「何が起こったんだ……」

突然の事に皆呆然としていた。

地上ではフォワード陣が必死に中に残っていたのはとダークに連絡を取っていた。

「そんな……」

「脱出失敗……」

皆が悲しむところへ金色の粒子が出現した。

「これは……」

「ダーク隊長のミラージュ！」

そしてその光の中からはなのはとヴィヴィオの姿が現れた。

「お前達……無事だったのか」

しかし2人は何も言わずただただ泣き崩れてしまっていた。すぐに皆その原因が分かった……何しろミラージュの発動者であるダークの姿がどこにも無かったからであった。

「ダーク隊長……そんな……」

皆もただ泣き崩れるしか無かった。

「さよなら……義母さん……ルー……なのは……」

ダークは暗い闇の中にいた。ダークの命の灯火が消えつつある中、何者かがダークの傍へと近付いてきた。

「あなたは死ぬのにはまだ早い……消えかかっている命を再び灯して差上げます。ただ……少しの間利用させてもらいます……」

「お前は……一体……」

そしてその言葉を最後にダークの意識は無くなった。

「……私は再び蘇った……使命を果たす為に……その為にしばしの間……この体を貸してもらいます」(完)

真・最終話 黒き守護者（後書き）

グダグダになってしまいました><

ここで予告をさせていただきます。

見ての通りと言った感じなのですが、現在この物語の続編を制作しております。

そこへ繋がるEDとして書きました。最後に現れた者の正体とは…
…そしてダークの運命やいかに！ 次回もご期待ください^^

そして今までこの小説を読んでくださった方々、ありがとうございます。
ます。これからも宜しければこのような駄作で良ければお楽しみください。

キャラまとめ（ネタバレ有）（前書き）

一通りの主人公の設定等を劇中で説明出来なかった分の補足や元ネタの紹介も加えていきます。

注：物語のネタバレを含みますので見る方は注意して下さい。

キャラまとめ（ネタバレ有）

ダーク・アルジェント

年齢 19歳

性別 男

出身：第97管理外世界「地球」極東地区日本・海鳴市

階級：一等空尉

役職：戦技教導官

使用デバイス：デスクロニクル・ネクスト

魔法術式：ミッドチルダ式・空戦S+ランク（普段はリミッターが掛けられていて空戦AAランク）

魔導師の青年。別世界の人間だがダーク生誕前に両親が海鳴市に住み始めたので本当の出身は不明。生まれてすぐに両親が死んでから孤児院に預けられるが、地球に任務で来ていたメガーヌ・アルピーノに引き取られて育てられ、その後海鳴市に再び帰郷した。その後転入した小学校でなのはやフェイトと同級生となり、その頃から親友であったが、ダーク自身が魔導師となって共に戦い始めたのは闇の書事件のすぐ後である。

そして魔導師として数々の戦績を残していたが、本編より8年前の事件でなのはを庇い禁断魔法を発動し、暴走し1年間意識不明の大怪我を負うものの、2年間のリハビリを経て見事復活を果たす。

しかし、事件の後遺症の影響で砲撃主流の今までのスタイルではやっていけない事を知り、近距離を基本とするスタイルのチェンジを行い、シグナムからは剣を学び、ヴィータとザフィーラからは近距離戦闘の基礎を学びそれを習得した。

意識していない頃からなのは対して好意を抱いており、魔導師になったきっかけもなのはを護る為である。そして過去の庇つたりしたり、それ以降もリスクを考えずになのはや他の人からも止められなくても、自らを犠牲にしても誰かを護るといった考えは捨ててはいない。それはヴィヴィオの父親変わりとなっても変わらず命を張ってまで助けようとした。

真・ENDでは最終決戦でリミットブレイクのグリッターモードを解放し、零距离でのブレイカーを放ちゆりかごを内部から爆発する程の衝撃を受け、ある人物によって助けられるが行方不明になる。

次はデバイスのモードと技の紹介です

デバイス形状

スタンバイモード

黒い剣型のアクセサリ（普段は首に掛けている）

ソードモード

近距離格闘特化のモードでデバイスは両手剣に変化する。

両手剣だが片手でも扱える程になり、両手剣の威力の高さと片手剣の素早さを両立している。

魔力の消費を最小限に抑える為此の状態で戦う事が多く、この状態からでも魔力消費をかなり落とした砲撃を放つ事は出来る。

バスターモード

遠距離砲撃特化かつてはこのモードを主流にしていた。デバイスは杖に変化する。

この状態で放つ魔力は消費が激しい為連戦が出来ないのでこの形態の後は基本ソードのみで戦う事が多くなる。

アクセルモード

ソードモードから派生する超高機動特化モード。

身体にドーピングの様な効果を与える事で、一時的に急激な速度上昇を可能にしたモードである。

その機動力はフェイトの真・ソニックフォームをも上回る。

だがその機動力と引き換えに身体への負担が大きいのので動き出してから10秒しか維持出来ず、10秒経つと自動的にソードモードに戻りしばらく使用が出来なくなる。

さらに戻った直後はその反動で少しの間硬直がある為、敵を仕留められなかった場合は逆に窮地に陥る事もある。本編では巨人型ガジエット戦、プロト戦、ヴィヴィオ戦3回使用したが、プロトとヴィヴィオにはほぼ同速で動かれ、ピンチに陥ったもののプロトは一刀両断、ヴィヴィオではコントロールしていたクアットロをなのはが撃ち抜く事で難を逃れた。

元ネタは仮面ライダー555のアクセルフォーム。

グリッターモード

ダークとデスクロニクル・ネクストのリミットブレイクモード。制限時間は3分間。

体力と魔力の消費を限界まで引き上げる代わりに得られる桁違いの砲撃を放つ事が可能で、魔力量の制限が無くなるだけでなく、体の

周りをミラーージュシールドでコーティングされる為、グリッターの名の如く金色に輝いており、その耐久力は高く並大抵の攻撃では表面を傷つける事は不可能で万が一耐久以上の攻撃を受けると自動でスターダスト・ミラーージュが発動して回避するので実質上攻撃を当てるのは不可能である。最終決戦では発動しブレイカーを放つものの、瞬時に発動するミラーージュが使われる前にモードが解かれてしまい回避出来ずに致命傷を負ってしまった。

元ネタはウルトラマンティガのグリッターティガ。

剣技

鬼炎斬

修羅を纏い、剣を構えて螺旋を描くように回転し周りの敵を斬る技。主に囲まれた時や敵から来るときに待ち受ける時に使われる。ガリユー戦とシグナムとの模擬戦で使われ、ガリユー戦では飛び掛ってきたガリユーを弾き飛ばし、シグナム戦では紫電一閃と相打ちした。元ネタは英雄伝説 空の軌跡の剣帝レーヴェの使用する同名の技。

セイバースラッシュ

剣を大きく振るう事で放たれる斬撃である。若干尾魔力を付加させる事で射程距離がそれなりにあり少し遠くにいる敵にさえあたる事もある。威力も高く、互いにリミッターが掛かっている状態でシグナムの飛竜一閃と相打ちした。リミッターが外れた時にはなのはのエクセリオンバスターと相殺した。

元ネタは遊戯王カードの同名カードから。

使用魔法

ブレイズシューター

射撃魔法

消費魔力 小（ソード時）中（バスター時）

アクセルシューターの強化タイプの魔法。

弾速、誘導性を上昇させた代わりに消費魔力が上がっている。

エターナルバスター

直射型砲撃魔法

消費魔力 大（バスター時）特大（リミッターブレイク時）

ダークの主砲の砲撃魔法。威力や範囲を自由自在に操れそれにより魔力消費も変わる。

本編ではオットー&ディード、白天王、なのは、クアットロに対して使われた。

本気の威力でなくても白天王を気絶させる等威力は相当高く、なのはと本気で撃ち合った時にはなのはのデイバインバスターを押し返した。

クアットロに対してもなのはのスターライトブレイカーと共に放たれたが傷1つ付ける事は出来なかった。

とても分かりづらいもののエターナルの由来はエンシェント・フェアリー・ドラゴンの攻撃名のエターナル・サンシャインから取りまとしたwwww

ダークネスソウルブレイカー

集束型砲撃魔法

消費魔力 極大

ダーク最大の威力を誇る最強の魔法。リミッターブレイクモードでのみ使用可能。

高町なのはのスターライトブレイカーと同等、それ以上の威力があると言われている。

クアットロに対して使われ、零距离で放つ事で障壁の張れない場所で放ち撃破する事に成功する。

ソニックムーブ

移動魔法

消費魔力 極小

高速移動魔法。フェイトのものと同様に瞬間移動したかのように見えるほど、高速の移動を行う。

ダークのは少し移動速度と消費魔力を下げた代わりに、何度も瞬時に使えるようにしてソードモードと組み合わせ使用することが多い。

スターダスト・ミラージュ

移動魔法

消費魔力 小

バスターモード時にのみ使用可能。体を粒子化し瞬間移動する技。出現時に粒子が盾の役割を果たす為不意打ちにも強い。

さらにソニッククムープとは違い瞬間移動なので離れた場所に駆けつける時等に使用される。

魔力消費は少なくは無いが、それ以上に身体の方に大きな負担となるので存在を知っているはやてには禁止されている技である。

リスクは大きいものの凡庸性が高く攻撃にも使える技であり、その場合は相手を異次元へと飛ばし消滅させる技であるが普段使用する以上に身体に負担が掛かる、ヴィヴィオの体内に埋め込まれたレリックを取り除くのに使われ、クアットロにも使用したが通用しなかった。

名前の由来はシューティング・スター・ドラゴンの攻撃名

元ネタはガンダム00のダブルオーガンダム等のトランザム

攻撃時の元ネタはウルトラマンダイナのレボリウム・ウェーブ

ダメージ・ドレイン

補助魔法

消費魔力 無し

使用者の手が触れた相手の負ったダメージを自らの体に移し変える技。一歩間違えば使用者も死に至る可能性のある危険な技である。

8年前の事件以来ダーク自らが封印している技である。

キャラまとめ（ネタバレ有）（後書き）

これでキャラの設定は以上ですw

続編はいつになるか未定ですが現在制作中です^^

これからもよろしく願います

第0話 蘇る闇（前書き）

クアットロとの戦闘で相殺しあい瀕死の重傷を負ったダークは闇の
中を漂っていた。

第0話 蘇る闇

「ここは……俺は死んだのか……」

ダークは暗闇の中自らの存在がこの世から消えつつある事を悟った。

「僅かでも意識を保ってるなんてな……それだけでも奇跡だが……もうここまでか……」

そして段々と身体が粒子の様に細くなり消滅しかけた瞬間

「何だ……？」

突如、ダークの身体を白銀の光が包み込んだ。

「何が起こったんだ……」

その言葉に答えるように光が集うと人影へと変化し、そつと近付いた。

「お前は……誰だ?!」

「私が何者なのか分からない……だけど……」

そう言うとその人影はうつすらと光る手をダークの身体にそつと置いた。

「何を……するんだ……」

するとみるみる内にダークの身体の粒子化が止まり再生を始めた。

「今、貴方の身体を再生しています……」

「ありがとう……だがどうして俺を助けるんだ？ 君は一体……」

「それは……私の使命の為……」

そう言うで一瞬こちらを見るとそっともう片方の手を重ねた。

「使命……一体何をするつもりだ？」

「その為に……貴方の身体を少しの間お借りします」

「何?!」

そう言うたダークの身体が再生された瞬間に人影がダークの身体の中へと取り込まれるように吸収されていた。

そしてダーク失踪から半年後……ちょうど六課解散の日……
ミッドチルダの町並を眺める、凜とした表情の女性が黒き髪を靡かせながらビルの上に立っていた。

「早速現れたか……さて、使命を果たす為に……そろそろ行くつもりでしょう」

そう言うとき背中から黒い羽を出現させるとそっと飛び立った。

第0話 蘇る闇（後書き）

とても短いですが、プロローグって事で出来ればダークと謎の人物以外は出したくなかったのが原因です……オリジナルってのはやっぱり大変ですねw

時間が取れないものありますが……とても不安ですがこれからよろしくお願いします^^

第1話 邪悪な影（前書き）

六課解散の日……模擬戦を終えたなのはは墓地へと出向いていた。

第1話 邪悪な影

なのはのその手には花が握られており1つの慰霊碑の前に立つとその前に添えた。

「ダーク君……」

なのはは涙を流しながら慰霊碑の前に崩れ落ちた。あれからブラスタ―3の反動により、休養を強いられた間も訓練が終わった後も毎日欠かさず慰霊碑の前に来てはダークの帰りを待っていたのであった。

「絶対帰ってきてくれるよね……必ずダーク君は生きてるんだから……」

涙を拭い立ち上がったなのははそっと立ち去ろうとした瞬間、何かを感じ取ったのか振り向き際に身構えた。

「貴方は誰?!」

するとそこには自分に酷似した少女が立っていた。

その少女はなのはの質問に答えるように静かに名を名乗る。

「そうですね……シュテル・ザ・デストラクター星光の殲滅者……とても名乗っておきましょう……」

なのははシュテルの姿に戸惑いつつもバリアジャケットを身に纏い、杖の形状となったレイジングハート・エクセリオンを構えた。

「貴方の目的は？」

「大いなる闇の復活……そしてそれを邪魔する脅威を撃ち砕く……それが私の使命」

「そんな事させないよ！」

「ならば貴方を撃ち砕くのみ」

そう言うとシュテルもレイジングハートに酷似した杖【ルシフェリオン・トゥールース】を構えた。

「アクセルシューター！」

飛び立ったシュテルに対してなのはは距離をとりつつ無数の光弾を放った。

「パイロシューター！」

すぐさまシュテルも無数の光弾を放ち応戦していった。

なのはとシュテルが激戦を繰り広げている中、別の場所では金色と蒼色の閃光が何度もぶつかり合っていた。

（この子……速い！）

（くっ！ 僕のスピードについてくるなんて……）

フェイトはキャロとエリオを見送った帰り道に突如、レヴィ・ザ・スラッシャー雷刃の襲撃者と名乗る人物に攻撃を受け応戦しているところである。

「ハーケンセイバー！」

フェイトは自らのデバイスであるバルディッシュ・アサルトのモードを変更しハーケンセイバーを放った。

「光翼斬！」

レヴィの斧型のデバイス【バルニフィカス・ネクサス】から放たれた一撃によって相殺されてしまった。

「くっ……プラスマランサー！」

「電刃衝！」

光弾を放ち、けん制し合いながら互いに一瞬のチャンスをつかがう膠着状態へと入ったのである。

2人が足止めを受けている時、はやてもまた自らに酷似した少女と対立していた。

「あんたは一体何もんや！ 目的はなんや！」

その言葉にはやてに似た少女はふっと笑うと見下したような表情を浮かべながら答えた。

「我が名は閻統べる王。ロード・ディアーチェ我が目的はかつて塵芥共によって封印された閻の復活よ！」

「私らが封印した……もしかして閻の書の閻の事か！」

思わぬ言葉に驚きを隠せないはやてを尻目にディアーチェは続けた。

「そう、もうすぐ閻は復活を遂げる……そしてその邪魔となる貴様らを地獄へと叩き落とすためにな！」

「地獄に落ちるんはあんた等や！ 閻の書の閻の復活なんてさせへん！」

「ふっ……ぜいぜい足掻くがいい！」

ディアーチェはデバイス【エルシニアクロイツ・ネオ】を振るい、

無数の光弾を出現させるとはやてに向かい放った。

「行くよ、リイン！」

（はいです！）

そう言うとはやてはシュベルトクロイツを構えながら無数の光弾を出現させるとディアーチェに放ちながら隙を作りつつ、なのはへと通信を行った。

こうしている間にも3人の魔導師達が不在となった六課隊舎には巨大な影が迫っていた。

第1話 邪悪な影（後書き）

やっと更新できました……短いですが……

何とか時間を見ては書けるように頑張ります^^

マテリアル達が分からない人の為にちょっと補足をここで書いておきますが、この子達はゲーム版に登場するキャラクター達でその性質から出てきてもらいましたw

これからも宜しくお願いします^^

第2話 規格外の存在（前書き）

3人がマテリアルと戦う中1つの戦いが終わりを告げようとしていた。

第2話 規格外の存在

その頃……なのはとシュテルは一定の距離を保つと杖を構えなおした。

「このままじゃあ埒が明かない……こうなったら次の一撃で決める！」

「そうですね……」

そう言うお互いに砲撃の体勢に入るとチャージを始めた。

「デイベイン……バスター！」

「ブラスト……ファイアー！」

ピンク色と夕日のようなオレンジ色の光線がぶつかり合い凄まじい爆発が起きた。

その衝撃で地上に落下した2人は何とか立ち上がると再びデバイスを構えた。

「くっ……強い……」

「やりますね……ですがここまでのようですね……」

そう言うシュテルは構えていた杖を下ろすと何も言わず飛び立ってしまった。

「待ちなさい！」

なのははすぐさま追いかけてようしたが、その時はやてから緊急通信が入った。

「なのはちゃん！ 応答して、なのはちゃん！」

「はやてちゃん、どうしたの？！」

「緊急事態や！ すぐに六課隊舎へ戻ってきて！」

「何があつたの？」

「……何者かによる襲撃や、ヴィータとシグナムが応戦してるけど状況はあんまり良くない。私もフェイトちゃんも今足止めを受けて行ける状態じゃないん」

「足止めって……まさか私達に似た女の子達の事？」

「もしかしてなのはちゃんも足止めを？」

「うん、でもさっき退けたとこだからすぐに向かうね」

「お願いや！ 私も退けたらすぐに行くから」

「分かった」

なのはは通信を終えると急いで六課隊舎へ目掛けて飛び立った。

六課隊舎へと駆けつけるとなのはは驚きの表情に変わった。

「そんな……」

目の前にはかつて封印したはずの闇の書の闇が以前よりおぞましい姿で蠢いていた。

「ヴィータちゃん！ シグナムさん！」

なのはが見るとヴィータとシグナムが囚われの身となっていた。すぐさま2人を解放する為に光弾を複数放った。

「待つてで、シュート！」

しかし触手なのはの攻撃をものともせず簡単に打ち消してしまっ

た。
「下手に砲撃を放てばシグナムさん達が……一体どうすれば……」

なのは何とかこの状況の打破を考えていた。

「目標発見……撃破します」

その時、なのはの後方で何者かがそつと複数のスフィアを形成していた。

「っ何?!」

「……エターナルバスター」

なのはが気付き振り返った瞬間、なのはの僅か上空から複数の光線が放たれ、闇の書の闇の中心部へと命中すると爆発を起こした。

「ヴィータちゃん! シグナムさん!」

なのはの呼びかけに答えるように煙の中から2人が現れた。

「2人共大丈夫?」

「ああ、何とかな……」

「あの光線をまともに受けていればマジでヤバかったかもな……」

そして煙が無くなる頃には既に闇の書の闇の姿は無かった。

「……まだ……不完全か……」

そう呟くと光線を放った人物は何かを確認するとそつと飛び去ろうとした。

「おいテメエ！ 待ちやがれ！」

その人物の前にヴィータが割って入りグラーフアイゼンを叩きつけた。

「……」

その無言でシールドを展開するとヴィータの一撃を簡単に弾きかえした。

「ぐっ！」

「話を聞かせてもらおうか！」

すぐさまシグナムが斬りかかった。

「……私の邪魔をしないでください」

「何！」

そう言うのと背中の中の羽の1つが剣柄の様な形へと変化し、そこから黒い刃が出現し斬撃を受け止めた。

「何故お前がここにいるんだ……リインフォース！」

シグナムの問い掛けにリインフォースは不思議そうな表情をしながら答えた。

「貴方は一体何者ですか？」

「何だと?!」

リインフォースはシグナムを弾き飛ばすと飛び立とうとした。だが瞬間その後方からなのはが砲撃を放った。

「エクセリオンバスター！」

「っ！」

不意を突かれたリインフォースはエクセリオンバスターの直撃を受けてしまった。

「この程度……」

そう言うのと直撃を受けた部分の傷はすでに修復されていた。

「再生した?!」

「邪魔をするというのなら……」

そして複数のスフィアを形成し、なのはに向かい砲撃を放とうとした。

(……なのは……なのは！……)

「くっ！」

すると突然リインは頭を押さえて苦しみ始めた。

「何が起こってるんだ？」

「まさか……あいつ！」

戸惑っているなのはと引き換えにシグナムとヴィータは何かを感じとっていた。

「うう……お前は一体……」

そう言い放つと苦しみながら飛び立っていった。

「待つて！ どうして貴方はダーク君の技を使えるの？！」

なのはの問いかけが虚しく響いていた。

その後、なのは達はマテリアル達を退けたフェイトとはやてと合流し先程の一件を話し合っていた。

2人共驚きの表情を隠せなかったもののすぐさま事態を整理し始めた。

「闇の書の闇の復活……原因は分からんけどその影響でラインが復活したっていうのはまだ分かるんだけど」

「問題はラインが私達の事を覚えて無い、それにもしかしたら自分の事も覚えて無いって事」

「それともう一つ……ダークのエターナルバスターを使ったってとこだね」

「そう、10年前に戦っていた私達の技を使うならともかく……」

なのはとフェイトが戸惑いを隠せないでいるとシグナムがはやてにそつと話しかけた。

「主ははやて、もしかしてアルジェントは……」

「うん、やっぱりそう考えるのが普通かな」

「はやてちゃん、どうゆう事？」

「恐らくやけどダークはリインに取り込まれてる可能性が高い」

はやての言葉に皆驚愕の表情になった。

「えっ！」

「確かにあんたが呼びかけた瞬間に苦しみ始めたよね」

シグナムの肩に座っていたアギトがそう言いながらなのはを見た。

「つまりダークの潜在意識が残ってるって事や」

「って事はダークは生きてるって事？」

なのはの問いかけに難しい表情をするはやて。

「それは何ともいえへん……でも可能性としてはありえる話や」

「何とかして解放する方法は無いの？」

「それは……」

対処策を話し合っていると突然警報が鳴り響き、すぐさまシャルから通信が入った。

《はやてちゃん、スカリエッティがアジトとして使っていた場所の周辺で闇の書の闇が出現したわ》

リンの攻撃で闇の書の闇が完全に消滅していなかった事にその場にいた3人は驚きを隠せなかった。

「あの時完全には消滅してなかったのか?!」

《現場の様子はどうなってる?》

《すでに避難は完了してるわ》

《ありがとな、シャルとザフィーラはここで待機しててな》

《分かりました》

はやては現場の状況を確認し、通信を終えるとこちらへと向いた。

「今のところやとリンが完全に味方がまだ分らん、やけど今はリンもそうやけどもっとう対処せなあかん対象がある」

「でもはやて、どうするんだ? あいつら私達の攻撃じゃあビクともしないんじゃないあ……」

「確かに前に比べて遥かに強力になってるのは確かや……やけどそれは私達にも言える事や」

「それに闇の書の闇もまだ完全には復活出来てへん……更にさっきのラインのダメージも回復出来てない今がチャンスやと思う」

「うん、今のうちに倒さないと取り返しが付かなくなる」

「皆出動や！」

「」「」「了解！」「」「」

はやての言葉に皆答えると闇の書の闇の出現場所へと急行した。

第2話 規格外の存在（後書き）

時間かかった上にクオリティが……こんな出来で後半がいただけるか凄
い不安ですがw

またいつ時間が取れるか分からないので更新は相変わらず不定期に
なります><

読者の方々、このような作品を読んでくださってありがとうございます
ます。これからもよろしく願いします^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1722o/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS The Phantom Darkness

2011年11月15日15時11分発行